

ち中教正に補し明治三十五年四月病歿した。年六十五。著す所「篁邨詩抄」三卷「和歌綾玉集」一卷ある。

故大和田建樹

オオワダタケキ(國)

舊宇和島藩士大和田水雲の子、安政四年四月二十九日その城下に生れた。幼時より和歌を好み、完戸千里、穂積重樹、清家堅庭等に學んだ。年十三の時七夕琴の題に「夜もすがら星の手向に弾く琴の音を吹きあげよ四方の秋風」の詠がある。人その奇才に驚いた。兼ねて漢學を藩校に修め又藩の國學校に入り後獨學によつて斯道の振張に力を盡した。而して最も敬神尊王を唱へ、慷慨國家を憂へて止まない。大に時弊を嘲つた。年十八の時英學に志し翌年廣島外國語學校に入り、専ら文學を研究し、後に學資が足らないので、一時雜誌記者となつた。明治十二年上京して交詞社の書記となり傍ら學に力めた。後東京大學の編輯所に職を奉じ尋いで古典講習科の講師に擧げられ、高等師範學

ために讀んで聞かせたので、氏は其れを一つの樂しみとして居つた。それがもつて非常に畫が好きになつて夢中に暮した。それから生活は轉々と變化して創作に従事し小説、戯曲、詩、童話對話、評論、感想、日記、油繪、デッサン等多くの作をもつて居る。本籍地は神田區五軒町十四番地であり、後神田區龜住町一番地にあつたが、其の後の住所は長く不定であつた。尙氏は一般からは表現派の戯曲家として認められ戯曲「幻想時代」は其著である。

現住所 東京市本郷區四ノ四七荒木芳造方

故大藪文雄

オオヤブフミオ(國)

播磨明石町岩屋神社の神職で眞玉舎と稱し、篁邨と號し、國學を大國隆正に學び、漢學を梁田葦洲に受け、詩歌を巧にし又書を善くし、明治十九年明治天皇山陽道巡幸の時、淨土光明寺を以て行在所に充てられたとき氏は謹んで行在所の三大字を大書し、叙覽を得て褒旨を受けたさうである。の

校、女子高等師範學校等の教授となり、二十四年之を辭してからは再び官途に就かない。僅かに跡見高等女學校及雙葉高等女學校の講師となり、少數の生徒に自宅教授をしたる外専ら著述を業とした。著書は甚だ多く「古文讀本」、「明治唱歌」幼稚の曲「漁火」「和文典」「謡曲通解」「帝國唱歌」「和文學史」「歐米名家詩集」「新文林」「應用歌學」「新體詩學」「修辭學」「日本大辭典」「作文寶典」「雪月花」「山下水」「歌謡類聚」「日本大文學史」「深山櫻」「謡曲文粹」等甚多い。氏の平明な文章が一般に影響して後年の寫實文を誘致した効果は今更めて言ふまでも無く、三歳の童子にも口吟された鐵道唱歌や櫻井訣別の唱歌が如何に教育的効果のあつたかといふことは更に言ふまでも無いことである。謡曲通解や能樂の栞等が愛謡者にとつて有益な本であることは斯道數寄者の大に感じてゐるところである。氏の謡曲に對する理解は單に書物の上のみでは無く實演の結果修習したことが尊いのである。氏は觀世流に達して、音吐

朗々玄人達も舌を巻くほどの節廻しを誦ひ、舞臺に立つても氣品があり、其技よく板にのり樂器に合つて觀者を驚嘆せしめること屢々であつた。晩年脊髓病を患ひ、横臥起つことが出来ぬ。偶々海軍省の囑に應じて海軍々歌を作り、勉強して筆を止めない。ために大に病勢を加へた。その起てないといふことを知つたので急に家人をして親戚知己門人を病床に招き永訣を告げ、平生得意の謡曲を朗吟し、曲終つて遂に瞑した。時に四十三年十月一日、享年五十四。

川のながれ

一、足ぶみとゞろに躍りゆくは

心もたのしき水の旅路

木の葉に咽びし聲は昨日

今日こそゆたけき河に海に

二、わがゆく學の道もこれぞ

きのふの麓は今日の高嶺

かづらにすがりつ石によぢつ

つひには八重たつ雲の上に

岡榮一郎

オカエイイチロウ(戯)

明治二十三年十二月二日金澤市に生れ大阪に育ち東京帝國大學英文科を卒業し、脚本「意地」「松永彈正」其の他の文藝評論がある。この松永彈正を見るに、十分に張り切つたやうな意志の力が強く働いて居る。松永彈正の強さよりも強い彈正の全人格を現はさうとする注意が十分行きわたつてゐる。

現住所 東京市本郷區森川町一公盛館方

岡鬼太郎

オカオニタロウ(劇)

本名は嘉太郎、明治五年八月東京芝山内に生れた。夙に慶應義塾大學に學んで之を卒業し、劇界に入り「晝夜帯」「もやひ傘」「春色輪柳」「合三味線」「腹の皮」「江戸紫」「紅筆草紙」其の他の著がある。現に松竹合名會社演藝顧問東京寄席演藝株式會社顧問として力を盡して居る。
震災前住所 東京市淺草區今戸町二九

岡倉秋水

オカクラシユウスイ(畫)

名は覺平。明治元年十二月福井市老松下町に生れ夙に日本畫の研究に従ひ、後に狩野芳崖に學び、學習院教授となり、日月會の幹事長となつた。審美會、日月會等に出品した事がある。

現住所 東京市神田區淡路町一〇一

故岡倉天心

オカクラテンシン(評)

名は覺三、越前の福井藩士であつて、文久二年横濱に生れ、夙に上京して大學南校に入つて英文學を修め明治十三年優等の成績をもつて文科大学理財科を卒業した。年僅かに十九歳であつた。氏の父勘兵衛氏は明治維新後横濱に移り住んで生糸商を營んでゐたために氏は八九歳の頃鶴見の長延寺に托せられて漢籍を學んだ。大學在學中外國教師フエノロサの感化によつて大に美術上の理解と興味とを持つやうになり、爾來日本美術の研究に志して、古美術の復興と新美術の發達とを圖つた。

大學卒業後は直ちに文部省に入つて十七年圖書取調係の委員となり、一方にはフエノロサ氏創立の鑑畫會に關係したが、次いで十九年官命を帯びて西歐美術を視察し、歸朝後東京美術學校創立のために盡力し、二十二年濱尾新氏校長となり、氏は其の下に幹事となつて力を盡すところあつたが、濱尾氏去つた後に氏は其の校長の職に就いた。狩野芳崖、橋本雅邦、高村光雲、海野勝珉等の諸大家はこの時教授に擧げられて長らくの不遇より救はれたのであつた。爾後橋本雅邦寺崎廣葉等と共に三十年其の職を辭するまで美術界の新人を養成することに力を盡し、また日本古美術品の海外に流失するのを慨して、九鬼隆一氏等と謀つて全國寶物取調局を内務省に設け、又古社寺保存法の制定にも與つて力あつた。又美術雜誌「國華」を發刊し、博物館美術部長ともなつた。横山大觀、下村觀山、菱田春草等は皆氏の薰陶をうけた俊才であつた。三十一年美術學校紛擾のため同校を退き同志と共に谷中に美術院を興した。其の後印度に

渡り、また米國ボストン博物館に招聘せられて東洋部の顧問となり、尋いで東洋部長に進んだが、大正二年病に罹つて四月歸朝し、常陸五浦に靜養し、次いで越後赤倉に移つたが九月二日遂に年五十六歳で歿した。尙五浦に隱退後も時に出で、は東京文科大學に泰東巧藝史を講じ、文展第一回より三回まで日本畫部の審査委員となつた。氏は實に日本古美術と新美術と双方の大恩人であり、明治美術史中の大立物である。著書に「覺醒せる日本」「茶の湯」「東洋の理想」等がある。後門下生等氏の十年忌を記念するため岡倉天心全集を出版した。東京高等師範學校の英語科教授で我が國言語學の權威である岡倉由三郎氏は實に天心居士の實弟である。

岡崎春石

オカザキシユンセキ(詩)

名は壯、東京の詩人、「雅文會」の顧問として同會の爲に盡し「大正詩文」や「斯文」にその作詩を發表し、又批評家として重きを置かれてゐる。

新年作

東風萬里不揚塵、佳氣氤氳繞紫宸、
 大使臨盟君命重、儲皇攝政國光新、
 雕車寶馬方乘旦、雪片梅花暗動春、
 生遇太平臣亦幸、恩波暖透布衣身、
 詩壇の巨擘久保天隨氏は「前聯に時事を叙述し、
 後聯に實景を描寫し、典切精當にして移易すべからず」と評してゐる。

謝須永輒齋贈筭

故人有高懷、園養千畝竹、清風日滿軒、
 宛如在淇澳、昨夜春雷轟、暖氣入林麓、
 籜龍忽破苔、頭角青簇簇、百里遠餉吾、
 厚意眞可掬、挺爾千霄姿、開籃先驚目、
 珍味賑寒厨、大嚼飽腹、朗誦香山句、
 經時不思肉、
 情意藹然として實に神味限り無きものがある。
 現住所 東京市

小笠原長幹 オガサワラチヨウカン(彫)

伯爵の彫刻家として知られてゐる氏は北村四海に就て塑造を學び、文展へは第八回に「もゝのはな」第九回に「月朧」「目覺めたるサイキ」第十回に「無題」第十一回に「妙さん」を出し、大いに世の注意を惹いた。貞子夫人も藝術に興味を有し、西洋畫の大家滿谷國四郎に就て洋畫を學んだ。
 現住所 東京市牛込區河田町

小笠原長生 オガサワラチヨウセイ(文)

幼名賢之進又は捨丸と稱し慶應三年十一月二十日唐津に生れた。祖父は唐津藩小笠原長國封邑六萬石を領した。氏は其の嫡孫にして長行の長男である。明治六年先代長國の家督を相続し同十七年子爵を授けられた。夙に海軍兵學校に入り二十年卒業して海軍少尉候補生となり累進して海軍少將に陞つた。日清の役勳功を樹て功五級に叙し金鷄勳章並に勳六等瑞寶章を、日露の役には勳三等に叙し功四級金鷄勳章を賜はり後海軍々令部に出仕し東京御學問所幹事となつた。氏はまた文學を好み

る。現に太平洋畫會々員である。

現住所 東京府下代々木山谷一四三

尾形雲海 オガタウンカイ(書)

文章に長し金波樓主人と號し著書も尠く無いが「日本海戰史」は最も有名なるものである。日清戰史編纂に與つたが氏の黄海々戰記一度世に出ると各新聞に轉載せられ時の文學者をして稱嘆せしめた。
 妹艶子は海軍中將海軍大學校長にして有名な日蓮主義者佐藤鐵太郎の夫人である。
 現住所 東京府下豊多摩代々幡幡ヶ谷九

岡 精一 オカセイイチ(畫)

明治元年六月東京に生れ、十五年頃西洋畫の大家淺井忠、本多錦吉郎等につき、二十二年、更に小山正太郎氏の不同舎に移つた。此年、馬見所の明治美術會に出品し、二十三年の博覽會には「山内一豊の妻」を出して褒賞を得た。三十四年米國、三十六年英國に行き、後巴里に來てジュリアンに入學し、ジャン・ポール・ローランスに學び、四十年歸朝した。爾來太平洋畫會展覽會等に作品を發表し、又同會の研究所にデッサンを教へてゐる

氏は東京の書家、名は榮性、雲海は其號で、別に陽宜の號がある。安政六年八月十二日千葉縣安房郡豊田村小戸に生れた。父は尾形文治と言ふ石工で有名な人であつた。氏は年甫めて九歳の時入木道に入り、高野山の古學頭入木道正統四十二世摩尼慶明に従ひ明治十五年其皆傳を受け入木正統四十三世となつた。其書風高祖弘法大師の流を汲み其秘法を得、而も自ら售るを好まない。又鐵筆を嗜み湖上笠翁の遺風を慕つた。其門下に筆意點を發明し草書一定法を案出したる東京書法學校校長植竹雲邦をはじめ京都泉涌寺長老鼎龍克其他數千人を有した。其鎮火龍の如きは仁我阿闍梨相傳の秘法で、一筆よく龍鱗を現し常に畫工の舌を卷いて驚く所である。
 震災前の住所 東京市淺草區南松山町一八

岡田起作

オカダキサク(書)

號は濯水、氏は京都の人、嘉永五年丹後舞鶴に生れ、後東京に出で、三島中洲翁について漢學を修め詩作をも試みた。明治十五年栃木縣師範學校及び中學校に教授し、二十四年以降東京女子高等師範學校教師となつてゐる。阪正臣小野鷲堂大口鯛二、尾上柴舟、岡山高蔭、千葉胤明、加藤義清等の諸家と筆法の近似點は見出し兼ねるが筆力は獨得でしつかりしたものであり。著書に高等女學校用習字教科書がある。丹羽海鶴、岡田正美氏等と共に文部省中等習字教員の檢定委員である。
現住所 東京市麴町區下六番町四

故尾形月耕

オガタゲツコウ(畫)

本名は田井正之助と言つて、安政六年九月江戸京橋區彌左衛門町に生れ、全く獨學で浮世繪を畫ぎ明治の初期より既に一家をなして、繪草子、雜誌小説などの質描をなし、後繪入朝野新聞其の他五

六の新聞に挿繪を描いて其の名を知られた。明治三十一年日本美術院の創立した當時其の正員に列し、盛んに江戸風俗の畫を出品して好評を得たものである。内外の博覽會等に出席して受賞すること數十回の多きに及び、文部省美術展覽會には第六回に「山王祭」を出して三等賞に入選した。嗣子尾形月三氏幼少より畫をよくして、文展其の他の各種展覽會に出品して常に優賞を得てゐる。門下には金森南耕、福永公美の外、日本美術院同人として日本畫に名聲を博してゐる山村耕花も其の門人である。

尾形月三

オガタゲツゾウ(畫)

本名は田井正子明治二十年九月東京橋區桶町に生れ、日本畫の初歩を斯道の大家父尾形月耕に學び餘は全く獨立研究し、十三歳の時以來日本美術院日本美術協會等に出品して屢々受賞し、文展へは第二回に「達智門の圖」を出して直に三等賞を得第三回に「與市宗高圖」第四回に「葵祭」第八回

に「遮那王」第九回に「忠度」第十回に「軍の占形」を出し何れも觀覽者の注意を惹いた。

現住所 東京市牛込區築土前町三〇

岡田三郎

オカダサブロウ(小)

明治二十三年二月北海道松前郡福山町に生れ、文學に志して早稻田大學英文科を卒業し、嘗つて博文館に入つて雜誌「文章世界」を編輯したことがある。短篇集「涯無き路」長篇「青春」等の著書の外多くの作を發表して居る。大正十一年歐洲に留學し長く佛國に在つて研精した。

現住所 東京市外雜司ヶ谷水久保一四三

岡田三郎助

オカダサブロウスケ(畫)

明治二年一月佐賀市に生れ、初め大野幸彦、堀江正章、黒田清輝、久米桂一郎等に就いて西洋畫を學び、明治三十年、佛國に留學してラファエル・コランの門に入つた。歸つて東京美術學校教授に任じ、文展へは第一回以來洋畫部審査員となつた

作品は文展第一回に「大澤博士肖像」「高橋義雄氏肖像」第二回に「小池博士肖像」「傾く日」「萩」第三回に「五葉蔦」「大隈伯爵夫人肖像」「少女」第四回に「ひなた」「くもり」第五回に「浴場にて」第六回に「偶成」第七回に「凝視」「女の顔」第八回に「たそがれ時」第九回に「黒き帯」「川邊」「五十島の雪」第十回に「水浴の前」「よね桃の林」第十一回に「初夏」「花野」等がある。美術學校の外、本郷洋畫研究所、同遊谷女子部、及び女子美術學校等に教鞭を執つてゐる。有馬さといは氏の門下生である。大正十二年大震災後秋季に開催された日本美術展覽會の審査員を囑託された。現に帝國美術院會員である。大正十三年五月火を失して舊作の多くを焼き火傷を負うた。

現住所 東京市下澁谷伊達跡一八三七

岡田蘇水

オカダスイ(畫)

明治十三年栃木縣に生れ、加藤欽古、佐竹永湖に學び南宗畫會評議員となり、諸所の展覽會に於て

屢々受賞し、文展へは、第六回に「模花書屋」第七回に「松溪樓閣」第八回に「夏山避暑」第九回に「秋山閑居圖」第十回に「秋嶺橫靄圖」第十一回に「秋山行旅」を出し、常に好評を博した。東京女子高等師範學校圖畫科教官を囑托された事もある。餘技として漢詩を善くし其作少く無い。

贈漁夫似福田浩湖

投老江湖吐氣新、封候未敢換垂綸、
世間無復劉文叔、不問羊裘獨釣人。

贈増田先生

間臥高樓夢亦清、時將詩筆樂斯生、
東都風月饒新賦、南國煙霞賸舊情、
世故閱來知眼冷、官途辭去覺身輕、
經綸好付兒曹手、未向人間說不平。

哭兄

坐對佛前燈火青、聰明早世奈寧馨、
私情不道明珠碎、惜爲邦家喪一丁、
吊北條時政墓

源家霸業罪兼功、今日恩讐一夢空、
只有行人來問古、苔碑寒在夕陽中。
現住所 東京市下谷區上野櫻木町四五

岡田正之

オカダマサユキ(書)

號は劍西、富山縣士族岡田信之の長男で元治元年九月五日を以て生れ、明治三年十月家を續いだ。學習院教授として漢學者として有名であるのみでなく、古拓本の蒐集家としても知られてゐる。大正十三年三月東京帝國大學文科學部教授を兼任した。又詩文に長じて劍西の號を以て世に知られてゐる。文學博士。

修善寺客次堀松苑見訪卒賦以贈

同游萍散鬢毛更、此地何圖復見卿、
冷酒殘燈權不極、一宵話盡十年情。

大正甲寅六月初七與學習院學生

諸子謁松陰神社

天生僑傑豈無因、祇在提撕隔此民、
一世高標山嶽峙、千秋正義日星新、

驚陶多出瑰奇士、私淑尙觀忠烈人、
度龔蘋蘩拜祠宇、英靈髣髴降穹旻、
松杉鬱鬱隔城闈、肅々祠堂弔古人、
顛跌魯公全義日、從容文相就刑辰、
士規垂訓伴賢聖、正氣留歌泣鬼神、
寄語白臺諸俊彥、須追遺範裨彝倫、
無題

顯氣滿瀛州、江山入寸眸、高樓人獨立、
造化與神游。

現住所 東京市本郷區駒込千駄木町五〇

岡田八千代

オカダヤチヨ(文)

明治十六年十二月三日廣島市大手町に生れた。劇作家小山内薫氏の妹、西洋畫家で現に東京美術學校教授、帝國美術院會員岡田三郎助夫人で芹影、又は伊達蟲子の號がある。東京富士見小學校及び女子職業學校と成女學校特別選科を卒業した。兄薫氏に似て頗る才筆である。「門の草」「黃燈」「新緑」「恐怖」「繪具箱」「八千代集」「お夏清十

郎」等の作がある。大正六七年頃田村俊子女史との争論があつたが思想はともかくさういふ方面の書いてもなかく鮮やかな利き腕を持つてゐる。また兄と共に劇通である。大正十二年六月長谷川時雨女史と兩人にて雑誌「女人藝術」を創刊した、が震災後中止の状態にある。
現住所 東京府下澁谷一八三七

岡野榮

オカノサカエ(畫)

號は酒江。明治十三年四月東京赤阪に生れ、白馬會研究所を経て東京美術學校洋畫科に入り、三十五年卒業し、後、學習院女學部助教授となつた。又大正元年、中澤弘光、山本森之助、三宅克己等と光風會を起して作品を發表した。
現住所 東京市赤坂區青山南町三丁目六三

岡野知十

オカノチジユウ(俳)

名は敬胤、明治二十八年、毎日新聞紙上に「俳諧風聞録」を掲載して其名を知られた。初め秋聲會

に入り、後「半面派」といふ一團體を組織したが俳壇の中心勢力とはならない。氏は「圖案式俳句」といふ俳論を試みてゐるが、その中に「近來句を讀むものが、無性に自然くと説くと同時に、又無性に客觀くと説き、又寫生くと主張する。寫生といふことは作句の一方である。初學者が筆をとりはじめには、ものゝ景を寫すことはよろしいことである。しかし句は繪ではない活動をうつすことも出来るし人情を叙することも出来る。云々」又「これは距離がわからぬ、位置がわからぬといふことは、寫生式の句を論ずる場合に條件になるのであらう、しかし寫生式では納らぬ、よし納つても句として光彩が足らぬといふ場合、これを圖案式とする、圖案式には依置も距離もいつたものではない云々」兎に角これは當時やかましい日本派の寫生派に對抗して自己の俳句觀を述べたもので一應の理窟がある。氏はまた俳句の標準として「長松が親の名で來る御慶かな」(野坡)の句を掲げて、其の平易淡雅を推稱してゐる。即ち俳

句の極度はこゝにある、この平易と淡雅の味を解し、自ら進んでこれに匹敵するやうな句を作らな

いものは、まだ俳句の堂奥に這入らないものであ

る。と言ひ切つてゐる。従つて

襟卷や餘寒をかこつ夜商人

水無月の水たえずして生洲かな

島住の水錢かたる残暑かな

曉の鐘かすむなり寛永寺

水樓や夜は秋近く籠枕

萍の風にふかれて魚の影

游仙の枕を借らん梅の宿

稻妻やあし間がくれの舟ばくち

木犀や日のまばゆさに秋簾

吟ずれば鳴戸の秋や波高し

小酌の蛤鍋や川千鳥

の如く概してわかり易い句が多い。

故岡村柿紅

オカムラシコウ(劇)

現住所 東京市

本名は久壽治、明治十四年九月高知市に生れ、獨逸協會學校に學び劇文學に志して「身替座禪」「椀久末松山」「閻魔王」等の作品がある。市村座の取締役「新演藝」の主筆。十四年五月六日病死。生前住所 東京市芝區高輪北町五〇

岡村種香

オカムラシユコウ(國)

舊山口藩士岡村左膳の長男で、文化九年十一月三十日周防國熊毛郡田布施郷に生れた。家は世々神官である。氏は松翁と號し、堂を鶴之舎といつて國學に造詣深い。幼時亘理源藏及び淺海謙藏等に從つて和漢の書を學んだ。文政十一年長門萩に出て近藤芳樹に從ひ神典及び歴史和學等を學んだ。後又藩覺明倫館に入つて學び安政二年父の職を襲いだ。爾來郷社八尋石八幡宮石の口八幡宮等の祠官となり、明治二年長州萩表に召され異宗者國體説諭に従事すること三年、後二十一年進んで中講義に補せられた。氏は殊に能辯であつたから其説教のごときも聞くものをして感動措く能はず

らしめた。又夙に和歌をよくして其添削をなし、鶯蛙會を組織して毎月一回和文和歌の研究會を開き現今に至つた。氏は高齡に至るまで鏗鏘として壯者を凌ぐものがあつた。近來其消息を聞かぬ。

岡村千秋

オカムラチアキ(文)

明治十七年五月長野縣南安曇郡明盛村に生れ、松本中學校を経て早稻田大學英文科を卒業し外國文學の研究に從ひ特に佛國近代文學に關する研究及び紹介に力を盡した。現に雜誌「女學世界」の編輯主任を勤めて居る。現住所 東京市小石川區若荷谷町五二一

岡本一平

オカモトイツペイ(畫)

明治十九年北海道函館に生れ、後東京美術學校に入つて明治四十三年に西洋畫選科を卒業し、後東京朝日新聞社に入り、非常に特色ある漫畫を描いて聲名を博した。文展へは第五回に「トンネル横

町」を出した。夫人かの子女史は歌人として其名高い。

現住所 東京市芝區白金三光町二九三

岡本可亭

オカモトカテイ(書)

東京の書家。安政四年大阪に生れた。通稱竹二郎、可亭は其號であり、別に長春堂の號がある。乃父藤堂藩に仕へて御家流を能くした。氏は夙に乃父の畫風を學び、後各家を參酌し特に子昂の筆意に入る。嘗て函館師範學校同女學校等に習字科教師となり、後又商船學校に教鞭を執り、二十七年以來東京習字會を設け業餘書道の教授をした。著に「各種習字帖」「新字十體」、其他習字帖等數種ある。

現住所 東京市京橋區南傳馬町

岡本かの子

オカモトカノコ(歌)

明治二十二年三月二十一日神奈川縣高樹郡高律村二千二百五十六大貫寅吉の長女であつて、郷里高

律小學校及び東京跡見高等女學校に學び、單獨歌集が二、合著歌集二三、大正八年十二月處女集一篇雜誌「解放」へ登載以來、短篇小説の著三四ある。尙將來も益々歌道に精進するさうである。今その歌を數首次に擧げると

丈のびし十九といへど姉の身にかきいだかまく
愛しかりしを

亡き母がわかちたまひし美しく愛しき魂の一つ
は逝きぬ

武藏野に春は立てども若菜草たもとかゝけて摘
む妹なし

賣れ残る魚に胡蝶のまばら飛ぶ場末の店の白菊
の花

逃げまどふわがみにくさを自動車のなかにて笑
ふそこなあて人

海の魚川の魚などもほふられて喰べられんとぞ
魚桶におどる

流るゝ血ながしつくせし死魚の背の光りて厨し
づかなるかな

東京市芝白金三光町二九三

岡本綺堂

オカモトキドウ(戯)

名は敬二、明治五年十月十五日東京芝高輪泉岳寺畔に生れ、父は舊幕臣であつた。氏は脚本家として殆んど完成に近い人で黙阿彌以來の戯曲家である。府立一中を卒業した後所々の私立學校を轉々して、纏まつた學校教育をうけぬが、時代に適する脚本作家としては今や唯一人者でありそして非常の健筆家である。「綺堂脚本集」「綺堂脚本十種」「脚本七部集」「近松情話」「兩國の秋」「五色蔦」「半七捕物鳥」「源平集」「夜雪集」「龍女集」「鎌倉集」「西南集」「山月集」「朝顔集」「拾番隨筆」

小説「子供役者の死」等を著し尙最近には戯曲「御影堂心中」「小田原陣」「薩摩櫛」「眞田三代記」「階級」「寺の門前」の作を出し、何れも好評を博してゐる。近くは新富座にて興業した「俳諧師」なども吉右衛門が甘く仕生かしたが作も上演も

大成功といふ一般の評であつた。新進作家中氏の衣鉢を嗣がんとする者に額田六福氏が居る。綺堂氏は大正八年歐洲の劇壇を視察するため渡歐したが、どこまでも日本趣味を發揮するために和服を着用したさうである。こんなことも藝術家の眞の思想性行及び其の個性より生れ出づる作物を理解するには大切なことである。震災のため多くの珍蔵書を全部失つたのは惜しいことであつた。氏は又俳句をよくして次のやうなものを詠んでゐる。

月の箕輪露の箕輪や戀の唄

淺草や五重の塔に春の雨

栗の雨アボンの河を流れけり

現住所 東京市麴町區麴町一ノ一

故岡本黄石

オカモトコウセキ(詩)

彦根藩の老臣で名は宣迪、字は吉甫、通稱は半助黄石は號であるが、晩年になり號黄石をその通稱とした。藩老宇津木久純の第四子であるが、十二

歳の時岡本織部佐業常に養はれた。黄石は初め家庭に於て漢學を習ひ、詩を中島樸陰及び梁川星巖に學び、經史文章を大窪天民、頼山陽、大塚雲渦、奥山弘平、大鹽後素、卷菱湖に習つた。また天保七年中老となり江戸に出て、詩を菊池五山に、經書を安積良齋に學び、渡邊華山、福田半香、大槻盤溪、大沼枕山、横山湖山、遠山雲如、嶺田楓江、竹内九萬、鱸松塘等と交つた。後大橋訥庵、藤本鐵石、頼三樹等と屢々相往來して時事を談じ、爾來公武の間に大に力を盡すところがあつた。黄石は外志士と交り内は藩主に切諫したので忌諱に觸れて君前に三年の間召されなかつた。萬延元年三月藩主井伊直弼兇刃に瘞られたので同僚とその善後策を講じた。後家を婿宣猷に譲り芹水莊に退隱し門を杜ぢて客を謝したが、藩主は舊功を賞して五百石を賜はつた。實にこれ異數で黄石の名譽とするところであるから三律を作つた。今其の一を次に擧げて見よう。

芹水之南湖水東、野莊舊占地十弓、

祭菜料を賜はつた。詩集六卷世に行はれてゐる。妻三千は絳雲と號して畫を淡海槐堂に學んで蘭松等をよく描くので名高かつた。

神戸

萬里潮光帶萬家、近來開港日紛奢、通漕已可壓瓊浦、繁富亦將同浪華、蟹館分區連海濱、妓樓作郭倚山涯、鎮留楠氏英靈在、此地逾看氣色加。

琵琶湖歌

我邦分六十、淡海在中土、吾夙周歷觀、地勢何壯巨、北控三越西五畿、千山萬山成四圍、中有太湖之吞吐日月、得非造化鑿天池、蕩々三萬六千頃、百川會作巨浸來、終古水天同一色、宛然有似畫圖披、春融蕩今秋澄爽、籠朝陰兮盪夕暉、浮嵐暖翠千萬狀、無時無處不清奇、勾吳于越何足數、也知乾坤神秀鐘于茲、一日飲湖亭、四山風景美、浩歌興未闌、山背殷雷起、黑風乍迴閃雲旗、百道驚波白崔嵬、急雨傾

一簪白髮歸來了、前疊青山氣色同、
煙弟霞兄如有約、禽聲鳥語互相通、
光陰自是爲吾有、前路何須問碧翁。

明治三年九州に遊び、四年京都華頂山下に卜居し吟詠に自らを娛んでゐた。後東京に徙り、麴坊吟社を創立したが、門に集るもの甚だ多く、杉聽雨、田中青山、郷五三、鴻雪爪、巖谷一六、大島怡齋、丁野丹山、日下部鳴鶴、横田竹泉、矢土錦山、田邊松坡、福井學圃、増村成章等の外、有名なものゝみでも數十人ある。又支那に漫遊した時俞樾はその志節を稱して止まなかつたさうである。著作は東瀛詩選に收められてゐる。二十三年五月十一日八十歳の高齡をもつてその加筵を江戸八百松樓に開いたが、會するもの實に七百人の多きに達した。二十五年七月十五日落雷あつた時幸にも恙なきを得たので諸友は之を祝して、同月二十五日星岡茶寮に雅會を開いた。この時贈られた處の詩歌文章を輯めて「雷笑餘聲」と言つた。三十一年四月二十日米壽の高齡で病歿し、天聽に達して特に

天注射來、勢如萬弩發激矢、恍惚伍胥憤魂甦來駕怒濤、巫支騰嶂神鞭駛、又訝共工再出頭觸不周山、鼉鼉震鼓走群鬼、第恐爲之天柱折地維裂、山岳崩壞人共死、須臾萬態悉消滅、翠屏玉鑑一時啓、乃知天地靈怪不可測、丈夫意氣應如此、億昔兵馬日搶攘、五畿七道妖氛揚、吾公一震佐英主、十年汗馬驅豺狼、遂以元勳充鎮國、收此勝概入封疆、爾來二百餘年業、流峙居然抵金湯、我聞王侯守國天設險、毋乃形勢非此鄉。

晚春

細雨如絲濕客衣、菜花淨盡麥芒肥、春光欲暮河州路、滿野輕寒綠霧霏。

浪華

千帆日來往、長河一道流、豪華多舊俗、輻輳冠諸州、十里無餘地、萬家盡有樓、廢興何用說、逝水夢悠々、

澱江舟中

沙禽相喚水烟清、百里長流半日程、好是夕陽紅未了、船頭映出浪華城。

岡本 潤

オカモトジュン（詩）

本名は保太郎、明治三十四年七月埼玉縣兒玉郡本庄町に生れ、幼少の頃より母と共に郷里を出で、京都大阪地方に漂泊的に居住し、京都平安中學校を卒業して東洋大學には入つたが半途で退學した。爾來詩作に耽つて多くの長短詩を出して居る。又大倉書店に入つて其の編輯員となつて居る。今その詩の一例を擧げて見れば次のやうなものがある。

墓場

何か起りさうな晩だがとつぶやきながら
黒い墓場の上を踏んで行く

高い杉の木のでつべんに

蒼白い三日月がひつかかつて

そいつがギロチンのやうに見えてならない

ダントン！ ダントン！

俺はダントンの顔を思ひ出して

ゾーツと 寒氣をかんじた

だが 確かにおれはロベスピエールぢやない筈

だ――

女の悲鳴もピストルの音も聞えない

何か起りさうな晩だがとつぶやきながら

黒い墓場の土を踏んで行く……

現住所 東京市本郷區駒込千駄木町二六喜久世館

内

岡本大更

オカモトタイコウ（畫）

京都繪畫専門學校に學び、院展第一回に「梨果」を出し、文展へは第八回に「温泉の宿」第九回に「無花果」を出した。妹星野更園も亦閨秀畫家として知られ、門人も少くない。

現住所 大阪市清水町六〇中橋西

岡本 靈華

オカモトレイカ（小）

明治十六年十二月愛知縣碧海郡上郷村に生れ、東京市京華中學校を卒業したる後小栗風葉の門に入り、凡そ五年間文藝の研究をなし、自然主義の勃興當時始めてその作品を出してより「中央公論」「新小説」「趣味」「新潮」等の諸雑誌に寄稿し來つたが現今は主として婦人雑誌及び新聞紙上に長篇小説を執筆してゐる。氏は佐藤紅緑、眞山青果、澤田撫松の諸氏と往復してゐるが中でも、紅緑は先輩として最も親近し其の影響を受けてゐる。今日通俗作家の數多い中よく知られてゐる方である。著書には「和譯淨土三部經」小説「銀鈴」其他がある。

現住所 東京市小石川區雜司ヶ谷町六九

岡山 高蔭

オカヤマタカカゲ

（歌）

本名は繁太郎、慶應二年五月名古屋熱田に生れ、幼時恒川宕谷に従ひ、十八九歳の頃巖谷一六翁に

就いて書法を問ひ、後假名を研究し、晋唐の書に我が國の筆意を交へて自ら一家をなした。氏は夙に家を弟に譲つて趣味生活に入り、和歌と書道とをもつて立ち、別に話雲閣主人とも號してゐる。嘗つて御歌所録事をしたほどの名手であつて阪正臣池邊義象小野鷲堂尾上柴舟等諸氏と相並んで我が國和樣書家の名人である。一般に假名書きの大家と言つても漢字との調和は甘くゆかぬものであるが、氏は甚だ調和がとれ漢字も假名も頗る剛健の風がある。明治の閨秀文章家樋口一葉女史のきも幸田露伴氏の文を最もよく生かしてゐるやう碑のごとに見られる書體であつて痛快である。氏は和歌の方で高蔭三百首を出してゐるが、それは薄色の表紙に自ら題し、銀泥に小松と鶴をあらはした瀟洒たる歌集である。

よのめにはしひてもとめずわがわざをしる人あらばいまならずとも

強ひられて今一つきと飲む酒にひそみし酔はあらはれにけり

といふやうに氏の師で御歌所寄人であつた小出祭翁の面影が見える。しかし時には彫心鏤刻とも云ふやうに辭句の洗練に苦心の跡の見えるものも無いではない。

日盛は草の香たかき野中みち飲まれぬ水の清く流るゝ

など其の一例である。取材の新らしいものには

春の日に干し並べたる水引の紅榮ゆる青柳の蔭自然のよくあらはれたものには

岩根より滴る水に打たれつゝひたせる瓜の浮沈みする。

等があり

世の賞では強ひて求めず我が業を知る人あらば今日ならずとも

遅れぬと見し駒逢に勝つ見れば物は果まで見るべかりけり

散りうかぶ松の古葉を巧みにも岸によせくる池のさゞ波

など、書道に關する知己を千歳の後に求めて世に

十三日年七十五歳をもつて水戸に病歿した。

故岡鹿門

オカロクモン(詩)

名は千仞、字は振衣、初め敬助と稱し、鹿門と號した。家は世々仙臺の伊達侯に仕へて大番士の格であつた。氏は幼より學を好んで詩文を善くしたが、後江戸昌平塾に入つて大に奮勵勉勵遂に擧げられてその舎長となつた。同窓の重野安禪、松本奎堂、松林飯山、南摩羽峰等と深く交際し、後奎堂飯山等と共に學塾を大阪に開いて多くの子弟を教授した。この塾を雙松岡塾と稱したのは三人の姓の頭字を一字づゝとつて塾名としたのである。當時尊王攘夷の論が大に起つて志士清川八郎等雙松岡塾に出入したので、鹿門は其の間に在つて知るところがあれば之を藩に報じたものである。戊辰の亂に奥羽諸藩連盟したけれども鹿門は深く憂へて一藩の取るべき方針を知らしめようとして奔走した。しかしこれが爲に有司の怒りに逢つて投獄された。維新の後太政官修史局、東京府等に歴

媚びぬところや、氏の處世觀の頗る穩健なもの、着想の繊細なものがあつて舊派歌人中清新の歌風を以て聞え、門人甚だ多い。氏と郷を同じくする歌人に阪正臣大口鯛二等がある。氏は又漢詩を善くして誦すべきものが少くない。

月出露暉微、春林正幽靜、芬々氣襲衣、不_ニ必窮_ニ形影_一

故岡吉胤

オカヨシタネ(歌)

佐賀藩の世臣で初め儒學を草場佩川に、國學を古川松根に學び、維新後神祇官に入り、伊勢皇太神宮神禰宜に轉じ、後皇祖教を創立してその管長となり大教正に進んで、國文國史を講説するの餘暇をもつて歴史畫を畫いた。「勢海集」はその歌集である。外に「徵古新論」「日本紀代集釋」「古語拾遺略解」「土佐日記略解」「祝詞全書」「大祓述義」「葬祭要儀」「和歌麈の葉」「國語集解」「假字遺提要」「松浦の家苞」「吉野の家苞」「水府小言」「筑波集」等の著書がある。明治四十年七月

任したが、爾來著述と漫遊を事とした。明治十七年支那に遊び「觀光紀遊」を書いた。嘗て支那改革論を出して李鴻章を感服せしめた。詩文兼ね長じて筆を下せば立ろに千萬言の章を成し人を驚嘆せしめる。天性頗る記憶がよくて、少年より壯年に一讀したものは殆んど忘れなかつたさうである。著書に「尊攘紀事」「同補遺」「米利堅志」「佛蘭西志」「琉球始末」「涉史偶筆」「螢雪事業」「北遊詩草」等がある。大正二年二月十八日八十二歳の高齡をもつて病歿した。氏の病篤い時天聽に達して、特旨をもつて從五位に叙せられた。之は戊辰の頃勤王の功績によつたものである。氏の正續文章軌範の講義のごときは明治の學生に廣く讀まれたものである。著書三百餘卷ある。

舟中作

暮風吹冷入庭柯、其奈落花狼藉何、

一樣紅粧憐薄命、此聲偏傍恨人多、

神懸山

呼爲小豆始從誰、鳴上來探最大奇、

三十六灘一顧盼、何知眼界闊如斯、

小川芋錢

オガワウセン(畫)

美術院同人の日本畫家。名は茂吉。明治元年二月東京市赤坂區溜池に生れ、本多錦吉郎の彰技堂に入り、又加地爲也に就いて洋畫を學んだが、氏は寧ろ俳畫、漫畫を以つて世に知られ、日本畫家となつてしまつた。大正六年美術院同人に列し、其年の院展には「澤國五景」を出した。「日本風景版畫」の作がある。

現住所 茨城縣稻敷郡牛久村城中

小川煙村

オガワエンソン(文)

本名は多一郎、明治十年九月京都に生れ、カドリツク教及びギリシヤ教等の各教會で語學を究めた外に之と言つて取り立て、言ふほどの學歴は無い。併し夙に文學に志して諸大家に私淑して小説「光」脚本「王黨民黨」論文「現在の活動主義」「明治大年表」「家康の敵」等の外十數種の著述が

一七〇

あり現に「やまと新聞」の理事を勤めて居る。
現住所 東京市麴町區有樂町三丁目一

小川千甕

オガワセンオウ(畫)

名は多三郎。明治十五年十月、京都市に佛教書肆の子として生れ、初め佛畫師の弟子となつて大いに研究するところあつたが後西洋畫の大家淺井忠の門に學んだ。大正二年、歐洲諸國に美術行脚をなして翌年歸つた。第一回の二科會に「橋」「漁村」第二回到「沙丘の井」「水郷の秋」「水邊六月」第三回到「北越風景」等を出し何れも觀者の注意を惹いた。

現住所 東京市外巢鴨町一一二六

故小川直子

オガワナホコ(歌)

金澤の藩士河島良左衛門の第三女で、初の名は昌子と言ひ父母の庭訓を受けて和歌をよくした。年僅かに十三歳の時「梅の花梢に留まる鶯の初音を聞くぞ嬉しかりける。」と詠じたので、人大に驚

いた。長じて漢籍を學び業大に進んだけれども、痘瘡を病んで容貌甚だ醜かつた。二十四歳の時藩の儒醫小川幸三に嫁したが、夫幸三は天下の事を憂へて國事に奔走し家計甚だ困難を告げた。直子は之を意としないでよく家を守つて居たが、幸三は藩主の忌諱に觸れ、獄に投ぜられた上自裁を命ぜられた。直子はこの時「如何にせん死出の山路も諸共に越ゆべしとのみ思ひしものを」と詠じ、刑場に走つて夫の刑に代らうとしたが許されなかつた。それで竊かに幸三の首を埋めた處を發いて己の髪を斬つて其に墓地に瘞めた。維新後品川子爵の薦によつて宮内省御用掛となり、昌子内親王の御用邸に仕へ、佐々木高行氏の命名に因つて名を直子と改めた。續いて房子内親王に仕へて三十六年辭職し、大正八年九月八十歳の高齡で病歿したが、畏くも兩陛下よりは祭糝料を賜つた上特に從六位に叙せられた。

小川未明

オガワミメイ(小)

名は健作、明治十五年四月七日新潟縣中頸城郡高田市に生れた。父は春日山の神官であるので幼時こゝに育つたが、隨分の我儘であつたさうだ。中學や早大に在學の頃は氏の性癖が眞面目な人になかつたが、逍遙博士の人格的感化と生母の愛は遂に氏をして一人前の文士になしたと自分で言うてゐる。氏は處女作「漂浪女兒」に文名を知られ爾來生活難に苦しみつゝ、浪漫的な空想的な數多の作品を發表した。然し自然主義勃興の當時として氏の作は久しく不遇の中にあつたけれども、最近新主觀主義文學の流行と共に眞價が世に認められて來た。「愁人」「綠髮」「惑星」「闇」「物言はぬ顔」「底の社會へ」「雪の線路を歩みて」「少年の笛」「白痴」「廢墟」「紫のダリヤ」「夜の街にて」「北國の鴉より」「赤き地平線」「血に染む夕陽」「生活の火」童話集「小さな草と太陽」等の著がある。氏が「惑星」の序に「自分は飽くまで世襲や習慣から脱し、亦時流からも自由に放たれて、自己の所信と特色とを發揮したいと思ふ」と書い

一七一

てゐるが、早稲田派の殆んど全部が、自然主義の埒内に結束した時に、氏は飽くまでその独自の境を守つて、孤軍奮闘をして藝術的良心を欺かなかつたのは尊いところである。藝術至上主義者の氏は飽くまでも詩人であつて實業家でないといつた人もあつたが、近時社會的の運動もやつてゐる。

氏はよく詩人的人道主義者を描いたり、個人主義的無政府主義者を思はせるので文藝家の社會家と目せられてゐる。最近「黒い河」「人と影」「私の手記」「自殺者」「夜の群」「忘れ難き男」「傷付いた人」「説明出来ざる事實」「もう不思議は無い」「地底へ歩く」「面白味のない社會」「患者の幻想」「血の車輪」「彼等の行く方へ」等多くの作を出し童話や感想文の美しいものも非常に多く發表してゐる。「黒い河」は虐げられた人々に對する深い感慨を述べて人生の態度を鮮やかに現はし、「夜の群」も労働者を取扱つてゐるが、その描寫の美しいこと在來の型に窺つた小説などは非常に違つて、無限に溢れ出る作者の感情によつて歌ひ

出された散文詩と云ふやうなものである。「彼方の行くへ」などに於ても資本主義社會對労働階級知識階級を取扱つて、社會組織の缺點や社會惡といふやうなものを痛切に思はせる。尙氏の童話は全體に獨創的の不思議な美に充ちて藝術的に極めて高級なものと云はれてゐる。

現住所 東京市小石川區雜司ヶ谷町七六

故大給 恒 オギウコウ(文)

松平乗利の長子、天保十年十一月江戸に生れ、三河國奥殿一萬六千石の封を襲ひ、若年寄より老中格に陞つた。明治三年姓を大給と改め、四年龍岡藩知事となり、六年式部寮に出仕し、八年七月元老院議員に任ぜられ、九年賞勳事務局の設けられた時其の副長官となり、十一年議官を以て賞勳局副總裁を兼ね、十七年子爵を授けられ、二十一年勳一等に叙し、瑞寶章を賜はり、二十八年八月賞勳局總裁となり、三十七年十一月從二位に叙し、四十年八月勳功に依り伯爵を授けられ、四十二年

い。氏は雄辯人を歴し詩歌文章を善くし尤も詩に妙であつて號を龜崖と曰つた。

荻生天泉 オギウテンセン(畫)

日本畫家。名は守俊。明治十五年四月福島縣二本松町に生れ、橋本雅邦に師事し、後東京美術學校に入つて明治四十年に日本畫科を卒業した。東京府立第一高等女學校教諭となり、四十三年美術研精會で受賞したのを始めとして、二葉會、巽畫會等で屢々賞狀を得、美術研精會委員となり、文展へは第一回に「嬉好怨」第五回に「光の君」第九回に「聚景園」第十回に「秋のみやま」第十一回に「紅梅の下に立たせたまひて」を出して好評を博した。

現住所 東京市小石川區白山御殿町一〇七

沖野岩三郎 オキノイワサブロウ(小)

明治九年和歌山縣日高郡寒川村に生れた。明治三十一年小學校長を勤め、後新聞記者となり明治學

二月樞密顧問官に任ぜられ、四十三年一月六日病んで薨じた。年七十二。危篤の報天間に達し、正二位に叙し旭日桐花大綬章を授けられた。恒賞勳の事務に執掌する三十餘年勳章の模型は多く其の創定する所である。初め太政官に於て勳章制定の内議あつた時當時模型製作費用を支辨することが出来なかつた。恒私財を擲ち職工を私邸に招き數品を調製して當路者に提出し採擇する所となつたもの即ち旭日勳章である。人となり嚴毅方正名利に淡く、常に不與不奪の訓言を嚴守した其の言に「人より物を得んと欲すれば先づ之を與へんと欲すの情がある。賞勳の職責を完うせんとすれば已むを得ざるの外は人と交際往復を避くべきである。」と宮中三大節觀櫻觀菊の御宴より朋友の款招送迎に至るまで絶へて之に應ずることなく人をして殆其矯情に過ぐるを疑はしめた。日清日露兩戰役後論功行賞に當り、商人の勳章製作の選に與らんとする者門に満ちて請託絶えない。恒標本の其の意に適せざる者は百方個請しても皆排斥して顧みな

院に這入つて四十年其の神學部を卒業し、紀州の或地方に牧師をしてゐたが、大阪朝日の長篇懸賞小説に當選して以來新進作家として文壇に認められるに至つた。最近の著「煉瓦の雨」は氏の第一創作集で、「煉瓦の雨」「指相撲」「髪」「親」等の九篇を収めてゐる。作者は永い間宗教家として知られた人で、本集に收むる諸篇もその宗教家の生涯に於ける豊富な經驗を取材としたものが多く特異の領域を開拓してゐる點は大に注目すべきである。「渾沌」は氏が四五歳から十四歳の秋に到る幼少年時代の生立日記ださうで、氏の面目は甚だ躍如として表れてゐる。著書には右の外小説「戀の笈摺」「若き生命」「煙れる麻」「熊野詣り」「失はれし眞珠」「魂の憂」「英傑サウル」「牧師の半生」「渾沌」童話「赤い猫」「隠れ簞」「父戀し」隨筆「生を賭して」説教集「自由か縮命か」の外日本宗教思想史ともいふべき「思想巡禮」等數多く、最近に發表した作のみにも小説「愛は強し」「甦らぬ愛」の外隨筆感想等を合せれば數十種のも切らまじ

いはほよりいはねにはしる谷水のしぶきもか
る白菊の花
まさきくて又も遊ばんさきやまのさきはふ山の
名にもちぎりて

萩原井泉水

オギワラセイセンスイ(俳)

明治十七年六月十六日東京市芝區神明町に生れた。同四十一年東京帝國大學文科大學言語學科を卒業し大學院に在つて三年間研究した。現今俳句壇で最も新しい傾向の一派を率ゐて居る。「自然の扉」「生命の木」「俳句提唱」「ゲーテ言行録」「奥の細道新釋」「新しき俳句を見よ」「句作捷徑」句集「芭蕉句選略解」評論「新俳句提唱」「俳壇十年」「古人を説く」「昇る日を待つ間」及旅の紀行感想を書いた「山水巡禮」「チツクタツク」があり最近の作には評論「芭蕉の生活と藝術」「一茶と云ふ人の事」「芭蕉早期の作風」「詩と俳句」等を諸雜誌に發表し俳句や詩も「層雲」や「詩聖」

多きに上つてゐる。三田統一教會牧師は大正九年八月これを辭した。現住所 東京市外下落合一五一〇

故萩原嚴雄

オギワライツオ(歌)

御歌所參候として長く宮中に仕へし氏は人格極めて高潔であり、書畫にも優れて居た。書は小出榮翁の體をよく學び、畫は文人畫を得意として居た。晩年奈良縣丹波市町の天理中學校に教鞭を執り、同地に餘生を樂しんでゐるうち、御大典に際して畏き邊より七百圓の御下賜金があり、御成婚の時壹百圓の御下賜金があつた。大正十二年の暮より病氣に罹つて臥床中、御成婚御下賜金の受取を自分で書かうとして重態の身を起し、未だ書き了らざるに執筆のまゝ大正十三年二月七日瞑目した。年八十九。奈良市瑞景寺に葬られた。

舞の手にとれる手ほこのもとすゑに治まる御代
のさまを見るかな
大君のみけのたきゞにならませば春咲く花の枝

等に出してゐる。大正十二年夫人を失つたので、夫人の句集「寂光帖」を出し、京都東福寺で禪門に歸依し、十三年四國の遍路に出た。

曇りたける浪がしら薄日さしそめし
浪に轟ききりぎりす鳴けり静けく
燈臺のしたに腰おろす草は枯れそめし
砂の足跡もつれつゝ我ら話し來し
現住所 東京麻布區新堀町三

故萩原守衛

オギワラモリエ(畫)

長野縣南安曇郡穂高村に生れ、初め小山正太郎氏の不同舎で洋畫を學び、明治三十四年米國に行き労働の傍ら美術學校で繪畫を學び、後佛國に渡つてアカデミー、ジュリアンで彫刻家たる志を翻し大藝術家ロダンの風格を學んだ。佛國在學中前後三回優等を占め各國留學生中の首席となつた。歸朝後文展第二回に「文覺」を出して三等賞を得、第三回の「労働者」又三等賞を得大に未來を囑望されたが四十三年四月年僅かに三十二で病歿し

た。此年遺族によつて「女」が出品され、又三等賞を得た。

奥川夢郎

オクガワムロウ(戯)

明治二十五年二月九日沖繩縣那覇に生れ、安房中學を卒業した早稲田大學文科に學んだ。後東京毎日新聞及び東京特別通信等に居つたこともあり、また新御伽劇協會其の他の劇壇に於ける舞臺監督をしたこともある。氏は極めて多能であつて、行くとして可ならざるなき才を有し、歌集「小鳥」童話劇集「椿咲く頃」小説「疵」「夏から秋へ」戯曲「愛の人」童話「四つの魔法」「羊飼のトム」「靴屋のマルチン」「王様の魔法使」隨筆「カメラを持つ人の爲めに」「カメラを携へて」等の著書を出したる外、近く戯曲「春の里」「第一の女」小説「行人」「銀木屋」評論「童話劇の一考察」「純藝術的映畫劇の前後」「劇團と舞臺監督」「今日の歌舞伎劇」等を矢張り早やに發表して居る。現住所 東京市外巢鴨町一三三七

故奥原晴湖

オハラセイコ(畫)

文人畫の閨秀大家。天保九年下總古河に生れた。幼時古河藩士の牧田水石に就いて學んだ。後清人鄭板橋に私淑して畫風を變じた。性豪放で風采男子の如く、雄健の落筆勉めて其數を省き、其墨色と描線とに常に男性的の強さと太さがある。又學問に通じ識見高く、教へを乞ふものが多かつたが、彼は文人畫の時代の推運を伴はざることを説いて斥けた。明治初年、彼女の名は海外にまで轟いて、安田老山と共に東部に覇を稱したが、やがて彼女の豫言の如く文人畫の命脈次第に衰亡するに及んで、武藏熊谷在成田村に閑居して、大正二年八月二十八日逝いた。年七十二。養女に晴翠女史、門下に渡邊晴嵐女史がある。女史は又書を善くし頗る韵致あつた。女史は福田半香に就いて學んだといふ説と之を否定する説とがある。

奥原晴翠

オハラセイスイ(畫)

名は輝子。安政元年四月陸前の國に生れ、有名な閨秀南畫大家奥原清湖について南宗畫を學び遂にその養女となつた。諸所の展覽會に出して受賞すること十數回、文展へは第六回に「春花、秋月」を出して好評を博した。

現住所 東京府下澁谷町豊澤一八九〇

故奥宮愷齋

オクミヤゾウサイ(へ)

初名正由、字は子道、又晦堂と號し始め忠次郎と稱し、後周次郎と改め、晩年諱を以て通稱とした。文化八年七月四日土佐國土佐郡布師田村に生れ、世々藩主山内氏に仕へた。父諱は正樹金臺と號し、國學和歌を能く吏才あつた。正由幼より穎悟、學を家庭に受け、十五六歳の時既に嶄然頭角を現はし、田内菜園の門に入つて國學和歌を學び屢々一夜百首を試み毎に人に先ちて成つた。兼て又弓術を能くし文政十三年二十二歳江戸に出て佐藤一齋に師事し深く王陽明の學説を信じ、刻苦鑽研三年の後歸國し爾來盛に王學を主唱した。然

るに土佐は南學の傳を承け官私皆程朱を宗奉せし處であるから、正由を目して異學を唱ふるとして詆排したが氏は年壯氣銳毅然として群謗の中に處し、辯證駁護蒙を啓き疑を釋くに勉め、同志南部靜齋、市川彬齋、岡本寧浦等と講學に従事した。此れより從遊するもの益々多く正由の名遠近に喧傳した。蓋海南の陽明學は氏を以て先唱の嚆矢とする。而して正由は徒らに尋章摘句の迂儒文人を以て自ら居ることを屑とせず、道學を以て心膽を修鍊し常に意を邦國の隆替に注ぎ竊に匡濟の志があつた。後再び都下に出で暇あれば舊師一齋の講席に侍し、若山勿堂、安積良齋、大橋訥庵、河田八之助等と討論講究し終に一齋門入室の高足となつた。安政六年藩營の教授役兼侍讀に被擢せられ藩主山内豊範に扈從して江都に祇役し藤森天山、鹽谷岩陰、安井息軒、羽倉簡堂、芳野金陵等の諸儒と交はり文酒徵逐した。文久慶應已來尊攘の論沸騰天下多事の時に方つて正由は夙に勤王の志厚く常に憂國の念を懷き、内外の人士と時勢を痛論し

時々建白する所あつた。平井善之丞、小南五郎右衛門、佐々不高行、武市半平太、大石彌太郎等の如き同藩勤王黨の徒と往來し講學に因り大に志氣を激勵した。諭俗司を兼ね各地を巡廻し、王政維新の趣旨を人民に説諭して其の方向に惑はざらしめることに盡力した。三年六月神祇官權大史に任ぜられ皇道宣布の議に預り、同十二月板垣退助高知藩の大參事となり藩政改革の舉あるに方り其の議に參し官を辭して歸藩し大屬に拜し、五年教部省八等出仕となり、後大録に任じ大教院の大講義を兼ね、神佛兩教に關し調査考證に力め施設するところ甚多い。六年征韓論起り西郷副島江藤板垣の朝臣連袂辭職し民選議院設立の建白書を提出せんとする際古澤滋は之を起案し正由は其の修正潤色の任に當り屢々高輪の後藤邸に會して其謀議に關かつた。十年五月三十日六十六歳にして東京下谷の家に病歿した。長男正治其の家を嗣ぎ曾て宮城控訴院檢事長の職を奉じた。正由は學和漢を該ね博覽強記して詩文を能くし就中和歌に長じ、專

ら香川景樹の風を好んだ。又大阪の大醫にして有名なる居士禪客春日載陽とは年來の親友で爾來傍ら内典を獵涉し禪理を愛し晩年には萩野獨園、今北洪川、鳥尾得庵、伊達自得等と交り相忘社を設け相會して參究を爲した。現に獨園和尚の編纂せる近世禪林僧房傳中には正由を以て居士禪學家として其の紀傳を掲げてあるのを見ても其の禪學の造詣に深いのを知ること出来る。晩年に至つては吉見幸和風水翁が唱へた實事神道を祖述し、古代の史實地理等に考證して我が祖宗神聖の崛起建設し給へる立教國體の根本的大義を闡明證述せんと試み、此が爲め半生の精力を費して「日本書紀私講」「神道大綱私淑抄」「中臣被抄」「釋日本古史略説」「神道辯」「神魂問答」等の書を著はし神代史並に神道に關する自説を詳述した。前後其の門に遊ぶもの數百人の多きに至り岩崎彌太郎、南部甕男、岡内重俊、仁尾惟茂、土居通豫、田村久井、中澤重業、中尾捨吉、坂本則美、弘田正郎、宮崎簡亮、川尻實岑、中江篤介、澤田衛守

等の如きは其の錚々たるもの、著す所前記の外「周易私講」「聖學問要」「學術根本論」「人間交際論」「宗旨問答」「八宗門要略」「孫子私講」「莊子情解」「般若心經眞解」「論語割記」「古本大學易簡抄」「詩經國字解」「詩文和歌集」其他雜著數種ある。

奥村博史

オクムラヒロシ(畫)

明治二十四年十月相州平塚に生れ、日本水彩畫會研究所に學び、第一回二科會に「靜物」第二回に「植物園」第三回に「灰色の海」「畑」第四回に「秋晴」を出した。新婦人として有名なる平塚雷鳥女史と同棲してゐる。
現住所 東京府下田端四五

小倉右一郎

オグラウイチロウ(彫)

明治十四年六月香川縣大川郡白鳥村に生れ、東京美術學校に入つて明治四十年彫刻科を卒業し、文展へは第二回に「指導」第三回に「鐵槌」第四回

に「いこゑる男」「二宮尊徳翁肖像」第五回に「まぢぶせ」第六回に「老境」第七回に「むなぼとけ」第八回に「不惑」第九回に「行人」を出して二回三等賞を得、第十回に「闇路の人々」を出して特選となり、第十一回に「無心」「望洋」を出すに及んで遂に最高名譽の推薦となつた。又大正博覽會に「霹靂」を出して銀賞を得、國民美術協會其他にも出品した。大正九年一月渡歐してかの地の新傾向を學び十二年帝展審査委員の候補に擬せられ、十四年これに擧げられた。
現住所 東京府下内藤新宿番衆町一七

故小倉惣次郎

オグラソウジロウ(彫)

上總の人。宮大工の家に生れたが幼時父母を失ひ叔父に養はれた。後上京して帝室博物館に行き大理石彫刻を見るに及んで大に發奮して工學寮美術學校教師ラグーザに學び、我國に於ける大理石彫刻の卒先者となつた。主なる作品には神戸諏訪山の伊藤公銅像、及び大隈侯、安田善次郎林三子雄

等の肖像がある。大正二年五月年七十一で病歿した。

小栗風葉

オグリフウヨウ(小)

本名は加藤磯夫。明治八年二月三日愛知縣半田町に生れ、小栗家を出で、加藤家を嗣いだ。家世々薬商であるから出京して薬學校に入學し、後商業學校に轉じたが皆意に滿たない。更に高等中學に入らうとして成らない。其の頃より文學に着眼して著作家にならうとして望を起したが郷里の父と容れない。遂に斷然家道を捨て、尾崎紅葉の門に學び又かねて佛蘭西語を數年間研鑽した。東京神田錦城中學を出て、故尾崎紅葉の門に入り、「龜甲鶴」の處女作によつて其才を認められ、次いで「片ゑくぼ」「世話女房」「戀慕流」の傑作によつて紅葉門下の俊秀として鏡花と並稱せられるやうになつた。紅葉の歿後よく其の衣鉢を傳へて、その艶麗の筆を稱せられたが、自然主義勃興以來作風また一轉した。その轉化の分水嶺として「青

春」の作がある。技巧の妙は先師紅葉をも凌ぐと稱せられた。更に自然主義新藝術壇の一雄將として重きをなし、「風葉集」「戀さめ」等の作があつた。官能的な現實的な自然主義的傾向は氏の固有のものであつたが、中途筆を抛つて郷里三河の田園に歸臥し、時に通俗小説に筆をとつてゐる。資性潤達、奇行逸話に富んでゐる。眞山青果はその門人である。氏は又多藝であつて裏千家茶道、及琴、古流尺八等にも巧みである。夫人は才色兼備の女流作家加藤壽子女史で頗る資産家である。この家に養子となつた風葉氏は十數萬の富を擁してゐるので、世の作家のやうに筆耕勞働によつてミヂメな原稿生活はしなくともよいためか、近來全く創作の筆を絶つてゐる。氏は才氣の權化とも思はれるほど身體の隅から隅まで、心地よいほど生々しい才氣が溢れ、何物が迫つて來ても彈き返さうとする強い弾力をもつてゐる。

現住所 愛知縣豊橋市花田羽根井

尾崎喜八

オザキキハチ(詩)

明治二十五年十一月三十一日東京京橋區築地小田原町に生れ、京華商業學校卒業の後、銀行會社に入つて實業に従つてゐたが、天性詩人なる氏は何時までも物質的の仕事が続けることが出來ず、二十八歳の時斷然詩作生活に這入つて、翻譯「近代音樂家評傳」詩集「空と樹木」等を著し斯界の新人として注目されてゐる。「詩聖」「日本詩人」等の諸文學雜誌に作詩を多く發表する外「白樺」「生長する星の群」「嵐」「讀賣新聞」等の新聞雜誌にも時に出してゐる。評論に「新らしき詩二つ」「千家元麿君の藝術について」翻譯に「ベートフエンのシンフォニー研究」「エルハアランの回想」等があるが、新詩人の氏は頗る特色あるものとして望みを囑されてゐる。或る評家は氏の新著「空と樹木」はエルハアランを思はせる健康で快活な韻律をもつてゐると賞讃してゐる。

晩夏

椋鳥の飛來、秋の消息

そして私、毎日の散歩者は

野中の青い栗の樹の下から

地中をわたつて來る彼等の幾群を眺めて

もはや間もない金色の九月十月を

心から楽しく想像する

この木蔭の一點からひらけて

光のかがやく晩夏のひろがり

無量の午前、豊麗な午後

または莊大な緑の落日

よく帽子をとつて風に吹かれながら

思はず敬禮の念にみたされる程だ

ああ田園の空を鳥群は賑はし

陸稻は青く、胡麻は花咲き

農家の瀬戸に鶏頭は育つ

完全な夏のをはりの完全な美心に秋を待ちながら

現住所 東京市外上高井戸原

故尾崎紅葉

オザキヨウウ(小)

名は徳太郎、紅葉山人と號す。慶應三年十二月十六日江戸芝中門前町に生れ、三歳にして母を失ひ四歳の時同區神明町なる母方の祖父荒木某の許に引取られ其鞠育を受け明治六年七歳にして初めて寺子屋に入り讀書算術を習ひ、十三歳の時田安御門外の中學に入り二年にして芝愛宕下仙臺屋敷なる幕府の儒者岡鹿門に就き専ら漢籍を習ひ、十五年三田英學校に通學し、十七年大學豫備門に入り同志數輩と計つて文友會を起し、綠山と號して盛に詩文を屬した。十八年三月自ら首唱者となり山田美妙、石橋思案等と共に硯友社を起し同年五月我樂多文庫と稱する寫本の文學雜誌を同志間に頒つた。是れ紅葉十九歳の時であつて、我樂多文庫中「江島土産屏風」といふ小説體の文を載せたが彼の小説に筆を染めた初めである。當時西鶴近松の作を愛讀し三馬焉馬の戯文などを耽讀した。就中西鶴は其私淑せる所であつた。又蜀山人の書風

を學び書體克く之に似て遂に一家の風をなした。其の後硯友社は益々盛大となつたので十九年の春より我樂多文庫を印刷に附して廣く販賣することとした爾來硯友社の名は我文壇を風靡するに至つた。二十一年夏豫備門を卒業して大學に入つたが初めは法科に籍を置き一年にして國文科に轉じ二年の後遂に退學した。二十二年新著百種と稱する雜誌の第一號に其苦心の作なる小説色懺悔を出して世の喝采を博し、爾來或は新聞に或は雜誌に書くものとして呼物とならぬはなく一方理想派の驍將幸田露伴と並立して文壇の二明星と稱せられた。三十一年より讀賣新聞に金色夜叉を連載したが當時言文一致の流行につれて文章を輕んずる風があつたのに反し雅俗折衷の一種獨特の文體を發揮し續稿前後六年に涉つてもなほ遂に其の完結を見なかつた。三十五年七月二六新聞社の厚聘に應じて入社し、草分衣を載せたが病氣のため完結に至らないで三十六年三月胃癌腫に罹り十月三十日逝いた。年三十七。辭世の句に「死なば秋露のひ

ぬ間も面白き」平素文章報國の四字を座右の銘と爲し其の文章の鍛鍊に意を用ゐたことは尋常でない。人に語つて「我が文章は裏打ちがしてある」と言つたほどである。日本文字の少きを憂ひて漢語の熟字を用ひて之に傍訓をふることに紅葉の手を以て殆ど完成せられた。彼の那樣、恁麼、豈夫、這麼等の文字は支那小説より取り來つたものである餘技としては俳句を善くし秋聲會を起して根岸派に對抗し所謂紅葉一流の俳風を鼓吹した。

紅葉全集には第一卷に「二人比丘尼色懺悔」「風雅娘」「新桃花扇」「南無阿彌陀佛」「拈華微笑」「戀の蛻」「此ぬし」「夏瘦せ」「關東五郎」「新色懺悔」「文ながし」「猿枕」「わかれ蚊帳」「七十二文命の安賣」を收めて三十七年一月發刊し、四月に第二卷「伽羅枕」「花ぐもり」「夏小袖」「伽羅物語」「紅白毒饅頭」「むき玉子」「女の顔」「おぼろ舟」「戀の病」五月に第三卷「三人妻」「俠黒兒」「男ごゝろ」「袖時雨」「心の闇」「むらさき」七月に第四卷「隣の水」「不言不語」「鷹料理」三

箇條「冷熱」「浮木丸」「青葡萄」「八重櫻」八月に第五卷「多情多恨」「安知歌貌林」「手箱の玉章」「寒牡丹」十月第六卷「煙霞療養」「金色夜叉」を出した。

尾崎士郎

オザキシロウ(小)

明治三十一年二月五日愛知縣横須賀村に生れ、同縣立岡崎中學校を経て早稲田大學に這入つたが、學校騒動に坐して中途退學の止むなきに至つた。其の後は記者生活に入り、東京毎夕及び毎日新聞に在社したこともあり、十一年三月より約三ヶ月南方支那を漫遊して歸つた。「逃避行」「懷疑者の群」「獄室の暗影」「翡翠」「ラッサルレについての想片」「ラッサルレ最期の日」「支那通信」「南方の日」「海を渡る」「海邊逃避」「黎明」「縫靴」等の小説、評論、感想、隨筆等を「改造」「解放」「雄辯」「文章俱樂部」等の諸雜誌及び東京朝日や讀賣等の新聞紙に表して居る。

現住所 東京府荏原郡馬込村中井一五八七

故小山内薫

オサナイカオル(劇)

明治十四年七月二十六日廣島市に生れ、東京帝國大學英文科を卒業した。文士中才氣の煥發と眉目の秀麗とで知られてゐる。曾て學校に在學中寮歌などを作つて詩人として名をあげたが後小説に筆を染め、又戯曲を作り舞臺監督として劇界に重んぜられるやうになつた。短篇集「窓」「蝶」「笛」「大川端」「盲目」「江島生島」等の作がある。其他翻譯も脚本も多くある。多才で行くとして可ならざる無きもその本領とする處は、新劇の鼓吹と舞臺監督にある。自由劇場を起して日本の劇壇に空前の新機運を喚び起したのは没すべからざる功績である。演劇に關する論著は單行本もあるが新演藝や演藝畫報によく載せてゐる。氏の歐洲見聞記は文學に志のある者は是非一讀すべき新著である。東京美術學校教授で文部省美術展覽會審査委員の洋畫家岡田三郎助氏の夫人岡田八千代女史は氏の令妹であつて、これも關秀作家として有名で

一八四

ある。最近には戯曲「第一の世界」を著しイソツブ論譚を書いた外小説「捨子」「日光」戯曲「不貞」「織匠の家」等の諸作を公にした。大正十三年土方、淺利、和田、汐見、友田の諸氏と築地に劇場を起し、更に劇壇に於ける實際的方面の活動をすることになつた。慶應義塾講師

朽木

もとよりこの世を海と知らで、
軀を投げてし罪はわれに。

小さき焚木に似たるわが身、
音して消えけり水の面。

ふたたび燃えなんすべもあらし、
しづかに昔の夢に入らむ。

ふたたび燃えなむすべはなきも、
炎焰のむかしを樂きむよ。

ふたたび燃えなむすべはなきに、
(君はよ泰かれ、夫を愛でて。)

波路にただよふ朽木ひとつ、
泊つるはいづこのあまが浦か

燃ゆるにすべなき朽木ごもる、
思はいづこの浦に入るも。

現住所 東京市四谷區坂町五

小澤碧堂

オザハヘキドウ(俳)

本名は忠兵衛、東京の人、明治十四年十一月十四日日本橋區に生れ、同區常盤小學校卒業の後同區龜島町秋香學會に入つて三年間漢籍の素讀及び習字の稽古をしたが氏は幼時既に父を亡つたので十五歳より四年間日本橋區本町三丁目鱈屋本店に奉公し、爾來家業に従つて下谷區入谷町一〇六に居住し、「ホト、ギス」「人生と表現」「層雲」「海紅」の諸雜誌に關係して今日に至つた。氏は三十

年近くの俳諧生活に於て各種雜誌にも關係し、特に河東碧梧桐、喜谷六花、鹽谷鶴平の諸氏とは親交厚く、海紅同人として世に知られてゐる。従つて氏は舊日本新聞時代の「日本新聞」「ホト、ギス」等には以前より投稿して來たが今では主として「海紅」の方に投句してゐる。餘技として書道にも熟達し碧梧桐同様六朝風の雅致ある文字を書き、又篆刻もやる。氏の句は「續春夏秋冬」「日本俳句抄」に於て多く見ることが出来る。

紫陽花や藥玉の大きに咲く

しだり尾の切籠下げ來し萩の中

臘八のあづき汁すゝる涙なし

宵の間はかたりつきしが夜寒哉

現住所 東京市下谷區入谷町一六

小澤愛因

オザワヨシタニ(文)

明治二十年十二月靜岡縣駿東郡富士岡村に生れ、夙に文學に志して、慶應義塾大學文學部に入つて卒業後歐洲近代文學の翻譯に従事し、また淨瑠璃

一八五

の研究をなして人形芝居に關する論文及び有益なる紹介を多くして居る。又現に慶應義塾大學文學部講師として得意の和洋文學を講じて居る。
現住所 東京市芝區白金三光町三二五

故押川春浪

オシカワシユンロウ(小)

冒險小説家、名は方存、父方義と曰つて衆議院議員であつた。春浪初め父に従つて仙臺に居り東北學院に入つて學び、後上京して水産講習所及び東京專門學校に入り、三十四年英政科を卒業し冒險小説に筆を執つた。幾もなく博文館に入り雑誌「冒險世界」を監修すること數年、四十四年博文館を去り小杉未醒と謀つて雑誌「武俠世界」を發行し爾來得意の筆を揮つた。春浪人となり剛快で直言忌むことなく、常に青年の元氣を鼓舞するを勉め、執筆の餘暇運動競技を好み、日本運動俱樂部天狗俱樂部の頭首に推された。しかし甚酒を嗜み斗酒なほ辭さないといふほどで之が爲に屢病み大正三年十一月十六日遂に腦溢血のため死んだ。享年

年三十八。著す所「武俠の日本」「海底軍艦」、「日露海戦行」「寶島」「蠻男豪語」其の他數十種ある。

尾瀨哀歌

オセアイカ(文)

本名敬止、明治二十二年十一月十八日京都市に生れ、京都府立第二中學を経て、東京外國語學校に入り、大正二年その露語科を出た。卒業後東京朝日新聞社を経て露西亞研究會に入り、八年派遣されてシベリヤに行き各地を視察して歸朝した。其の後「未來のロシア」の編輯主任となり、目下は雑誌「露西亞藝術」を主宰して居る。主として近代ロシア文學の紹介に努め、「勞農露西亞の文化」「ロシア十大革命家」等の著書がある。私宅は東京市外板橋町金井窪三〇にあり本社「精藝社」は麴町區飲田町五ノ二十五にある。長谷川二葉亭四迷逝き、ロシア通として現に知られて居るものに氏及び昇曙夢及び片上伸等がある。大泉黒石氏を入れ、ばこれらはロシア通の現四大家である。今最近に發表したものを見るに、評論「勞農文化

の提唱者」「ロシアは復活する」「勞農詩人エセイニン」「ロシア國民と知識階級」翻譯にブーニンの「桑港よりの一紳士」を書いた外に、紹介としては「現詩壇の明星ブロック」「ポリシエキズムとロシア文壇」「クロボトキンの思ひ出」「ロシア舞踊界の昨今」「アンナ・パブロワの一生」「ロシア文壇新人マヤコフスキー」等の多くを「大觀」「露西亞藝術」「早稻田文學」「婦人公論」の諸雑誌及び東京朝日「時事」「サンデー毎日」等の新聞紙に發表し、露西亞研究會に取つて非常に便宜を與へて居る。

現住所 東京市外板橋市金井窪三〇

織田一麿

オダイチマロ(畫)

明治十五年十一月東京に生れ、二十八年大阪に移り、三十六年再び東京に来て洋畫を川村清雄に、石版術を金子政次郎に學んで版畫の研究に力を入れた。パピヨン圖案社を起し、各種の圖案版畫を描いた。文展へは第一回に「日光山の奥」第二回

に「鼠色の海」第三回に「憂鬱の谷」を出し、第一回二科會に「河岸」外四點、第二回に「竹林遠望」を出した。光風會其他にも多くの出品がある。洋畫家、織田東馬(明)はその兄である。「東京風景版畫集」は氏の著書である。
現住所 東京市小石川區高田豊川町五八

尾竹越堂

オタケエツドウ(畫)

名は熊太郎。明治元年一月新潟市片原町に生れ、富山全國繪畫共進會、大阪畫會、前期の日本美術院等に出品して屢々受賞し、文展へは第五回に「韓信」第八回に「さつき頃」第九回に「湖」第十回に「漁樵の圖」を出した。弟に尾竹竹坡、同國觀があり、門下に金森觀陽等がある。陶家憲吉氏夫人富本一枝女史は實に氏の妹であり、文才に長じてゐる。

現住所 東京市下谷區下根岸八一

尾竹國觀

オタケコクカン(畫)

名は龜吉。明治十三年新潟市片原町に生れ、高橋太華、小堀柄音に師事し、十五歳の時、富山博覽會で褒狀を得、爾來略々年毎に、日本美術協會、大阪、名古屋、金澤各地の全國繪畫共進會、前期の日本美術院、歴史風俗展覽會、第五回内國勸業博覽會、東京勸業博覽會等に出して受賞し、文展へは第三回に「油斷」を出して忽ち二等賞を得た。第五回に人真似、「忍耐」第六回に「勝鬪」第八回に「假睡」第九回に「血路」第十回に「文姫歸漢」第十一回に「住吉」を出し、褒狀及び三等賞を得た。兄に尾竹越堂、同竹坡があり、門下に織田觀潮、換戸觀海等がある。

現住所 東京市下谷區上根岸六六

尾竹竹坡

オタケチクハ(畫)

名は染吉。明治十一年九月新潟市片原町に生れ、人物繪を小堀柄音に、山水を玉章に、花鳥を梶田半古に學び、前期の日本美術院、巴里世界大博覽會、聖路易萬國博覽會、東京勸業博覽會、巽畫會

等に出品して屢々受賞した。また巽繪會評議員となり、文展へは第一回に「羅睺羅」第三回に「茸狩」を出して三等賞を得、第四回に「おとづれ」「棟木」第五回に「水」「秋草」「梧桐」第六回に「にはかあめ」「天孫降臨」「春秋」第八回に「うらゝか」第九回に「豪華」第十回に「ゆたかなる國土」第十一回に「みそのゝ秋」を出し褒狀及三等賞等を得た。兄に尾竹越堂があり、弟に尾竹國觀がある。

現住所 東京市淺草區新片町三

織田子青

オダシセイ(著)

明治二十九年九月一日愛媛縣因桑郡石根村大字大頭に生れ、愛媛縣師範に這入つたが中途で退學して郷里を出で、京都と東京に於て日本畫、洋畫、書道を研究し、現今は書道指南の外少年少女等の雜誌に寄稿し、文化研究會理事、藝術普及會主幹をやつてゐるが、會てアララ、遍路、色鳥等を主宰したことがある。著書には「子青童謡」「銀の

種」等がある。氏は多方面であつて何が本職で何が餘技といふことがわからない。歌なども書道と並んで得意である。

自畫像をうくさびしさにしらくと

おつるなみだもうつれるかゞ見

などの詠がある。氏の令兄織田枯山樓は俳人である。

現住所 東京市外雜司ヶ谷七二七

小田島十黃

オダシマツツコウ(俳)

名は義、明治二十年十月東京本郷區春木町に生れ、武藏國南多摩郡高尾山藥王院大阿闍梨志賀照林師の徒弟となり、剃髮して佛門に入つたが六年の後還俗して歸京し、看板其他の書道を業とし、後會社圖案の顧問となつて今日に及んでゐる。俳句は四十一年頃投句に始まり、其の後渡邊水巴氏の教を受け四十四五年頃は句作三昧に入つた。そして氏の句は「警世」「朝虹」「曲水」「下野新聞智仁勇」等に投稿されたが、「曲水句帖」等に少

しく收められてゐる。

破門なれど春日に旅意も浮き立つ

現住所 東京本郷區春木町一ノ二七

小田蓼洲

オダリヨウシュウ(書)

東京の書家。名は久、蓼洲は其號である。相模國小田原藩士で明治九年十月生れた。幼より柳田正齋の門に入り、書を學んだ。曾て大藏省に奉職し後に有眞樓東州に就いて修業し其技大にあがつた。書會のあるごとに出品して賞を受けたこと屢々である。

以前住所 東京市四谷區坂町八四

落合東郭

オチアイトウカク(詩)

名は爲誠、東京の詩人で、太陽及び岩溪裳川氏の前に萬朝報の詩壇を擔當したことがある。又其詩は太陽や萬朝報等に發表し、斯道の大家を以て稱せられてゐる。

雪中所見

白雲紛々灑古城、蕭條老木凍禽鳴、
晚來雉堞寒涵影、一帶川流綠水平、

呈洪嶽禪師次其游成道寺韵

寶鏡傳三昧、江湖任滯回、坐禪偏見性、
悟道不關才、水上風搖月、林間石帶苔、
誰能參活句、微笑得幾來、

方谷先生門人、建先生遺蹟碑于刑部山

中、余感其事、有此作、

無母何能恃、哀哀感此生、結庵山寂寞、
懷舊夢分明、妙筆人如在、間雲雨易成、
豐碑表遺蹟、終古見精誠、

故落合直亮

オチアイナオスケ(國)

通稱は源一郎、文政十年武藏國南多摩郡駒城野に生れ、少壯漢籍を菅野得齋及遠山雲如に學び、又國學を山内嘉六に受け、後堀秀成に就いて教授を受けた。幕府の末に米國の軍艦が浦賀に來て、物情甚だ騒然とした。直亮慨然として廣く天下の志士と交り、尊攘の説を主張し、諸書を著して有志

に傾ち、大に志氣を振勵した。文久三年幕府浪士を募つた時、直亮も亦之に應じて上京し、茨城の清川八郎等と封事を學習院に上つた。次いで藤本鐵石等と事を謀つたが成らない。この幾多の危険を冒して國事に奔走したが不遇であつた。明治元年正月三日京都に入り、西郷隆盛に面會し關東の事情を告げ征東大總督嘉彰親王に扈從して大阪に赴き、次いで四國中國鎮撫總督に從つて姫路に赴いた。二月岩倉具視の内命を受けて關東に下り、視察する所があつた。後伊奈縣判事、大參事に歴任した。六年陸前志波彦、鹽釜、淺間神社等の宮司となり、住所に在つて二十七年十二月十一日卒した。享年六十七。明治の國文學者落合直文はその養子である。

故落合直澄

オチアイナオズミ(國)

武藏國多摩郡駒城野驛に生れた。俊雄の四男で母は瀧子と言つて落合直亮の妹である。幼い時より漢籍詩文を學んで後堀秀成富樫廣蔭について國學

國紀年私案「太古紀年考」等ある。

故落合直文

オチアイナオフミ(國)

語學を習つた。明治元年官軍の參謀河田佐久馬に従ひ下野の軍に功を立て賞與をうけた。二年神祇官宣教權少博士に任ぜられ、豊受宮禰宜、度津神社宮司、出雲大社少宮司、神宮の禰宜を経て、大教正に昇り、その間東西の京又は宇都宮なる神宮教の本部長として布教に心を碎き暇には古書を考究して數多の書を著した。二十二年皇典講究所の講師となり、二十四年一月六日病氣のため卒した。享年五十二。著書に「古事記後傳」「同前傳」「古事記講錄」「開闢本紀考」「上古物語」「新三大考」「開闢古說辨三大考」「後說辨三元生成圖」「太古史年考」「上古紀年」「八書比較」「古代文字考」「教義要典」「忠義護國篇」「儒教正見」「汚濁起元考」「假字起元考」「究理根原」「音義研究篇」「訓點問答」「武烈天皇紀考」「論語千字文貢進時代考」「知道要言」「古事考證」「日本神字考辨妄」「同文考」「上古年代問答辨」「古今集講義」「語學系統問答」「詞考筆錄」「言語成立轉語規則」「要語考證」「語格大成圖」「同附錄詞考妄說辨」「帝

有名なる國文學者。舊仙臺藩士鮎貝盛房の次男、文久元年十一月生れ、初め龜次郎と稱した。後落合直亮の養子となり、堀秀政について國學を受けた。十一年宇治の本教館に入り十三年館費生として東京に留學し、大學古典科國書課に入つて研學した。其間また内藤耻叟に從つて漢文學を修め、成業の後皇典講究所に聘せられ、又第一高等中學校等に教授となつた。三十一年職を辭して爾來専ら著述に従事し、又同志と謀つて國語學の普及に力を盡し、その和歌に於て從來の舊套を脱した清新な風調を起し、文章も亦頗流暢なものを作つて範を一般に示した。當時國文學の教授に於て中學校も女學校も今日のやうな一定の教科書がなく徒然草、太平記、平家物語、土佐日記、方丈記等を其の學校の思ひ／＼で教授してゐたのであるが、氏は新に國文教科書を編纂して世に出した。これ

今日行はれる教科書の嚆矢である。和歌も淺香社を起して門人與謝野寛、金子薫園、尾上柴舟を指導し、所謂新派なるものを誘致した。新體詩方面に於ても氏は之に活動し小學兒童の唱歌に用ひる歌詞なども創作して大和田建樹氏と共にこの方面の大恩人である。孝女白菊の歌を始め櫻井驛に楠公父子訣別の歌は當時三歳の兒童も口吟したものである。又辭書の發達しない時にあたつて百科辭典にも近い「詞の泉」を出して國語研究者にどの位便利を與へたか知れぬ。文典に於ても獨特の考によつて組織したものを發行し、又古典普及をはかるため小中村義象萩野由之等と力を合せて國文學全書を發行した。後各種の全書風のものが續々刊行されたのもこの企てが其源をなしたものである。氏は由來薄柳の質であつたが、遂に病を得て三十六年十二月十七日歿した。年僅かに四十三。性頗る萩を愛して萩廻舎を號としたので、歿後青山墓地に葬られたが、門人は毎年東京向島の萩寺に會して、法事を營み師を偲ぶ歌を作つてゐる。

歌文は「萩廻家遺稿」「萩廻舎家集」に收められてゐる。令弟鮎貝某氏も歌文の天才があつて幼少時友人の敬服するところであつた。後京城に移つて實業に従事し、巨萬の富を重ねたが大正十二年七月兇殺された。

一つもて君を祝はん一つもて親を祝はん二もとある松

緋緘の鎧をつけて太刀はきて見ばやとぞ思ふ山櫻花

原町にめしひが二人杖とめて秋のゆふべをなに語るらん

山寺の石のきさはしおりくれば椿こぼれぬ右にひだりに

夢に見し女神の跡を慕ひ來てけさわれ見たり白百合の花

碁をくづす音ばかりして旅やかたしづかに春の夜は更けにけり

町中の火の見やぐらに人ひとり火を見て立り冬の夜の月

さわく／＼とわが釣り上げし小鱧の白きあぎとに
秋の風吹く
木がらしよなれがゆくへのしづけさのおもかけ
夢みいざこの夜寝ん

夕日影はや傾きし山かげにいつまで子らの椎ひろふらん
馬屋のうち馬のもの食ふ音すらもかすかに聞ゆ
夜や更けぬらし

(歌統)

本居宜長—本居春庭—富樫廣蔭

堀 秀成

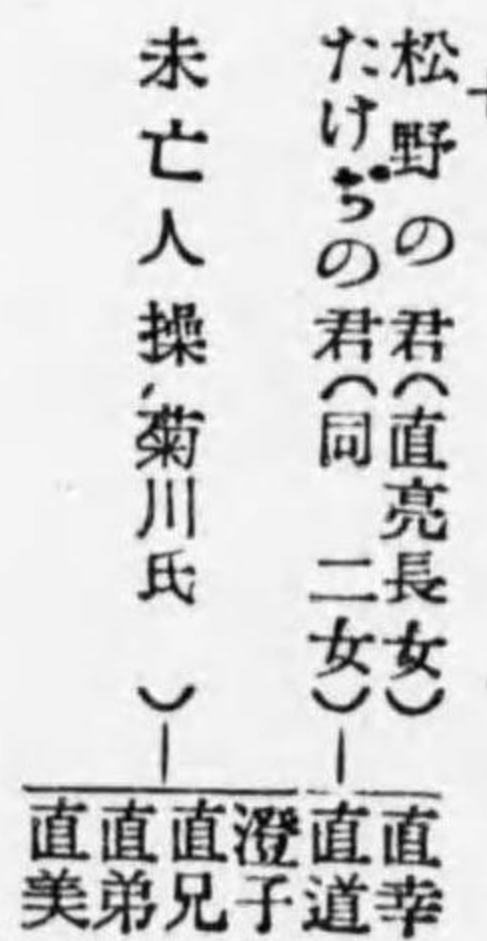
—落合直亮—落合直文—金子薫園

—尾上紫舟

—與謝野 寛

(系統)

落合直亮—養子直文



故落合芳幾

オチアイヨシチカ(畫)

名は幾次郎。一蕙齋、又朝霞樓、後蕙齋と號した。

大蘇芳年と共に歌川國芳の門に學び、美人、俳優などの錦繪及び草双子を描いて國芳門下の二天才と稱せられた。明治初年同志と共に東京日々新聞

を創立し、又東京滯入新聞を起した。これ我が國新聞に挿繪をした嚆矢である。明治三十七年二月六日年七十三で病歿した。

尾上柴舟

オノエシバフネ(歌)

名は八郎、明治九年八月岡山縣苫田郡津山町に生れ、東京帝國大學文科の國文科を卒業した。幼時郷里の神官直頼高翁に就き歌道を學び、東京に出て、落合直文氏の淺香社に入つて研究した。學生の時既に勅題に預選の光榮を荷ひ名聲をあけたが其の頃の歌風は舊派に屬するものであつた。後新派歌人として金子薫園と並稱せられ、「銀鈴」「靜夜」「永日」「遠樹」等の歌集を出した。沈靜な蕭森な作風を以て知られてゐたが、近來は哲學的な主觀的な作物を多く發表される。水滸は氏を中心として集れる現在の一團の機關雜誌である。氏は又少年の頃より書道を研究して、始め貫之の假名書を練習したが、近年は行成俊頼等の古筆を學んで當代並ぶものが無い。「萬年筆の書き方」「柴舟

閑那帖」などを著したる外に「書道叢道」「書勢」「國華」等によく氏の書論を見る。大正七年文部省の夏季講習會に、「假名と文學」といふ講演があつたが、平素の組織的研究の一端を發表したものである。學習院教授であつたが大正七年四月東京女子高等師範學校教授に轉任した。大正十二年五月十三日文部省は氏の提出せる假名文字の歴史的研究に對して文學博士の學位を授けた。蓋し斯かる研究で博士を克ち得たものは他に例がない。氏の著「短歌髓腦」は短歌滅亡論を述べ、「新日本文學史」は世間普通の叙述と異なるもので主として思想的に取扱つたものである。東京女子高等師範學校教授、女子學習院及早稻田大學講師の外學習院女學部に於て、一週一時間假字習字の指導に行く。非常に謙遜家であり研究家であるから、講演などを依頼されることがあつても容易に之に應じない。嘗て編者が氏に學校授業の參觀を請ひ兼ねてその指導と一講演とを頼んだ時指導をさせられるなら御校へ行くのをよさうと言つて斷られた

ことがある。畢竟氏は詩人であり趣味の人であつて、一意専心その道に精進する人である。夫人登羅子女史も文學の造詣深く「源氏物語」を平易に書き直して世に出してゐる。

何ならぬ物のひゞきも興ひきてゆかしき春の地となりにけり

歳晚の町のさびしさ流し湯の湯氣の底なるありあけの月

かなしませます倦まず歎かずけふ一日若きにかへりよろこびをいふ

いにしへの奈良の都の裏町に濡れ來し春の夜のはか雨

春日山藤のうら葉の春かぜにかへるを見れば旅ごゝちする

三人して見し山の端にうち向ひ末のひとりがあるなげきかな

聲きこゆおもわまた見ゆあはれ君君はまことに失せたまひしか

新らしき姿をもちてあひ寄れる二つの心神よ守

らせ
山ひだの緩き流れをのぼりつゝ光に消ゆる一筋の霧

現住所 東京市小石川區原町一〇五

故小野鷺堂

オノガドウ(書)

氏は駿河舊田中藩士で文久二年二月二十二日藤枝の城内に生れた。父を清右衛門成長と云うて世に弓劍を以て藩の師範となつた。氏は名は綱之助、鷺堂は其號である。別に斯花翁斯花廻舍斯花精舍等の號がある。維新の際居を房州長尾に移した。初め藩の老儒恩田豹隱に就いて漢籍書法を學び、廢藩置縣の際東京に出て島田重禮奥田龍湫等に漢籍を熊澤猶龍成瀬大域等を師として書を學んだ。この間氏は父と永訣し、流離艱難備に嘗め、後に感ずるところあつて力を本朝書道の復興に盡し、専らかな書法の研究に従事した。明治二十三年十二月歌牌を書いて皇后陛下に献納し嘉賞された。氏は女子學習院に教鞭を執ること三十年、其の間習

「書法大意」「かなの手ほどき」「男女手紙の文」等
數種ある。斯華會を組織し書道研究雜誌を發行し
て通信指導をもなしてゐた。

梅の花

梅の花いざ手折らんと立寄りて香にそむ袖もお
ぼえざりけり

生前の住所 東京市神田猿樂町三ノ二

故小野湖山

オノコザン(詩)

字教科書を發行して其流の宣布に努めたのと門人
中村春堂氏の習字教科書も廣く行はれたので所謂
鸞堂流の書風は一時天下を風靡した。翁の流は御
家流と千蔭風とを巧に調和したもので其連綿の美
妙は古今獨歩である。同じ習字の教科書でも阪正
臣のとは大層趣が違ふ。阪茅田のは連綿が拙いと
いふのでは無いが多少固いところがあるけれど翁
のには少しの屈托が無くて水が無心に流れてゐる
やうである。しかし茅田のは行成や豫樂院を目標
としてゐるのに翁のは新らしくて見飽きがするの
を惜しいと思ふ。それでも翁のはまだよい。門人
となると中村春堂のやうな一流どころでもないやみ
がある。天保安政の墮落しきつた御家流のやうに
なると雅味がない。しかし假字書の腕でもつて女
子學習院教授となり、從五位勳五等の位勳を授け
られた氏は異數である。
氏は兼ねてから腎臟病にて悩んでゐたが大正十一
年一月二十九日から重態に陥り遂に東京市神田猿樂
町の自邸で永眠した。享年六十一歳。著書には

名は長慮、字は侗翁、又の字は懷之、近江彦根の
人、文化十年近江國東淺井郡高畑村の郷士の家に
生れた。少壯の頃より學を好み、その才鋒儕輩を
壓し神童の譽があつた。江戸に上つて星巖梁川氏
の門に遊び詩を學んで嶄然頭角を現はし、後三州
豊橋城主大河内家に聘せられ藩政に參與した。氏
胸襟落落々慷慨奇節があり、自ら狂々道人と稱して
廣く天下の志士と交遊し國事に奔走した。その後
功によつて從五位に叙せられ維新後朝廷より屢々
招聘されたが辭して官に仕へず、悠々詩酒に耽り

身帶恩輝出關去、

征衣春暖落花風。

讀陶詩

琴書平日樂天真、
亂世不爲哀怨語、
陶公此段是高人。

東叡山賞花

嬌紅曼綠弄春暉、
笑語滿山多夕照、
蝶醉蜂癡好忘歸、
風花亂點美人衣。

透軒遺稿題詞 錄一

孤墳冷鎖古香臺、
望斷房山青萬疊、
桂樹無花石有苔、
英魂埋在慘雲堆。

遊太平山

聖世何山不太平、
天風吹度萬松樹、
髮髯笙鏞合奏聲、
此山特表太平名、

送九萬竹内鵬遊北越

俊遊豪飲有誰同、
意氣騰翻北溟水、
到手青錢轉手空、
鵬乎知汝養鵬翁。

餘生を樂しんだ。大沼枕山、鱸松塘と明治の三大
詩人に推された。嘗つて天皇より御硯を賜はつた
ので其書齋を賜硯樓と名づけた。老齡少しも元氣
衰へず益々鏗鏘として百歳に近く詩鋒毫も衰へな
い。晩年千葉縣大東に別墅を築いて夏冬の暑寒を
避けた。四十三年三月二十八日遽かに病に罹り翌
月十日遂に起たない。享年九十七、京都妙心寺中
の大龍院内に葬つた。湖山初の姓は横山後に小野
に改めた。少壯經世の志があつたので詩人の名あ
るを欲しない。詩は豪宕淡雅毫も修飾しない。故
に奇氣紙上に溢れる。「鎌倉雜感」「惜春詞」「後
惜春詞」等當時人口に膾炙した。又甚だ草書に巧
みで性酒を嗜み斗酒を傾けたものだ。著書に「湖
山樓集數十卷」「鄭繪餘意一卷」ある。

八幡公過名古會關圖

誰言百戰不酬功、 萬里東邊指掌中、

梁川星巖

- 大沼枕山
- 小野湖山 明治四十三年四月十日歿 九十七歳
- 岡本黄石
- 森 春濤
- 鱧 松塘
- 江馬天江

小野竹橋

オノチタキヨウ(畫)

名は英二。明治二十二年十一月岡山縣笠岡町に生れ、十六歳の時京都に出て、四條派の大家竹内栖鳳の門に入り、後京都繪畫専門學校に入り、四十四年その別科を卒業した。文展へは第一回に「山家の春」第二回に「薄照」第五回に「港」第七回に「麥秋」を出して認められ更に第十回に「島二作」を出すに及んで遂に特選の榮を荷つた。院展へは第二回に「黍熟るゝ頃」を出したが世評を招いたものは京都の展覽會に出品したものゝ方

にある。大正七年一月、土田麥僊、榊原紫峰、村上華岳、野長瀬晚花等と國畫創作協會を起し、以來文展に出品しないやうだ。大正十二年七月號を竹喬と改め京都衣笠等持院内に畫室を移した。現住所 京都衣笠等持院内

小野 浩

オノヒロシ(文)

明治二十七年六月二十九日、かの徳川末期の大文豪頼山陽の産地なる廣島縣加茂郡竹原町に生れ、早稻田大學英文科に這入つて大正六年に卒業した。「平凡な戀」「痴愚」等の作品を出した。外未

だあまり多く出して居らぬ。現に「赤い鳥」の編輯に従事して居る。

現住所 東京市外代々木山谷一一一

小野 政方

オノマサカタ(文)

明治廿八年八月山梨縣東八代郡境川村に生れ、郷里の小學校卒業後同縣師範學校に入り、其の後東京に上つて一二の私立英語學校に學び爾來十數年の間浪人生活中述作の傍ら全く獨學をした。氏はお伽噺集「曉の小鳥」「お伽噺集」「母樣論」など隨分力を入れて書かれたものである。現に研究社の「小學少年」「小學少女」を主宰して編輯に従事して居る。美智子夫人も夙に創作に従つて大に活動したものである。

現住所 東京市代々木上原一〇九七

小野 みち子

オノミチコ(小)

明治二十三年九月八日山口縣玖珂郡木野村に生れた。境遇上精神的には相當苦勞と波瀾があつた

方であるが學歴としては小學校卒業の後作家山梨縣人小野政方氏に嫁し、妻となり母となり夫に事ふる餘暇を以て二三の著書と數十篇の創作を出した。氏の作は個性の表現が十分でないやうに言ふ人もあるが、作としての取纏め方は可なり巧である。數年前までは素木しづ子氏に次いで絶えず勞作を示して居たものであつたが近來はあまり其の作を發表しないやうである。

現住所 東京市外代々木上原一〇九七

故小原 鐵心

オハラテツシン(詩)

名は忠寛、字は栗卿、仁兵衛と稱し、鐵心又は是水酔逸と言ひ、父を忠行と言つた。嘉永七年米人彼理江戸灣に來た時、鐵心は藩命を受けて戸田伊豆守を助けて往いて備へた。

孤客鞍頭 感慨催、海門落日 晚湖凹、

誰知 一片武士恨、 戍迹 秋寒本 牧臺、

はこの時の作である。これより國用多端しかも飢饉荐に至つたので、鐵心は私財を散じて窮民を恤

み家什を賞却して之を與へた。文久四年幕命により藩侯に従つて京都を守つた。其の時の詩に次のやうなのがある。

臣節胸間一片存。 仰觀天日照乾坤、
熊鷹麾下士三百、 守護皇宮第一門。

元治元年武田耕雲齋等兵を率ゐて京に上らんとする時、氏は藩主に従つて美濃に備へた。

十年征役若爲情、 七入江都五帝京、
已矣關山殘月裡、 白人鬢髮是鷄聲、
軍門雪滿暮蕭々、 寒雁啼過旌影飄、
奇正中間吾有算、 半旬持戰不三會挑。

明治維新の際廣く人材を諸藩に徴して國事に參せしめたが、鐵心も其選に入つて入京し、次いで參與となつた。爾來會計事務局判事、會計局判事、江戸府判事、藩の大參事、權知事等の諸官を経て明治五年四月十五日病卒した。年五十六。氏は人となり磊落、容貌魁偉、しかも容止端嚴、文學を好くし畫も巧みであつた。

戊辰正月二日恭奉朝命任參與職

と歌との講義録を刊行する計畫をしたが今は「短歌雜誌」の編輯を主宰してゐる。

歌風は靜寂と哀愁が氏の境地であつて、技巧も優れ線が細くてなよやかな方であるが中には萬葉調の豪放なものも多少ある。「越路の山春さりくれば消えやらぬ白雪のうへうすぐもながる」など北國の春といふ感じをよく捉へてゐる。

氏は近來他の詩人や歌人の様に歌書の著の外小説戯曲にも指を染めてゐる。最近の著書には編纂本「西行法師全集」註釋「平賀元義歌集」研究方面で「新らしき歌の觀方と解説」「歌は斯うして作る」等を出してゐる。

袖をぬらす夏の夜の微雨おぼろかに腫くもりて
彩なくもあるかな
夏深き山の叢うぐひすの啼けばひとゝき夕あかりする

杖をもて突けば極めてかたし朝の雪空あをを
と地に影をさす
現住所 名古屋市東區古出来町梅林市營住宅一四

誰圖徵命及微臣、 正是風雲際會間、
奉詔三更初下殿、 礮聲來拔洛南山。

將發福井抵三國舟中得收字

丹巖洞下艤輕舟、 白鬼川頭午靄收、
官路寧知有今日、 一逢仙夢到三州。

三國

海亭斫膾又飛杯、 日藩遙空一碧開、
掠面雄風吹不斷、 直從鞞鞞捲濤來。
濃南治水策紛々、 只要浚汗歸一新、
試取峻堤除却去、 順流注處是河身。

尾山篤二郎

オヤマトクジロウ(歌)

明治十二年十二月十五日金澤市に生れ十六歳の時右足大腿より切斷したので松葉杖の歌人として知られてゐる。金澤商業學校と金澤英學院を出た後歌道に向つて一意精進した。「短歌雜誌」記者で歌集「さすらひ」「明る妙」「野を歩みて」「曼珠沙華」の外「柿本人麿」「萬葉集物語」「西行法師全集」「平賀元義歌集」等の著がある。大正八年詩

折口信夫

(釋道空)(オリグチノボウ)(歌)

氏は國學院の出身であつて大阪府の教職にあつたが、アラ、ギ派歌人として、また歌論家として知られ、後國學院大學教授となつた。氏は萬葉研究をもつて終生の事業とし、其研究はアラ、ギに連載されたが、後に出版されて好評を博した。謂はゆる口語譯萬葉集はこれである。大正十一年九月より白鳥社の事業として行はれた萬葉集三十四講義は國學院大學内に開催されたが、氏は其の講座を擔任した。又故三矢重松博士の遺業源氏物語全講を繼承して同大學で毎日曜に續講した。

ながき夜のねむりの後もなほ夜なる月おし照れ
り河原すが原
さ夜風は山原竹の尾根くだり穩やむ音す月の下
びに
水ぞこにうつそみの面わ沈透き見ゆ來ん世も我
のさびしくあらむ
草の株まじりて黒き冬畑の畝はぬ土は霜にふく

れたり
枯れ萱のなづさふ川の雪消の水青み深くして上
にござりたり

現住所 東京市

力の部

海外 天年 カイガイテンネン(畫)

京都の畫家。庄右衛門の長子、萬延元年十一月生れた。夙に畫を岸竹堂に學び後鈴木百年を師とし常に思を意匠考案に凝らし、明治三十一年十一月遂に天年模様鑑七部を著した。又大博覽會及共進會等に出品して數回褒賞を受けた。

現住所 京都市上京區二條通堺町西入三

故海 賀 變 哲 カイガヘンテツ(小)

本名は篤磨明治四年三月福岡縣秋月に生れ、初め攻玉社に學び、後札幌農學校に學んだ。札幌農學校は新戸部稻濤博士や志賀重昂氏や佐久間信恭有

島武郎諸氏のやうな異彩ある人物を出して居るので有名だが、その學校から氏のやうな滑稽文學を唱導し、嘗つては博文館にあつて文藝俱樂部の編輯に従事した通俗的作家の出で居ることを知らぬものが多い。著書に滑稽小説「新浮世風呂」の外「小説辭典」等がある。氏はかくの如く滑稽文學者又は人情小説家として「面白俱樂部」其他の通俗讀者を喜ばして居たが、大正十二年四月十三日腦溢血の爲に麻布の宅で逝いた。享年五十三。

禁斷の制札古りて龜の啼く

隣から火を借りに來る時雨かな

自動車で不屆者の花見かな

いぎたなく蚊帳をころがり出臍かな

秋寂し隣の聲こちの啞

寺の夜のボク／＼長き木魚かな

鼠めにまた起されて夜半の秋

生前住所 東京麻布區霞町一

垣内 雲 嶙

カイトウリン(畫)

加納夏雄に従て彫金の法を問ひ、又畫家柴田是眞に就て學んだ。勝廣最彫金術に巧で傑作少くない。明治二十七年日清戰役の際廣島大本營に於て明治天皇の佩劍菊一文字製飾の命を蒙り、刻苦四年の後成つた。三十一年和歌の浦の景勝を彫刻したる臘銀大額面を巴里大博覽會に出陳して金賞牌を得た。三十六年東京美術學校教授に任じ、在職一年半の後之を罷め帝室技藝員を命ぜられ、大正六年一月十五日歿した。享年六十五根岸永稱寺に葬られた。

賀 川 豊 彦

カガワトヨヒコ(文)

明治二十一年七月十日神戸市島上町一〇八番地に生れ、同三十八年徳島中學校を卒業して明治學院高等科に入り同四十年同校二年を修業して神戸神學校に轉學し四十四年に卒業した。氏は夙に資本家の横暴を惡み下層階級を憐み之が救済に盡さうとする志を以てゐた。それで氏は既に神戸神學校在學中より神戸新川の貧民窟に住し貧民傳道に従

故香 川 勝 廣 カガワカツヒロ(彫)

彫金家、江戸の人、嘉永六年十月に生れ、幼時繪畫彫刻を好み、十二歳能面師吉長門正に就て彫刻を學び、尋いて野村勝守に彫金術の教を受け、後

現住所 石川縣金澤市味噌藏町

事した。後米國に渡つたブリントン大學に學び、千九百十六年バチエラー、オブ、デヴェネーの學位を受けた。大學に於ては主として心理學、哲學、神學、生物學を研究し、歸朝後兼ねての理想を實現せんが爲に、貧民窟に無料施療所を設けた。それはかの米價暴騰のためにはゆる米騒動の起つた大正七年のことである。それより各労働運動に關係し大正十一年一月同志と共に日本農民組合を創立して其の牛耳を執つてゐる。又労働者新聞、印刷工新聞、自由の記者となり別に「宗教雜誌」雲の柱」を主宰してゐる。著書「友情」「豫言者エレミヤ」「基督傳論争史」「貧民心得の研究」「精神運動と社會運動」「人間苦と人間建築」「労働者崇拜論」「主權經濟の原理」「イエスの教へ方」「死線を越えて」「地殻を破つて」「自由組合論」「太陽を射るもの」「イエスの宗教と其の眞理」「聖書社會學」「星より星への通路」「人間として見たる使徒パウロ」の外、詩集涙の二等分」「地球を墳墓として」等がある。中でも最も有名なのは

二〇四

「死線を越えて」であつて、氏が一度この書を出すや資本家階級も労働階級も老人も青年も争うて之を讀んだ。これは著者をモデルとした一青年を主人公として其の周圍に起れる資本家や有識階級の愚劣横暴及び貧民窟の悲惨な生活等を巧に表したもので、勞資問題のやかましき今日、この書の愛讀されたのは當然と思はれる。貧民救済のために自己の肉眼を痛めても少しも顧慮せず、また著書の印税——それは數萬圓の印税といはれてゐるその金額の大部分を貧民のため労働無資産者のために使つてゐるといふことだ。世間の人は彼はその文の藝術的有無を云々するが、我等はこの小説の出現とその多大の賣れ行きがある事實とに對して、唯徒に嫉妬の目を以て之を見ることなくこれを深刻に考へて見たいと思ふ。一女工より身を起して氏の内助者となつた春子夫人は、之も豊彦氏に劣らぬ熱愛を弱者のために注いでゐるし、著書をも出して自己の經歷思想を説述してゐる。尙ほ「死線を越えて」は A growth of the Death Line

として英譯され、外國にも盛んに紹介されてゐる。大震災後一時東京に在つて罹災民の救済に従つた。

日本労働總同盟中央委員。

現住所 神戸市北本町六丁目二二〇

柿内青葉

カキウチセイヨウ(畫)

閨秀畫家、名は敬子、明治二十五年東京に生れた。女子美術學校卒業の後、四十三年鏑木清方の門に入つた。異畫會等で屢々受賞し、大正博覽會郷土會等にも出品がある。大正六年春より女子美術學校教師となつた。大正十二年大震災後大阪毎日新聞主催の日本美術展覽會には「牧童」を出して、その新しい試みに觀者を驚かした。今は師清方氏の女流熟頭をやつてゐるさうである。

現住所 東京市麴町區飯田町六ノ二二

故加來春齋

カクシユンサイ(書)(畫)

豊前の人、諱は惟俊、字は敬叔、通稱は壽年、春齋又は栖霞山人と號し醫師にして傍書畫をよくし

た。初め佐伯太庵について醫學を修め後長崎に至り、和蘭人醫師シーボルトに就いて洋醫の研究をした。後江州日野に來り洋醫を施した。當時種痘の智識なく天然痘のために生命を失ふもの無數であつた。氏はこの間に在つて頻りに東奔西走よく數郡の患者を治し未然に豫防法を施したが其効果著しきものがあつた。氏は其の功績顯著といふことになつて水口藩主加藤侯より明治維新まで毎年三人扶持を賜り且つ帶刀を許された。氏刀圭に従事する傍文墨に親しみ書畫を愛翫し文詩に長じてあつた。梁川星巖、篠崎小竹、貫名海屋、齋藤拙堂、劉石秋、山中靜逸、日根對山、中西耕石、村田香谷等はその親交する友人であつた。明治二十四年四月十八日病歿した。享年八十四。

故角田浩浩歌客

カクダゴウコウカカケ(文)

文士、通稱勤一郎、浩浩歌客は其號、別に劍南、又富士行者と號し、駿州大宮の人、上京して慶應義塾に學び、業成つて民友社に入り、國民新聞に

二〇五

筆を執り、尋いて清國の志士康有爲に招かれて北京に遊んだが歸朝の後大阪朝日新聞社に入り、明治三十九年大阪毎日新聞社に轉じ、最後に東京日々新聞社に入り、學藝部長となり、才筆を揮つて文壇に馳騁した。著す所「詩國小觀」「鷗心錄」「漫遊人國記」「出門一笑」等がある。大正五年三月逝いた。享年四十八。

葛西善藏

カサイゼンゾウ(小)

明治二十年一月十六日弘前市松森町に生れ、上京して東洋大學等に籍を置いたが卒業しない。舊「奇蹟」同人で「子を連れて」「不能者」「馬糞石」「質物」「哀しき父」等の著書を出して、氏獨得のものも示して大に期待されたものだが、氏は何分にも酒精中毒にかゝつて居るので、作すること極めて稀である。ある人は氏を評して「彼の世界は天でもない、地でもない、天といひ地といふにはあまりに渾沌としてゐる。天地分れざる前のト・ア・パイロンの世界が彼の世界でなければならぬ。」

故嵩 古香

カサミココウ(詩)

彼の生活は混亂と窮乏との連続である。私は整理された彼の生活を見たことが無い。彼程物質の價値を知らぬものは無い。彼は彼自身の生活ぶりを風々主義と言うて居るが、主義と名づけるには、彼の生活ぶりはあまりは茫漠であり渾沌である。しかし彼は節操を無視する男では無い云々」これはよく氏の人のなりを道破して居ると思ふ。編者も氏の滯寧中泥酔の氏と一夜快談したことがあるが、嘗て物の本で読んで居たフランスのデカタン詩人ボードレーヌを想見せずには居られなかつた。しかし醒後の氏は全く別人のやうな氣がする程であつたことも記憶に鮮やかであつた。氏の最近の作としては小説「父の出郷」「朝詣り」「不良兒」「疵」「續不良兒」等があつて、漸次多作能を示して來たのは注意すべきであると思ふ。現住所 相州鎌倉山ノ内建長寺寶珠院内

詩僧、名は俊海、一名は啓安、古香と號し、別號

春桂、天香、大懶、抹谷齋と云つた。武州比企郡大野本村了善寺第十世の住職である。詩を大沼枕山に學び、學内外に通じ、春桂塾を開いて子弟に教授し、郷人往々詩を解する者が多いので、此の村を呼んで詩人村と云つた。大正八年三月十日寂した。享年八十三。

春末夏初偶詠

檐馬嘶、風蟻夢驚、
槐陰滿、地暗、簾旌、
新題下、筆句千鍊、
午倦汲、泉茶一烹、
有脚陽春難、繫駐、
無心草木、自欣榮、
老來唯、愛間中福、
不用、年華費、品評。

故春日白水

カスガハタスイ(備)

儒者、諱は衷、字は仲淵、幼名中二郎、白水又は竹酔と號し、潜菴の第二子、天保十四年九月八日を以て生れ、父に従ひ皇典儒學を修むる二十餘年森田節齋、牧善輔等に文章を學んだ。家兄相模守仲襲病死の後家督を嗣ぎ、正六位伯耆守に任じ、次で久我家の諸大夫と爲つた。時に年十八。維新

の際父の縣知事を以て南都に在る時、白水國事に奔走して久我通久を輔導したが、偶讒者の中傷に遭遇して父子三人囹圄に在ること百餘日の後ち放ち還された。初め東北の亂未だ平定せず廷議參與通久を以て遊擊軍將に擬したが白水之を諫止した。白水父と共に平野に隱棲して聖學を講明し、後進を教育して共に樂しみとなした。明治十一年潜菴の死後白水哀動禮に過ぎた。其の前後より學校の教授となり、或は神官に或は史官に就いて一意父の衣鉢を紹ぎ育英に従事すること十年あまり、門弟千數百人あつたかつて世道人心の頹敗せるを慨き陽明學を朝野に唱道した。或は私費を以て竹林所在の各地に巡回講和して竹林所有者に警告を與へ、或は竹林貿易業者に就て海外に輸出せる状況と統計を調査し、或は竹林培養試験場を設けて竹林造成者を養成しよう欲し、相州に數段の御料地を拜借し、其實地指導と講學に終生盡瘁しよう企てたが、不幸病に罷り遂行することを得ない。戊申の秋家を携へて故山に歸り、東山に隱棲

して聖經賢傳を繙き、或は後圃に蔬菜を栽培して自ら樂んだ。大正五年十二月十六日歿した。年七十四、白水の學宋明諸儒より遠く芻魯に沂つて、且仙釋二氏にも出入し、兼ねて皇漢醫方並に本草學に精通し、著書に「勅語の要略」「同御主意」「同略解」「孝經忠經講義」「國史略字類大全」「祝文演舌軌範」「陽明學真髓」「文集語錄隨筆」「北山史」「皇朝沿革小史」「傳習錄纂言」「竹林培養備考」「竹醉記錄」等ある。

片上 伸

カタガミノブル(評)

明治十七年二月伊豫國の越智郡波上村に生れた。早大文科出身。曾て天弦と號した。大正四年同大學習學生としてロシアに赴き大正七年の夏歸朝した。早稻田派の評論家として文壇の一角に雄視してゐる外、近來藝術教育論を主張して教育界からも注目されてゐる。論文集「生の要求と文學」「思想の勝利」「草の芽」「ロシアの現實」「無限の道」「ドンキホーテ」「自然論」「片上伸論集」の外翻

は其の後繼として學長の椅子を得る筈になつてゐたが俄に職を辭して大正十三年七月ロシアに行くことになつた。

現住所 東京府下西大久保二二七

片桐霞峰

カタギリカホウ(書)

東京の書家。天保五年五月生れた。名は包雄、霞峰は其の號である。夙に書を坂川素石に學び、後巻菱湖に學び又沙門芳庵、桑野松霞等に問うた。明治六年家塾を開き、益々進んで晋唐の古格に入つた。十年商業學校教師となり、この年千字本を書し、之を石刻して府廳及諸學校に寄せて賞狀を得た。十二年教職を辭して書法を教授し又諸方の需に應じて得意の揮毫をなしてゐる。近來其の消息を詳にしない。

以前の住所 東京市小石川區初音町一

片多徳郎

カタタトクロウ(畫)

明治二十二年六月大分縣西國東郡高田村に生れ、

譯「死人の家」隨筆「心頭語」等がある。思想堅實、學殖また豊富にして最も思想家らしき思想家評論家らしき評論家と稱されてゐる。文章は時に少しく冗長とも思はれるやうなこともあるが論旨非常に周匝で一字一句にまでもよく注意が届いてゐて、しかも屈撓性に富み、粘り強き力を有してゐる。資性又頗る謹嚴にして細心であるとの評がある。近頃の評論に「ドストイエフスキイとロシアの思想」「一轉歩」「表皮的差別相の文壇」「脚本改造問題の意義」「有島武郎氏の態度」「批評的精神の問題」等の作を出し、藝術教育を提唱して筆に口に主義の宣傳に力めてゐる。

「一轉歩の如きは極めて緊縮した中に言はんとするところを遺憾なきまでに述べられしかも諄々として其の時弊に論及するや、文壇のあらゆる方面に於て傾聴しなければならぬ暗示や示唆が甚多いのである。

早稻田大學教授及同大學文學科主任、同大學評議員である。尙同大學長金子馬治博士の辭任後、氏

東京美術學校に入つて明治四十五年西洋畫科を卒業した。文展へは第三回に「夜の自畫像」第四回に「黃菊白菊」第五回に「或人の母」第六回に「肖像」「きんかん」第八回に「夏山急雨」第九回に「伐木の圖」第十回に「婦女沐浴之圖」を出して數回褒狀を得、第十一回に「妓女舞踊圖」を出して遂に特選となつた。此他美術院等にも出品があり、好んで大作を試みてゐる。大正八年帝國美術院推薦となり、大正十二年帝展審査員候補者に擬せられ、十四年に遂に之を實現した。

現住所 東京府下瀧ノ川村西ヶ原三二五

片山孤村

カタヤマコソン(文)

本名は正雄、山口縣の人、明治十二年八月生れ、東京帝國大學文科大學の獨逸文科に學び、優等の成績を以て卒業し、後二年間獨逸に留學して彼の地の風物に接し、また諸文豪に就いて親しくその指導を受け、歸來獨逸文學の一權威となつた。著書に「男女と天才」「最近獨逸文學の研究」「伯林」

「獨逸文法辭典」等の外最近に「現代の獨逸文化と文藝」等を出してゐる。「現代の獨逸文化と文藝」は氏が最近各種の雜誌等に出した諸論文其の他を集めたもので、主として獨逸文化の概念を傳ふべきものをまとめてゐる。「表現主義」「駄々主義」「世界大戰の敘事詩」「西洋文化滅亡の思想」「獨逸文化の比較」「佛人憎獨の心理」「ハウプトマンのアトランチス」「老年の呪咀」の外、附録として「象徴的文藝の意義」「科學者としてのゲーテ」「浪漫派としてのフローベール」「猫と文學」等を收めて居るから、最近の世界に於ける指導的地位を占めるやうに至つた獨逸の文化及び文藝思潮を知るには最も適當の書である。氏は第三高等學校教授を経て大正十四年八月九州大學教授となつた。尙ほ我が國の獨逸文學通としては第二高等學校教授の登張信一郎氏、帝國大學教授の藤岡素人博士、早稻田大學の山岸光宣博士等があるが、現代の獨逸を紹介するに努力してゐるのは、先づ指を氏と山岸光宣博士に屈せねばならぬ。尤も竹

組を賜はつた。

風登張教授が新に彼の地より歸朝したならば、氏が二昔前に早稻田を中心とする自然主義運動に對抗した意氣を以て新運動を起すかも知れない。現住所

故片山四郎

カタヤマシロウ(鑑)

美術鑑定家、慶應三年十月江戸青山紀州邸内に生れ父は邑平と曰ひ古畫骨董の鑑識に長じ、少年より父に鑑定の法を受け、出藍の能があつた。九鬼隆一の帝國博物館長となつた時氏を日本美術史編纂係に擢用した。後内務省古社寺保在會鑑定委員を囑托せられ、地方に出張して社寺及舊家に藏してゐる繪畫骨董を觀賞するに従ひ、益々鑑識力を養つた。次て古社寺保在委員に擧げられ、四十二年大美術品選定委員及び奈良帝室博物館學藝委員を命ぜられた。人となり恬淡名利に拘はらず權門富貴に出入しない。故に鑑識時人に卓越してゐるが其名聲廣く世に知られない。四十二年九月二十日病で歿した年四十三。死するに先きだち銀盃一

故片山冲堂

カタヤマチユウドウ(儒)

名は達、字は元章、通稱は直造、弱冠の頃江戸に出で、昌平齋に學び、學業同儕を凌駕して舎長にあげられた。成業の後高松に歸り藩學の助教となつた。従つて學ぶもの甚だ多く文章は尤も其の得意とするところであつた。明治維新の後擢んでられて議事局判事と爲り、尋で参政試補に轉じた。時に昌平齋の舊友重野安釋、藤野海南等東京に在つて文章を以て有名であつた。冲堂も亦文壇に活動する志があつたが偶々病痾の爲果さなかつた。明治二十一年一月病んで歿した。年七十三。氏は性質溫順人と争はない。其昌平齋に在るの頃一時鎖港攘夷の説を主張したが圭角を現はさなかつた。「岳游漫錄」「六石亭詩文鈔」は氏の著すところである。

名は熊治。明治二十年九月熊本市外坪寺町に生れ初め福島峯雲に就き、後高橋廣湖に學んだ。第七回文展に「霜月頃」を出して二等賞を得て忽ち名聲を揚げた。美術院の再興するや第一回到「日和つき」第二回到「作業」第三回到「來迎」第四回到「熱國の夕」を出し益々其の技を認められた。現に日本美術院々友である。現住所東京府下巢鴨宮仲一九三二

故梶田半古

カジタハンコ(畫)

日本畫家。明治三年東京下谷徒士町舊幕臣鷹匠の家に生れた。名は錠次郎。十四歳の時四條派畫家鍋田玉英の門に學び英州と號し、後容齋派に移つた。二十歳の時自畫木版の冊子「しだれ柳」を上梓して號を此頃から半古と改めた。翌年岡倉覺三等と青年繪畫協會を組織し、明治三十年日本美術院に入り、三十一年富山工藝學校教頭に聘せられ三十四年、繪畫共進會に「春宵怨」を出し、續いて「秋」を出した。皆な代表的作品である。四十

堅山南風

カタヤマナンブウ(畫)

二年より引續いて三回東京府勸業展覽會に審査員となり、又巽畫會の顧問となり、四十四年疾を得て相州片瀨に移り、翌年府下大井町に移つた。大正六年四月二十三日歿した。年四十八。彼は大作よりも小品を得意とし、又新聞雜誌の挿畫では一新機軸を出した。門下に小林古徑、前田青邨、高木長葉、上原古年、田代古山、島内松南、羽島古山、井上白揚、夏目利政等の多くがある。今日帝展審査委員として大正浮世繪の大家と稱せられる。楠木清方氏も、水野年方の外、半古の影響頗る大きいとのことである。

勝田蕉琴

カツタシヨウキン(畫)

名は良雄。明治十二年十一月福島縣柵倉町に生れ初め狩野派の大家橋本雅郎に學び、後東京美術學校に入つて明治三十八年日本畫選科を卒業した。卒業と同時に校長の推薦で印度の豪族タゴール家に招聘せられて、日本畫の筆を揮ひ、又カルカツタの官立美術學校に東洋畫教授を囑托せられ、佛

陀の遺跡を歴遊して二年の後歸朝した。文展へは第一回に「降魔」「出城の釋迦」第七回「林の中から」を出して三等賞を得、第九回に「曾根づたひ」第十回に「水引」第十一回に「汀の雨」を出して世の注意を惹いた。

現住所 東京市本郷區上富士前町三

勝島仙坡

カツシマセンバ(詩)

名は仙之助、備後の人、獸醫學博士として夙に名聲を馳せてゐる。また隨鷗吟社協賛員としても斯文會員としても古き漢詩人であり且つ多作をもつて廣く知られてゐる。

墨堤觀櫻花

艶枝倒影落清灣。春在水烟花霧間。

芳野嵐山君莫說。江東有此小仙寰。

東宮行啓臺灣恭賦

儲宮駕峨艦。炎島遠親巡。海濶薰風淨。

天晴夏色新。淡谿青濛漾。高岳白嶙峋。

鳥藥善防瘴。桃源長占春。萬花明的的。

木田守武の研究「八九間柳の話」「尾池の蕉門」「蕪村の江戸時代」「居花澤の清風」等がある。

現住所 東京市牛込區中里町十五

桂井未翁

カツライビオウ(俳)

本名は健之助、明治元年富山縣不動町に生れ、中學校を半途退學の後電信技手となり、更に銀行員となり、金澤に於て鑛山業に従つて失敗し筆子屋の帳場に十數年の間生活するやうになつた。氏は十五六歳の頃既に俳句に興味を有して月並俳句を作り、「日本」の子規派俳風の嶄新なるに共鳴して其の句を習ひ、藤井紫影博士や故直野碧玲瓏氏等に指導を受けつゝ既立の北聲會世話人となり今日に及んでゐる。氏は俳誌及地方の新聞に其の作句を發表してゐるが其の句の多くは「蕪語」に出てゐる。

蕎麥畑の尻長に柿林かな

俳魚目句燕石にして寒き

泣き寒むの讀者折々人に恥づ

百穀蔚秦々。龍眼樹梢熟。鳳梨塵上陣。
東寧名固美。南國物皆珍。蕃族全休鬪。
群黎就化醇。鯤身非異域。鹿耳亦王臣。
歡喜邀鑿略。謳歌頌帝鈞。悅仙傾舍出。
酉長正裝臻。聖德深逾大。熙熙向日民。
日下勺水はこれを評して、「風土習俗、布陳具備して、結ぶに聖徳の深大を以てし、頌揚體有つてその妙甚し云々と。其の凡手で無いことがわかる。現住所 東京青山原宿一七ノ二

勝峰晋風

カツミネシンブウ(俳)

名は晋三、明治二十年十二月東京市牛込區矢來町に生れ、東洋大學に入學して明治四十一年に卒業し、報知新聞萬朝報等の記者をして居つたが、大正十年時事新報に入り今日に至つた。氏は記者生活の傍俳諧史の研究に力を注ぎ「新選一茶全集」「閨秀作家全集」「其角全集」「芭蕉俳句定本」等を編纂した。其角全集のごときはとりわけて骨の折れた事業である。最近の研究には「芭蕉雜記」「荒

現住所 金澤市片町五三

加藤朝鳥

カトウアサトリ(文)

本名は信正明治十九年九月十五日鳥取縣東伯郡社村不入岡に生れ早稻田大學英文科に入つて學び、明治四十五年卒業し、創作翻譯等の著述事業に従つて居る。大正九年南洋ジャワに航して、其の地の新聞經營をやつて「ジャワ日報」を出したが大正十年之をやめて歸朝し、「週間日本」の文藝欄を擔當してゐる。著譯に「ジャワの旅」「最近文藝思潮」「黎明」「犠牲」「シヤイロツクホルムス」「ピーターとジョン」「新文學辭典」「タゴール聖想錄」「名犬物語」「七日物語」等の外其の數甚だ多い。夫人みどり女史も閨秀作家として名をなしてゐる。尙朝鳥氏は東中野女子高等學院に於て英文學の講義をなしてゐる。

現住所 東京市外戸塚町上戸塚六九七倉光方

加藤有年

カトウアリトシ(書)

於て、銅賞を得、又第五回内國勸業博覽會及文展第二回の出品は長くも宮内省御用となつた。文展へは第二回に「うそ寒」第四回に「秋晴れ」「かすみ網」第十回に「大羽打圖」を出して褒状を得好評を博した。

現住所 京都市東洞院松原南

加藤介春

カトウカイシユン(詩)

本名は壽太郎、明治十八年五月十一日福岡縣田川郡上野村大字市場に生れ、明治四十一年早稻田大學英文科を卒業して、記者生活に入り先づ東京韻文社、早稻田詩社及び自由詩社の同人となり四十二年福岡市九州日報社に入り今日に至つた。現に同社編輯長兼社會部長の要職にある。詩集「獄中哀歌」「梢を仰ぎて」等の著がある。

呪はれた傳統

俺の子供はうつくしい、
すき通つた眼は愛らしい星の友達だ、
いき／＼とした顔は大空の太陽だ、

尾張名古屋の鐵筆家、文久元年十二月十一日藩邸に生れた。幼名は熊吉、後今の名に改めた。諱は鵬、字は九萬、有年は其號であるが通稱とした。別に壽石の號がある。幼より鐵筆を好み明治八年十四歳の時高岡永年翁の門に入り篆刻を學び大に其の技術を磨いた。こゝに學ぶこと前後凡そ六年明治十五年東京に遊學し諸先輩の門を敲き斯道を研究して大に得るところがあつた。此年十一月先師永年翁病歿するに及んで歸郷し其業を續いた。同十八年圓山大迂に鐵筆の眞法を受け後一家をなした。傍新舊の書畫を嗜み所藏のもの頗る多く鑑識に長じてゐる。

現住所 愛知縣名古屋市桶屋町一〇九

加藤英舟

カトウエイシユウ(畫)

名は榮之助明治六年十二月名古屋日之出町に生れ初め幸野椹嶺、岸竹堂に學び、後竹内栖鳳に就いた。二十四年秋田傳神會で受賞したのを始めとして、岐阜繪畫共進會、名古屋新古美術展覽會等に

俺はそのうつくしい子供を見て

俺自らの少年時代を考へる――

俺の子供と全くおなじ少年時代を

遠い／＼夢の如くに考へる――

父も子も全くおなじ不思議なすがたを考へる。

俺は今父として考へる、

そのうつくしい姿が俺自身であり

又俺の子供であることを考へる、

けどもそれはなんでもない

只人間として永遠に生きんとする傳統にすぎない――

或時ははげしい焦躁となり、

又おそろしい執着となる人間の傳統にすぎない――

そこに無限の意志がつたはり

無限の感情が流るゝ

生命の傳説にすぎない――

うつくしい俺の子供よ、
手を振つて濶歩せよ、
おまへは強い父祖の子だ——
けれどおまへはうつくしい唇を慄はせて罵り、
欺くことを知つてゐた、
人とあらそひ又人を傷つけて
その赤い血のながるゝを喜んだ、
あさましい盗みをも知つてゐた。
現住所 福岡市薬院東川端一

加藤 一夫 カトウカズオ(文)

明治二十年二月二十八日和歌山縣西牽婁郡大都河村防己に生れ、明治學院高等學部及び神學部を卒業して、大に精神的方面に力を盡さうとして傳道事業にたづさはつたが、二年程之に従事した後思ふ處があつて教育界に入り、女學校の教師たること僅かに一學期間、更に方向を轉じて文藝界に入り外國文學の紹介につとめ、特に露西亞ものゝ紹介に力を盡した。又社會運動にもたづさはつて其

の筋に注意される程になつて居ることは、新聞子の常に屢々記載するところであるから、こゝに書く迄のことも無からう。氏の著「自由人の生活意識」は氏の統率する自由人聯盟の眞精神を大膽に提示したものである。長篇「無明」「虛無」及び「幻滅の彼方へ」短篇集「響かぬ鐘」論文集「本然生活」「土の叫び地の囁き」「民衆藝術論」「救ひの無い人生」「自由人の生活意識」「トルストイの人道主義」「死の前に」並にトルストイものゝ翻譯が數種ある。雜誌「科學と文藝」及び氏の主義宣傳雜誌「自由人」の編輯に従つてゐる。
現住所 兵庫縣武庫郡芦屋六四三

加藤子柏堂 カトウシハクドウ(畫)

名は直彦、明治五年一月京都市に生れ、望月玉泉岸竹堂の諸大家に學び、二十八年第四回内國勸業博覽會に褒狀を得てより諸所に出品して賞狀をうけし事多く、米國聖露易博覽會京都館に壁畫、日英博覽會東京出品館に壁張天井畫を描き、又東京

歌舞伎座に前後二回天井畫を描いた。日本美術協會、異畫會等に會員となり、文展へは第十一回に「隔膊飛揚」を出し其の天才を示してゐる。
現住所 東京市芝區高輪北町三一

加藤 靜兒 カトウセイジ(畫)

明治二十年六月愛知縣海西郡十四山村に生れ、後東京美術學校に入學して同じく四十三年に西洋畫科を卒業し、文展へは第一回に「青丹よし」第二回に「春の光」第三回に「山かげ」第四回に「君が代蘭」「渚」第六回に「屋後」第七回に「網を干せる朝」第八回に「篠島より小磯を」第九回に「花ばたけ」第十一回に「外濱」其の後「麥の家」を出して數回褒狀を受けた。此他光風會等にも出品して好評がある。
現住所 東京市本郷區曙町十六ほノ五號

加藤 雪腸 カトウセツチヨウ(俳)

名は孫平、明治八年一月二日遠州川崎町江細に生

れ、師範學校卒業後三十五年中學教員免許狀を得て學校教師を勤むること十九年、現今は大阪濱松等に於て商業に従事してゐる。氏は二十七年の秋より數年の間正岡子規の指導を受けて俳句に興味を覺え、三十二年頃同志と謀つて芙蓉會を駿河に起し雜誌「芙蓉」を發刊したこともある。氏の句は嘗て「ホト、ギス」に、後には「日本及日本人」「静岡民友新聞」「芙蓉」等に投稿したが、「新俳句」其他の諸俳書に散見してゐる。
換へ地見に來てむら紅葉寺跡あり
穗芒の意を默契や君と我と
黄芙蓉に秋の日和を定めけり
酒の淡きを飽き足らぬ腹柿膾
現住所 濱松市元城四二五

加藤 武雄 カトウタケオ(小)

明治二十一年五月三日神奈川縣津久井郡川尻村に生れ、小學校卒業後四十三年まで神奈川縣下に於て小學校準教員をなし、同年上京して新潮社に入

り、創作に従事して今日に至つた。短篇集「郷愁」「夢見る日」「處女の死」「幸福の國へ」「彼女の戀人」長篇小説「惱ましき春」先驅者「久遠の像」等がある。「久遠の像」は堂々七百枚の長篇、作者の最も自信ある作である。天才畫家桂木亮とその義妹にして愛人なる玲子の戀と藝術との悩みを描ける深刻精緻なる心理描寫は高調多彩の筆と共に文壇多く類を見ない。妻に裏切られたる苦しみより一轉して惡魔となり行く男の心、不倫に落ち行き處女の純潔を奪はれつゝ地獄の底に愛の秘義をつかむ女の魂、之にからむに淫蕩極りなき人妻があり、放縱無節制の藝術家があり、己れの戀を犠牲にして愛人の遺孤を育む高潔の紳士があり一篇美しい哀しい戀物語であると共に大膽な現代生活の解剖圖である。氏の作風は頗る地味で且つ手堅い手法を以て、生活の眞味を巧みににじみ出させるといつたやうで、文章世界創刊當時からの優秀な投書家である。そして夙に名文家達筆家として聞えたもので、田山花袋氏あたりから賞讃されて

創作的野心をそゝられた。従つて當時の自然主義的影響を多分に受けたことは止むを得ない。併し氏は殆んど明らかに其の傳統から脱しそのからを捨て去らうとして新しき道を求めて進んだ。氏が作家として認められるに至つたのは、大正七八年頃「出發」を書き、「嗚咽」を發表し、續いて「はじめな戀の話」を公表するに至つてからのことである。氏は體驗をそのままに書く作家でも無く、又體驗以下のものを書く作家でも無く、常に體驗以上のものを展開して見せる作家だと批評して居る人もある。兎に角氏は如何なる題材でも相應に書きこなす作家である。

現住所 東京牛込區矢來町三舊殿十七號

加藤まささを カトウマサチ(畫)

氏は青年畫家であつてまた抒情詩人でもある。氏の作品は優雅な詩であり幽遠な音楽である。抒情小詩集「涙壺」の外、幼年時を追憶したところの童謡畫集「合歡の搖籃」といふのがあつたが、これ

は童謡と小曲との渾一せる世界を示して居る。畫家にして詩壇文壇に相當の活動をしてゐる人に、竹久夢二、有島生馬、平福百穂、安田靉彦等の諸氏がある。

現住所 東京市

加藤 謙 カトウユヅル(文)

明治二十九年二月岐阜縣土岐郡妻木村に生れ、上京して青山學院中學科を卒業し、大正三年八月讀賣新聞文藝部に入り、現に同部の美術方面を主として擔當してゐる。大正六年雜誌「鐘が鳴る」を創刊したが僅に十五號を以て廢刊の止む無きに至つたが後復興して大森より現在の地に移つた。

現住所 東京府下荏原郡馬込村大字小宿一四〇七

故門 脇重綾 カドワキンゲアヤ(歌)

歌學者にして勤王家、將曹後に少造と稱し、雙園と號し、伯耆國渡村の人、幼より心を國學に傾け和歌に長じ、人となり峻峭で、高潔慷慨で氣節が

あり、鳥取藩學の教授となり、慶應四年藩命を以て官軍に従ひ、山陰道に轉戦した。維新の際徴士となり、辨官事に任じ、議論侃諤であつたので、大久保利通、木戸孝允等之を畏敬した。重綾歌道を以て門戸を張らなかつたが其歌雄宕剛勁でまた含蓄がある。尤も長歌に工あつた。明治の初大嘗會舉行の時飯田年平、八田友紀、福羽美靜等と共に擇ばれて御歌掛となつた。それによつても全國歌壇に於ける地位の重きを察することが出来る。重綾彈正臺に要職を経て正五位教部大丞に至り、明治五年八月三日年四十七で病んで卒した。大正八年十一月從四位を贈られた。

故金井秋蘋 カナイシウヒン(詩)

名は雄、字は飛卿、金井之恭の次男である。資性磊落邊幅を修めない。尤も詩を善くした。其の詩飄逸奇峭詩壇の奇才をもつて聞えた。嘗て獨に留學すること十年、歸朝後第四金澤高寺學校の講師となり、又聘せられて清國に趣き常熟縣蒞實學

堂の總教習となつたことがある。明治三十八年六月十四日腦溢血を以て其の別荘三嶽莊に於て歿した。享年四十二、著書に「秋蘋遺稿」一卷ある。

金森觀陽

カナモリカンヨウ(畫)

名は頼次郎。別に鵬南と號す。明治十五年富山縣に生れ、浮世繪の大家尾竹越堂に就て學び、文展第五回には「おどり」第九回に「つどひ」を出して褒状を得た。犬正七年一月久保井翠桐、山口草平、矢野橋村、北野恒富、水田竹圃、島成園等と大阪に茶話會を起し斯界に畫すところが尠くない。

現住所 大阪市南區天王寺六萬休町五〇六〇

金森匏瓜

カナモリホウカ(俳)

名は利兵衛、明治九年十二月一日宮城縣石巻町に生れ、東京に於て實業に従事して金物屋、度量衡販賣、西洋小間物等の商業をなし、又新聞雜誌記者、著述業、料理新聞主筆、校正者等をなし、其

の間に句作に従つて「藻の花」「日ぼこり」等に投句し、「明治俳家句集」「新俳句自在」「月分け季寄せ」其他の著書がある。

現住所 東京淺草馬道

金山平三

カナヤマヘイゾウ(畫)

氏は神戸に生れ、東京美術學校に入つて明治四十二年西洋畫科を卒業し、同校助手となつたが後フランスに留學して大正五年歸つて。文展へは第十回に「夏の内海」「巴里の街」第一回に「氷すべり」「造船所」を出して二度特選となつた。大正七年更に文展の推薦となり、同八年より帝展審査員となり、十二年大震災後秋季に開催された日本美術展覽會の審査員を囑託せられてあつた。

現住所 東京市小石川區大塚坂下町三

金子薰園

カネコクンエン(歌)

名は雄太郎。明治九年十一月東京神田に生れた。祖父並に母の文學的感化を受け幼時より好んで論

文を作り豪健な漢文直譯體の文を喜んだが落合直文氏の新しい國文體の作を讀んで隨喜措く能はず二十六年その門に入り和歌と其の書を學んだ。三十四年歌集「片われ月」を出して詩名をあげ、當時「明星」に據れる與謝野鐵幹子の叙情派の歌を主として發表せるに對し叙景の歌を以て歌壇の一方に雄視した。

爾來「小詩國」「伶人」「わがおもひ」「覺めたる歌」「山河」「草の上」金子薰園集等の歌集を公にして歌壇の耆宿として世に重んぜられてゐると同時に文章に於ても亦一家をなし、その雅健の筆は世に鳴つてゐる。散文集には「自然と愛」がある。文章作法和歌作法等の著述頗る多く、歌文の師として當代有數の人である。氏の歌は溫藉にして明麗情趣ある色彩と氣分とを湛へてゐる。氏の門より出でて歌壇に名をなした人は随分多い。「文章俱樂部」編輯幹部の一人であつてまた「日本文章學院」主幹の一人である。大正七年十一月雜誌「光」を創刊し氏の主宰せる短歌研究會の機關誌

にした。作歌講話の外數百種の短歌が載つてゐる。

歌集「金子薰園集」「靜まれる樹」の外「作家練習法」「作歌辭典」「歌に入る道」「歌の作り方」其他多くの著書がある。新潮社員

晩春の鎌倉山をさまよへるわれの姿の僧と見ゆらん

枯草の見よげに黄なる色に染むそのさびしさのつゝましきかな

冬の日のものに飢ゑたる眼をとめて萬年青の赤き實をしぼし見る

なりはひの蟹の子がする物眞似に釣すれば章魚のかゝり來にけり

青々と梢茂りて庭の木のあかるき中に蜂のうなれる

山脉の間に淡くあゐいろの水見ゆ晴れし丘のぼれば

現住所 東京市外高田町一三七一

金子筑水

カネコチクスイ(哲)

名は馬治、明治三年長野縣上田に生れ、苦學奮勵して今日の地位をかち獲たのであつて、この點既に人の模範とするに十分である。氏は早稲田大學の前身なる早稲田専門學校の文科に入つて大に勉強し、天才と相俟つて遂に首席といふ優等の成績を以て卒業し、同校第一期生中の秀才として知られて居る。即ち島村抱月氏より一期前の卒業である。氏は母校の名教授にして恩師なる坪内逍遙博士の後を受けて文科大學長を襲つて其名を恥かしめない。氏はあまり花々しい事をやらないので、氏の眞價を知らぬものが多いやうだが、部藝哲學等に於て造詣甚だ深いさうだ。嘗て獨逸のライプチヒ大學で哲學を修めてドクトル、デル、ヒロンヒイの稱號を得た。「近代思想の研究」ベルグソンの「創造的進化」ニイチエの「悲劇の出世善惡の彼岸」「生活と文化」「歐洲思想大觀」等の著譯がある。氏が最近の著書なる「歐洲思想大觀」は

一一二

先づ思想より説き起し、キリスト教、ルネサンス唯理思想、ロマンチズムと順を追うて記述し、更に最近代に至りては現實思想、自然主義、社會主義思潮、プラグマチズムに至るまで、あらゆる歐洲思想の變遷推移の跡を明らかにし、説くところ簡潔で一讀以て其の全般に通ずることが出来る。近時やかましく言はれて居る文化に就いての意見等も、帝大では桑木嚴翼博士、早稲田では氏が最も親切に説示してくれたのであつた。氏は同校の文學部長の外教授であり且つ維持員ともなつて居る。

現住所 東京麹町區飯田町

金子光晴

カネコミツハル(詩)

明治二十八年十二月二十五日愛知縣海東郡津島町に生れ、京都の小學を終へて東京曉星中學校に入り、更に早稲田大學英文科に學び東京美術學授慶應義塾大學等には入つたが、何れも氏をして落付いて勉強させるに適當な場所でなかつたものと見え

次韻答人

孤寒 絶似老僧家。 顧影 自憐 雙鬢華。

且待春風蘇病骨。 梅邊 共煮一甌茶。

金子洋文

カネコヨウブン(文)

本名は吉太郎、明治二十七年四月七日秋田縣土崎港に生れ、大正五年に上京し記者生活に入り、日本評論社、毎夕新聞社に入つて文筆の仕事に従事し、また種時き社の同人としても相當の活動を示して居る。著書に「夜の水車」「洗濯屋と詩人」「犬」「老船夫」「村の慈善會」等があり、其の後の作に「瘦せて蒼白い顔をした夫」「群盲打破論」等の小説評論の外に戯曲「孤」を雑誌「解放」「種時人」「中央公論」等に發表して居る。

現住所 東京府下代々木四二五

故金子兼次郎

カネコカネジロウ(彫)

弘化元年九月千葉縣東金町に生れ幼時江戸に出て刀劍裝飾家に就いて研究し各工藝品の鑑定に熟し

金子元臣

カネコモトオミ(國)

て、何れも中途退學をした。大正八年ベルギューフランス、イギリス等の諸國に遊學し、歸朝の後詩集「こがね蟲」を著した。

現住所 東京牛込區赤城元町一

横園と號す。明治元年東京市に生れ、苦學力行によつて遂に歌人國學者となつた。氏の著書中最も有名なるものは古今集評譯であつて、氏が後に宮内省に入つて御歌所寄人となつたのはこの書の世に認められた結果であると言はれたほどである。其他和漢朗詠集評釋枕草紙評釋も忠實の著である。近來萬葉集の實地研究をするため集中の地理的踏査をやつてゐる。尙大正十三年五月四日を第一回として「源氏物語聽講會」を始め、數年に亘つて日本の國寶的創作たる源氏物語の講義をしてゐる。氏が源氏物語の研究に没頭すること既に二十年、類書を集めること三百種、何れの圖書館も氏の藏書には及ばないと言はれてゐる。

一一三

又劍鞘の製作に精しく、名工鞘兼と稱せられた。明治維新後は各種の彫刻に専心し、牙彫の外、鑄金家としても知られた。後龍池會設立に與り、又東京彫工會の前身なる勸工會を起し、後進を開發誘導した。内外の展覽會に出品して受賞甚だ多く宮内省の御用命をも蒙つた。大正三年一月年七十一で病歿した。

加納作次郎

カノウサクジロウ(小)

明治十九年一月石川縣羽咋郡西海村字風戸に生れ早稻田大學の英文科には入つて明治四十四年に卒業し、大正二年より博文館編輯部に入つて文藝雜誌「文章世界の編輯を擔當し、滿八ヶ年の後即ち大正十年四月こゝを退社した。氏は吉田其の他の同じ畑で育つた早稻田系作家のやうに數に於て多くは書かぬが、其の手法の確なことを、現實を素直に卒直に觀照すること等の特色を十分發揮してゐる。才で描かうとする作家の多い我が文壇に於て氏はやうに眼で描かうとする作家の勃興して來たのは歡ばしい現象であつて、才で興つたのは才で亡びるが、眼で興つたものは眼で亡びることが無いと評し、また少くとも藝術の世界に於ては、才を延長させれば虚偽に達し眼を徹底させると眞に到るといふやうなことを言つた人もあるが、氏は

故狩野晏川

カノウアンセン(畫)

畫家、名は貴信、皆春齋と號し、實に狩野一溪十三世の孫である。根岸御行の松下に住し、夙に畫を伊川院榮信の門に學び、曾て金砂古代模様之衰へたのを嘆じ、且つ此の技の之を神祠の門扉に施して他物に及ばないのを惜しみ益々其の技を究め明治の初め秋草を書いて墨に配するに金砂を以てして、之を第一回博覽會に出し大に人目を驚した。後帝室博物館長山高信離氏に命じて、豫め屏障の圖様を製寫せしめた。晏川大に意匠を運らして之を奉り、是より其の名益々顯はれたが、明治

確かに眼の藝術家と言ふ評は當つて居ると思ふ。長篇小説「若き日」「小夜子」「傷ける群」「幸福へ」創作集「世の中へ」「霞の音」「寂しき路」「厄年」「支那人の娘」「處女時代」「誘惑」「微光」「恭三の父」等の著がある。氏は文章世界編輯といふ煩累が無くなつたので多作をするやうになり、近く書いたものに「純情」「夢想家」「喜ばしき夢」「父の顔」「二つの結婚」「見えざる影」「おびえ」「枇杷の實」「一人の女」「小さな革命兒」「松藏の生活」「曙光」「生命の灯」といふやうに活動を續けてゐる。併し多作能を示すやうになつた今日、かの「世の中へ」を出して世間の注意を惹いた程のものはまだ出ないやうである。作家にして批評壇に活動しない者は少いのに、氏のみは小説創作に専念して居るといふことも文壇上では注意すべき事であると思ふ。

現住所 東京牛込區南横町一五七

加納鐵哉

カノウテツサイ(彫)

東京の彫刻家、名は光太郎、年甫めて十七出家して景仁と稱し濃州厚見郡長良村崇福寺といふ臨濟の禪寺に弟子となり、明治元年春還俗して鐵哉と號し、中國を順遊すること七年餘明治七年冬上京して都下に彫刻を業とした。十九年奈良に古代什器を調査して造詣する所があつた。爾來文部省に出仕して美術學校創立以來同校に教鞭を執つた。其の間博覽會及奈良大佛殿内博覽會等へ出品して賞品を受けたことが數回あつた。

現住所 奈良市高畑町

狩野探令

カノウタンレイ(畫)

名は守純。前姓荒木。安政四年一月羽前國に生れた。狩野探美について學び、諸所の展覽會に受賞すること三十餘回、日本美術協會委員、日本畫會幹事となり、三十三年、東宮殿下御座船内部裝飾畫御用、三十七年、東宮御所壁畫を命ぜられ、四十二年、陸軍省の命により、後樂園玉座御杉戸に揮毫した。

現住所 東京市下谷區谷中清水町二〇〇

故狩野友信

カノウトモノブ(畫)

江戸の人。舊幕輿繪師四家の一なる濱町狩野の後裔、常信十三代の孫で、春川狩野友信と號した。薰川の長男で畫を狩野勝川雅信に學び、十六歳の時、將軍家茂に知られて輿繪師となり、明治初年ワグマンに洋畫を學んだ。後、開成學校及大學豫備門の畫學校教諭となり、圖畫教育取調所教授に任じ、東京美術學校助教となつた。後、晩年まで東京聾啞學校に教鞭を取り、又フェーロサに狩野流の畫法を講じたこともあり、兎に角狩野派の巨擘として重きをなしたが、大正元年七月に病歿した。平素謡曲と狂歌を娛しんだ。

故狩野芳崖

カノウホウガイ(畫)

幼名は幸太郎、文政十一年長府に生れた。後松隣と號し稍長じて皁隣、又翠庵と改めた。家は代々長門豊浦藩の抱繪師であつて父の名は董信、本姓

二二六

は諸葛、晴皁と號し、木挽町狩野家に學んで其姓を許された。芳崖早くより父晴皁に就いて狩野派の畫を學び、十九歳の時江戸に出て木挽町繪所に入り、勝川狩野雅信に師事して勝海雅道の名を受け、入塾の日より橋本雅邦と知り、後年互に相許すに至つた。少壯の頃より既に古法墨守の愚を悟り、維新の際には歸國して筆を捨てたが、明治十二年再び上京して貧苦と戦ひ、専ら畫の研究に盡す。第一回繪畫共進會に「壽老人」を出し、第二回到「雪景山水」「櫻下駿馬」の二幀を出し、フェーロサに知られ、それより共に美術學校の開設に盡力したが、其實現に先立つて二十一年十一月年六十一で病歿した。彼は雅邦と共に明治畫壇の二大巨擘で、西洋畫に得る處があり、大膽なる構圖と奔放なる手法に於て其清新さを見せた。作品には「犬追物卷物」「悲母觀音」「不動明王像」「猛鷲圖」「龍虎圖」「達磨圖」「巖石圖」「琴棋書畫圖」「魁將軍の一攫」「懸崖飛瀑」等がある。大正八年京都博物館に作品を陳列して一般の觀覽

を許したが「猛鷲圖」の如きは特異の光を放つてゐた。

鹿子木猛郎

カノコギモウロウ(洋畫)

明治七年十一月岡山市東田町に生れ、夙に丹青の道に志し、洋畫を松原三五郎氏について研精し、二十三年上京して共立學校に學び、二十五年更に小山正太郎氏の不同舎に入り、二十八年文部省の中等教員檢定試験に合格し、滋賀、三重、埼玉諸縣の各中學校に奉職し、三十二年辭職し住友家の扶助を得て翌年歐米に航し三十七年十一月歸朝した。後京都高等工藝學校講師に聘せられたが、再び住友家の補助によつて渡佛し同國のアカデミーに入り、三十九年同國の「サロン」に出品して合格し、又「ジミアン」の賞牌及賞金を受くるの榮譽を荷つた。四十一年歸朝後關西美術院々長となり又文部省審査委員に擧げられ、第七回まで洋畫の審査をした。大正四年三度渡歐して彼の地の大家に接し益々其の技を練つた。作品には「ローラン

又畫伯の肖像」「漁夫の家」「ノルマンデーの海岸」「新夫人」「淺間山中」「河原氏の肖像」「林泉」「紀州勝浦」「インスピレーション」「舞子の濱」「肖像」「鴨東の妓」「若王子瀧」「加茂の競馬」「逍遙」「水の流れ」「書齋に於ける平瀬介翁」「札幌郊外」等がある。氏は不倒と號して日本畫をも善くし、洋畫に於ては太平洋畫會々員として長く活躍を續けて居る。其の後四度佛國に渡り泰西美術の眞髓を究めて居る。大正十三年文展審査員候補者に擬せられ十四年これに擧げられた。現住所 京都市下鴨町北浦七

鏑木清方

カブラキキヨカタ(畫)

名は健一。明治十一年八月東京神田佐久間町に生れ、九歳の時柴田眞哉の門に入り、十四歳の時水野年方の門に移つた。展覽會へは三十二年の美術院へ出したのが初めて爾後毎年出品し三十四年六月、同志英朋、輝方、靜方、英忠、古洞、耕花等と烏合會を組織し、翌年から毎年三四回宛展覽會

二二七

を開いた。四十年春東京博覽會に「とつぐ人」を出し、其秋、第一回玉成會へ「花吹雪」「落葉時雨」を出して好評を得た。文展へは第三回に「鏡」を出して褒状、第四回に「女歌舞伎」第五回に「朝顔と驛路の女」第七回に「かろきつかれ」を出して褒状又は三等賞を得、第八回に「墨田川舟遊」第九回に「晴行く村雨」を出して二等賞を受け第十一回に「黒髪」を出して特選の主席を占めた。此他各種の展覽會に受賞多く、大正五年結城素明吉川靈華、平福百穂、松岡映丘、田口掬汀等と金鈴社を創立した。又、早く象外畫塾を開いて後進の誘導につとめてゐるが其門に門井掬水、伊藤深水、西田青坡、寺島紫明、石井掬水、大久保青園柿内青葉、林杏華等を出した。七年文展推薦八年以來帝展審査員となり、大正十二年大震災災後秋季に開催された日本美術展覽會の審査員を囑託せられた。尙氏の父は明治中期の小説家條野採菊である。

故鎌田正夫 カマダマサオ(歌)

初名は仙十郎、鹿兒島の人、家は代々家老職を勤めた門閥家で大西郷や大山侯などの上に立つ家格であつたが幼時から歌を好んで八田知紀に従つてひたすら敷島の道にいそしんだ。明治十九年御歌所に這入つて後は高崎正風氏について學び其の高雅な歌風は當代歌人中屈指のものであつた。性質恬淡寡言剛直であつた。大正四年恰も還曆に當つたので門下生は祝賀の筵を催す計劃であつたのに御大典と一緒になつたので其折を見合せてゐた。然るに急性肺炎症の爲遂に大正四年十二月十三日赤坂區高樹町の自邸で歿した。氏は御歌所寄人日本歌道奨勵會評議員としてよく知られてゐた。足曳の山のいはほのいはねども富めるはしるし四方の烟に君なくば誰か雲井に聞えあげん遠き清洲のあしたつちの聲ちりつかの餌をあらそひて村鳥さわぐに似たる

世にこそありけれ
遣水にはなてるかじか啼きかはし若葉涼しき山
かげの庭
いづかたに出でましぬらんちよろづの民の嘆き
の聲を残して

最後の住所 東京市赤坂區高樹町

鎌田正憲 カマダマサノリ(國)

明治十九年八月大分縣東國東郡富來町に生れ明治四十三年國學院を卒業した。氏の父正行は地方の神職として國學作歌に造詣あつたので家學を受けたのが國學を研究する興味を興へた、主として國學院雜誌に寄稿して諸種の研究を發表してゐるが著書としては「考證伊勢物語詳解」の外に池邊義象氏との共編「校定源氏物語詳解」等がある。現住所 東京市外西大久保三七八

故鎌田梁洲 カマダリョウシュウ(儒)

伊賀の儒者、諱は政學、字は翔甫、豕世々伊賀名

張藤堂氏に仕へてゐる、梁洲初め井上貞頭に從ひ後上野の講官小谷集松の門に遊び業成り郷に歸つて儒者見習ひを命ぜられた。天保二年家を嗣ぎ尋いで儒者となり、大に重用せられた。嘗て藩主藤堂高猷の前に於て周易を進講じ、大に賞せられ禮服を賜はつた。嘉永六年家老職となり祿を増し、梁洲の名四國に聞え、來り學ぶ者多い。安政五年兒童教育の不振を慨き、訓蒙寮を開いて課程を定めて。爾來藩中子弟の學に志す者大に加つた。藩政に參與すること多年漸く閑散の生涯を思ひ、屢ば致仕を乞ふたが藩主之を聽さない。猶固く請うて僅かに家老職を免された。是より専ら人材教育に従ひ、別に文學會を興して壯年子弟の薰陶に盡瘁し、明治二年漢學一等教師兼國學教師、崇廣堂講官、思齊舍教頭に任ぜられ、上野學館典籍を兼ね幾ばくもなく病で歿した。

鎌原手渚 カマハラシユシヨ(詩)

信州松代藩士赤澤蘭溪安實の男、名は重仲、手渚

は號、仲次郎は其の通稱である。文久元年七月松代の家中に生れ、同三年伯父鎌原觀水の後を繼いだ。長じて東都に出で岡鹿門、森春濤諸老の間に往來し詩文を研究した。各種の公職を経て長野米株商品取引所理事となつてゐるが吟詠は絶たない。近來その消息を詳にしない。
現住所 長野縣松代町

上川井梨葉

カミカワイリヨウ (俳)

名は良、明治二十一年一月十五日東京日本橋區吳服町に生れ、開成中學を経て慶應大學理財科を卒業した。氏の父甚兵衛氏は俳號を仙芝と云つて發句を好んだし、子規居士在世の頃ホト、ギスの全盛當時、其角堂より出で、新派に移つた江戸庵即ち今の庭後は氏の實兄であるから、自然その感化をうけて俳句に興味を有するに至つた。のち牛込の自邸にある一庵に冷泉、庭後、大菫、不染、等と打寄りそれに内藤鳴雪、高濱虛子、故醉佛等の諸家も來會したので一層趣味を感ずるやうになり

岡本癖三醉の指導を受け、慶應義塾内三田俳句會に絶えず出席してその牛耳を執るに至つた。後「藻の花」の人々と相知るに及んで、孤軒、朱泉、匏瓜、傘雨、白水朗、春草、喜舟、古櫻等の諸氏と交り、舊野椿花を改めて梨葉と稱した。のち庭後氏の俳書堂を輔けて「俳諧雜誌」に力を盡してゐる。氏の句は「藻の花」「俳諧雜誌」等に投稿され「藻花集」に收められてゐる。著書に「藻花集」がある。
現住所 東京市牛込區新小川町三ノ一六

神近市子

カミチカイチコ (文)

明治二十一年長崎市に生れ、女子英學塾を卒業して、英語教師或は新聞記者をしたことがある。小説集「村の反逆者」「引かれ者の小唄」「島の夫人」等の著及「疎隔」「お仙の縁談」「Theatistの死」等の作及數種の翻譯がある。曾て故大杉榮氏の夫人であつたが今は鈴木厚氏の夫人である。
現住所 東京市外下濠谷羽根澤

上司小劍

カミツカサシヨウケン (小)

名は延貴。明治七年十二月十五日奈良市水門町に生れた。手向山の神官の従弟で中學校卒業の外學歴はない。久しく讀賣新聞記者をして寸鐵殺人的の短文によつて世に認められてゐたが、いつの程よりか書き出した短篇にその技倆を認められ、自然主義全盛時代より引きつゞいて今に至るまで秋聲白鳥等と殆んど同等の地位を文壇に持續してゐる。長篇小説「木像」「お光壯吉」短篇集「鱧の皮」「父の婚禮」「花瓶」等の作がある。多くは關西に材をとり深刻な關西人の性格を描く。神官生活などの材料が時々小説中に出てくるのは、自己描寫といふ事やかましい當時材を關西に取ると同じ意味に於て、自家藥籠中のものを材料としたのである。曾てクロボトキンに私淑し社會主義的思想を有し、社會問題についても一隻眼を有してゐる。その文章は織巧で皮肉に富み毛彫のやうな細い筆で物を描くその技倆のたしかさに於て一寸

匹敵する人がない。小説の外小品集「その日その日」「小さき窓より」「金魚のうろこ」等がある。嘗つて讀賣新聞編輯長代理兼文藝部長の職に居たこともある。讀賣新聞が文藝的色彩の他新聞よりも濃厚なのはかういふ人や土岐哀果氏のやうな文士が中堅となつて居たが爲であらう。
最近性問題労働問題のやかましい時に際して小説「東京」を書いて「第一部愛慾篇」「第二部労働篇」を出し「石川五右衛門」を著した外短篇「かくし髻」「幽霊」「ベルの音」「遷卒」「心」「二老人」「ガラス」「洋傘」「弱點」「三月堂」「鏡に向ひて」「幸福人」「蜂」「嫁」「寅號金庫」「白色の恐怖」長篇「日蔭の女王」「後妻」「白い蚊帳」等を作つて創作能力の絶大なことを示してゐる。
現住所 東京市外下目黒四二二

故龜谷省軒

カメダニセイケン (漢)

漢學者、名は行、字は子省、對馬藩士で後に東京に住した。富商の家に生れながら儉朴で學を嗜み

常に僻陋良師に乏しいのを憾み、笈を負ふて四方に遊ばうと欲し、年二十四の時病と稱して致仕し家産を諸弟に任せ海に航して大阪に遊び、詩を廣瀬旭莊に問ふたか旭莊は大に其の才學を稱揚し尋いで京師及び鎮西に遊び、松林飯山、廣瀬林外等と詩文を切磋し其の學益進んだ是の時に當り討長の事あつて天下紛擾した。省軒大阪に至り勤王の議に參した。會々其の友橋本香坡、藤井藍田幕府の獄に下り瘦死したが、省軒も亦速はれ纔に免がれることを得て肥前の濱崎に潛居し、徒を延いて業を授け明治元年王室中興の時省軒踴躍して京師に入つた。副總裁岩倉具視其の名を聞いて之を徵し、復古の制度を議せしめた。後大學教官に補せられたが、皇漢の二學議論紛起して氏は官を辭し大學も尋いで廢せられた。省軒居を不忍池畔に卜して生徒に授けた。三年太政官少史に拜せられ、修史庶務を歴て記録局長と爲り、六年に至り官を辭し復仕しない。光風社を創め著書を刊行し以て風教に裨益し且つ其の生計に資した。氏は岩

倉公の國事に於けると旭翁の文事に於けるとは直に余の知己であるといつた。後數年著書大に行はれて資産漸く饒かゞ心を筆硯に專にした。藏書萬卷、其著す所、二十餘種ある。其の初め東京に上つた時安井息軒に師事したが、息軒稱して後並の領袖となした。交遊甚だ廣く初め經義に従事して後詩文に意を注ぎ、晩年に莊易及び釋典を嗜んだ。古文に於て桐城の説をよろこび簡潔を以て主とした。其の詩文直氣盤鬱、蒼老幽玄を以て勝つてゐる。頗る明人の風格があるがつまり内外二典運合融化して此に至つたのである。大正二年一月三十一日病で歿した。年七十六東京淺草清光寺に葬られた。

加茂百樹

カモモ、キ(國)

氏は慶應三年十月十三日山口縣士族藤井厚柄の三男に生れ、後に加茂眞淵の裔清子の養子となつた。十二歳の時郷里を出で伊勢に至り有馬百鞭に漢籍を受けたる外國學の研究をなし、遂に婿國神

社の宮司となつた。尙ほ神宮奉齋會理事、皇典講究所幹事として盡す外作歌を嗜んでゐる。

崩御を痛み奉りて謹み詠める

さゞれ石のいはほとならむのちかけてねがひまつりし吾大君はも

現住所 東京麴町區富士見町三丁目一番地

萱野二十一

カヤノハタイチ(戲)

本名は郡虎彦といつて神戸の人である。夙に學習院に入つて貴族的教育を受け、文藝に志して外國に航し、最も英國に長く滯留した。そして脚本の創作を屢々發表したが、かの世界的文豪なるメーデルリンクやベルハーレン等の作家と相並んで名聲をはせたといふことはことに特記せねばならぬことである。しかも英人の歡迎といふ點からは、英國人以外の誰の書いたものより大であつたといふことは我々の誇とすべきであるが、この事實を知つてゐる日本人の殆んど無いのは遺憾なことだと或新歸朝者は言つてゐる。「道成寺」「玉爭曲」

等の戯曲及び數多の翻譯がある。氏は曩に七年の長年月をかの地にあつて研學大正九年十一月六日歸朝したが、今又再び彼の地に渡つて活躍を續けてゐる。

現住所 目下英國ロンドン滞在

茅原華山

カヤハラカザン(文)

名は廉太郎明治三年八月東京牛込に生れ、夙に國民英學會に入つて英語を研究し旁他の師に就いて漢詩漢文を學んだ。其の後幾度か歐洲に漫遊して新知識を吸収し、世界の文明や時代思想に對して常に急進の思想を懷いて居る。所論時に奇矯過激に見ゆることもあるが、文章の暢達自在引喩巧妙なものには大抵の人は引きつけられる。「日本文明史」「人間生活史」の外數多くの著書がある。一時天下の青壯年を喜ばした萬朝報は、内村鑑三氏出で圓城寺清氏去つても、氏の居る間は面白く讀んだものである。氏はいろいろの文章を書いては居るが矢張り政治に興味を持つてゐるためか最も

力強い。内閣の出現した時萬朝報主筆黒岩周六氏が盛にこの内閣の謳歌をして、平素の主張にも似付かぬ出兵開戦論を唱道し意見の一致を缺いたので退社した。其の後衆議院議員候補者となつて東京市で運動をしたが、固よりその軍資がある譯でもないから、最初より理想選挙を標榜して立つたが落選した。それには氏が社會主義者であると思はれてゐたために得票も少かつただらうと思はれる。又思想雜誌「第三帝國」を發行して暫らくは續いて居たが、惜しいことには社内の経財問題で分裂崩壊を生じ、遂に廢刊の止むなきに至つた。後東京毎日新聞の主筆となり、又「内觀」を發行し、大正十四年支那の漫遊をした。

君丁府所見

縹緲神將往、疎鐘數杵傳、落霞高塔外、
長笛暮雲前、宮闕無常主、國家難萬年、
一江分大陸、片月澹于煙。
現住所 東京市外大井

行文「東京近郊めぐり」を著し「太陽」「詩と音楽」「詩聖」「早稲田文學」の諸雜誌及諸新聞に詩や評論などを載せてゐる。「婦人の友」編輯部員

仙媛

木の實を拾ひ草を掘る
仙童の影は、棧の
八谷の末に消えゆきて、
森に木傳ふ山鳥の
七彩の尾の美しき。

萱の庇にゆきかよふ
尾上の雲は地に下りず、
天津風吹く岩角に
國土は見ゆれ、人の世の
波うつ響も聞え來ず。

あけぬくれぬと父の前、
父より外に交らはぬ
隱家ながらかたみかたみ

河井醉茗

カワイスイメイ(詩)

名は又平明治七年五月七日大阪府堺市北旅籠町に生れ、早稲田大學に學んだことがある。夙に文庫派詩人として名を知られた。嘗つては吳服屋の行商を営みつゝ作詩を續けた。一時多くの追隨者を出して氏の提撕を受けた閨秀作家中後に名をなしたものが少くない。女子文壇の編輯をした山田邦子加藤みどり水野仙子女史等は氏の推薦によつたものである。與謝野晶子女史が幼い時分詩人を志して氏に自分の作物を示したら天分がありさうもないと見た氏は「詩を作るよりも雑巾でもさす方がよろしからう」と忠告した逸話がある程で詩人たらんとするものは多く氏の門に這入つて其の誘導を請はうとしたものである。氏は電報新聞や女子文壇等を経て今日「婦人の友」編輯部員となつてゐるが一時創作力の鈍つたかと噂された氏は近時再び大努力をして盛に創作を發表してゐる。詩集「無弦弓」「塔影」「霧」「彌生集」「醉茗詩集」紀

かがやく瞳見交して、
處女となりし姉妹。

離れ小島に種子落ちて、
香ある木も生ひ立たむ、
神はたまたまめぐし子を
みそら近くに召し寄せて、
塵の裡にやかへささる。

只片脚も山を下りず、
生れながらに品高く
ゆたなる胸のおほらかに、
眉根すずしき面影の
仙媛とこそなるべけれ。

現住所 相模平塚海岸

川出麻須美

カワイデマスキ

明治十七年二月愛知縣寶飲郡小坂井村に生れ、東京文科大學國文科を卒業して埼玉縣立浦和中學校

教諭となり、傍ら創作の筆をとつて「渡歌集」「つち琴」「海の神殿」「葦原醜男」等の著書があり。
現住所 埼玉縣浦和町櫻町

故川上花外

カワカミカガイ(俳)

後月郡井原町の人、初め花外と號し、後ち晚成堂市猿と改めた。俳句を善くして宗匠となり門弟子が多い。生花を好み又篆刻を荻田雲崖に學び、これをもつて業となした。畫も亦巧みであつて小香と號し其の作品は什襲せられてゐる。明治三十一年五月二十五日年五十七にて歿した。

河上左京

カワカミサキヨウ(畫)

氏は京都大學教授法學博士河上肇氏の弟で、夙に描繪に趣味を有して日本水彩畫會研究所に學び、二科會に靜物を出し、又日本水彩畫會等にも出品し常に好評を博してゐた。而るに大正十二年關東大地震の後大阪に開催された日本美術展覽會には洋畫の優作を出して山下審査員の推薦により入選

し、銀牌並に賞金五百圓を贈與され頗る名聲を擧げた。

現住所 東京市外西大久保四九

川上三太郎

カワカミサンタロウ(川柳)

井上劍花高木角戀坊氏と同様新派川柳作家である萬引へ紅葉を散らす洒落を云ひ年の暮聲を囁らして天を説き

現住所

川上澹堂

カワカミタンドウ(畫)

名は邦世、明治十九年六月東京芝に生れ、祖父にして明治初代の洋畫家である川上冬崖の血を受けてゐる。十二歳の時より竹中光重に就て木彫を學び、三十五年、東京美術學校彫刻選科に入り、三十九年優等の成績をもつて卒業した。文展へは第一回に「破邪」第四回に「靜かなる狂ひ」第八回に「シヤベル」第九回に「戀」を出し、又大正元年フューザン會に入りて「立てる人」他二點を出

品し、大正五年第三回院展に「春風駘蕩」第四回に「こだま」を出した。また「人魚」を日本彫刻會に出品して世の注意を惹いた事もある。

現住所 東京府下大崎町上大崎五八二

故川上冬崖

カワカミトウガイ(畫)

信濃の人。初め岸萬之丞と稱した。十六歳の時畫家を志望して、江戸に來り、大西椿年に就いて圓山流の畫を學び、岸太年と號した。後蘭學を學び横濱にワグマンを訪うて洋畫の法を學び、旗本の株を購つて川上氏を稱し、安政四年幕府の繪圖調役となり、次いで畫學教授となつて西洋畫を教授した。幕府瓦解後沼津兵學校に教師となつたが後東京に歸り、仲徒町に聽香讀畫樓を起し洋畫教授を開始した。小山正太郎、松井昇、松岡壽等は當時の塾生である。冬崖は又一面には文人畫を畫いて當時の一流に伍し、文部省助教となり、陸軍省に入つて兵學寮と參謀局に勤めた。兵學寮で石版印刷の法を創定し、參謀局では新式測量地圖製

作をなし、その功勞も大である。又明治十年、第一回内國勸業博覽會には町田久成と共に美術部の施設に盡し、斯道の發達に貢獻する處があつたが十四年五月、熱海の客舎に自殺した。年五十四。門下に前記の外高橋由一、淺井忠、近藤正純、中丸精十郎等錚々たる者を出した。又孫川上邦世は彫刻家として有名である。

川北霞峰

カワキタカホウ(畫)

名は源之助。明治八年九月京都に生れ、初め四條派の大家幸野樸嶺、及菊池芳文に學び、京都市立美術工藝學校の教諭となり、文展へは第一回に「晚秋」第二回に「竹徑春淺」第三回に「浦の夕」第五回に「噴火坑」第七回に「晨鐘」第八回に「淺間の秋」第九回に「立山」「都人と重衡」を出して殆んど毎回三等賞を受け、第十回に「海邊八題」第十一回に「吉野の奥」を出して何れも持選の名譽を荷つた。門下に小林霞村等ある。大正八年帝國美術院推薦となり、同十二年帝國美術院審

査員に擬せられた。

現住所 京都市小川下立賣南

故川口枕河

カワグチチンカ(詩)

詩人、名は寛、下總猿島郡古河の人、初め醫を以て業となし、王政維新の後東京府の吏となり、後ち病を以て職を辭し、詩賦を能し、晚翠吟社に入り杉浦梅潭と共に大沼枕山の門に入つた。枕山逝つて、後詩人と交りを絶ち、明治三十九年一月十二日歿した。年七十八。

故川口東州

カワグチトウシュウ(詩)

名は嘉、字は子儀、本姓は梨本氏出で、川口氏を嗣いだ。徳川幕府の士、幼い時海保魚村に従つて學び、又書法を川上花顛に受け、後昌平齋に入り業大に進み、明治の初め居を沼津に移し子弟を教育した。廢藩の後千葉縣及陸軍大藏二省に兼任し會計検査官補となり、從六位勲六等に叙せられ、最書方に詳はしく、致仕の後専ら之を以て樂と

爲し、業を受ける者堂に満ちた。人となり誠懇謹嚴極めて人情に厚く、新歲故舊の貧者は餘財を以て之を賑恤し、先輩朋友の墳墓は歲時汎掃懈つたことがない。四十四年五月二日卒した。七十三。著す所「有真棲文集」「運筆順序」等がある。

川口尙輝

カワグチシヨウキ(戯)

明治三十二年七月二十二日神戸市奥平野町に生れ東京聖學院中學を経て早稲田大學に入り、目下獨逸文學專攻科にあつて劇文學の研究に専念して居る。戯曲「三角波」「青銅の女」「遷座」「歸宅前後」等の創作その他演劇評論がある。又「舞臺藝術社」の同人であり「來者會」の會員として活動して居る。

現住所 東京市外西巢鴨町上新田七〇三

川崎小虎

カワサキコトラ(畫)

名は隆一。愛知縣の人。川崎千虎の孫でその養子となつた。後東京美術學校に入つて明治四十三年

現住所 東京市本所區外手町八六

故川崎千虎

カワサキチトラ(畫)

尾張の人。通稱は源六。沼田月齋、土佐光文の兩家に學び、後専ら故實を研究し明治初年の歴史故實畫の名家となつた。曾て肥前有田工業學校長、東京美術學校教、授愛知縣立工業學校の意匠科教師となつた。土佐派の出であるが大石眞虎の畫風を慕つて隔世の師と仰いだと云ふことである。明治三十五年十一月年六十八で歿した。嗣子に川崎小虎があり、門下に名家小堀鞆音を出した。

川崎春二

カハサキハルジ(文)

明治二十四年三月茨城縣久慈郡西小澤村堅磐に生れ、大正二年三月茨城縣師範學校を卒業して七年間教職に従事したが思ふところがあつて教鞭を棄て、一兩年來文筆労働者となつた。氏は頗る健筆で各種の雜誌にその文章を掲載してゐるが未だ纏まつた著書は出して居らぬ。常に社會主義を信奉

日本畫科を卒業し、文展へは第八回に「月草」第十回に「花合せ」を出して特選の榮を荷ひ第十一回には「御産養」を出して好評を博した。

現住所 東京府下淀橋柏木一七三

川崎紫山

カワサキシザン(文)

茨城縣の人、名は三郎、紫山は其號である。壯歲出で、北村氏を襲ぎ後本姓に復した。夙に水府の儒栗田寛内藤耻叟等の諸氏に師事し、史籍に通じ兼ねて文章をよくした。學成るの後鉛槧に従事し博文館に聘せられ幾くもなく、之を去つて經世新報を發刊し其主筆となつた。其廢刊するに及んで鈴木天眼等と謀り雜誌活世界を刊行した。其言論當局の忌諱に觸れ發行を禁止せられた。尋いで中央新聞に執筆しこの間清韓の地を跋渉して大に得るところがあつた。三十二年夏帝國黨の成るに際して幹旋頗る力めた。後同黨常議員となつた。著す所新撰「支那國史」、「戊辰戰史」、「西南戰史」、「日清戰史」、「朝鮮革新策」其他數種ある。

する文士青年中に多く交つてゐるので將來何もの
かを世に出すの時大に反響があるだらうと思はれ
る。氏は音曲を好み水泳を善くする。

現住所 東京市外池袋二九八氷山神社境内

故河崎蘭香

カワサキランコウ(畫)

名は菊子。明治十五年十一月伊豫國八幡濱に生れ
十八歳の時京都に出て四條派の大家菊池芳文の門
に入り、三十六年上京して狩野派の寺崎廣業に就
いた。美人畫及花鳥を得意として屢展覽會に出し
て賞を得、文展へは第一回に「夕雲」第三回に
「姉妹」第四回に「はたむれ」第五回に「歌のぬ
し」第六回に「夏の夕」第八回に「廣間へ」第九
回に「霜月十五日」を出した。大に未來を囑望さ
れたが大正七年三月十二日年僅かに三十七で病歿
した。

川島理一郎

カワシマリイチロウ(畫)

年少の時米國に渡り、洋畫を研究して大正八年十

月十五年振りで歸朝した。初め華盛頓のコロラ
ン美術學校に學び一九一一年紐育に移り更に同年
十二月巴里に移つた。巴里では最初アカデミー・
ジュリアンに入學し、後英吉利、伊太利、西班牙
に遊び再度米國を経て日本に歸つた。作品は一九
一三年のサロン・ドートンヌに三點を出し、歸朝
後十二月東京新橋資生堂に個人展覽會を開いて數
十點の水彩畫を展觀し一般の注意を惹いた。其作
品には未來派立體派等の影響が可なりにある。大
正九年再び巴里に赴いた。

現住所 在外

川路柳虹

カワジリュウコウ(畫)

名は誠、明治二十一年七月九日東京芝區三田臺町
三番地に生れた。警視總監川路聖謨の孫であつて
京都美術工藝學校及び東京美術學校日本畫科の出
身であるが、詩作もやれば一般文學にも頭を入れ
また洋畫も研究した。

氏の藝術上の所論は深みある内容を潤ある文に盛

つてゐるからいつも心地よく讀ませられる。詩集

「路傍の花」「かなたの空」「海の微風」並に「現代
詩歌」「現代藝術講話」を刊行したことがある。

尙詩集「勝利」は「かなたの空」發行以來三四年
間の詩を集めたものであつて、以前は温かみ柔か
みのある抒情的氣が勝つてゐたが、この詩篇は強
いリズムを持つてゐるし、抒情詩名作叢書の第六
編として出した「温室の花」は古い春の唄、海の
わかれ、心の秋等五十數篇の抒情小曲を収めてゐ
る。尙詩集「曙の聲」「豫言」「はつ戀」「歩む人」
等を著し、近くは「未來派及立體派とその詩歌」
「突飛なる詩派」「美術院日本畫評」「二科會評」
「美術院彫刻評」等の外詩や雜文を「日本詩人」
「早稻田文學」「中央美術」「太陽」「新潮」「中央
公論」「文學世界」「東方時論」及諸新聞に發表し
て雄健の筆を振つてゐる。

雜誌「炬火」を主宰してゐたが大正十二年廢刊し
太陽の記者をしてゐる。

笑聲

なんといふ生だ、

なんといふ生き生きしさだ、

母の腕にだかれた

嬰兒の充ち満ちた笑ひよ。

母はそのかゝへた手に

波打つた笑ひをかゝへる、

全世界にひびくやうな幸福を

その笑ひ聲にきくのだ、

朝の日は向うの屋根を飛びこえて

一面に母の顔にあたる、髪にあたる。

嬰兒の頭にあたる、

その笑ひは金色をなして波打つ、

母にも、嬰兒にも、

そしてそれを見る自分にも。

現住所 東京府下上落合五八一

故川田甕江

カワタオウコウ(漢)

名は剛、字は毅卿、幼名を竹次郎と言ひ、後城三郎と改め、更に剛介と稱した。岡山縣玉島の人。天保元年六月生れた。幼より穎悟、初め和歌を隣村長尾村の小野務に學び、稍長するに及んで贅を松山藩の鉅儒山田方谷の門に執り致々として業を修め經史百家殆んど窺はないものは無い。秀才として衆の推すところとなり藩士に擧げられ東遊を命ぜられて昌平黌に這入つた。又藤森天山にも從つて學んだが幾もなくして召し還されて藩の重職に擢てられた。明治戊辰の正月伏見鳥羽の變が起つた時藩主が徳川氏の親近である故をもつて官軍に攻圍され社稷將に危くなつた。依つて氏は身を脱して私かに京都に入り陳情百回苦心備さに至つて嫌疑が漸く氷解し、藩主をして長く百世に廟食するを得しめた。維新後辟されて大學博士に任せられ、帷を牛込に下して子弟を教へ、門下又知名の士を出したと誇らない。後宮内省四等出仕より諸陵頭東宮御用掛、貴族院議員等になり文學博士の稱號を授けられ、學士院會員に列せられ、漢

文學の泰斗として中外に尊敬された。明治二十九年二月一日正四位勳四等を以て終つた。病革つた時特に御物を賜はり宮中顧問官に任じ、從三位に陞進せしめられた。息川田順氏は東京帝國大學法科の出身で住友銀行の重任にあたり餘技として和歌を嗜んでゐる。心の花同人中鏘々の聞えがあつて、現下歌壇の重鎮である。

觀借樂園

當年卜築費經營

聞說遊豫此舉觴

膝閣風烟供遠矚

梁園賓客聚群英

放鷹林古禽相集

調馬場荒草向榮

府仰休垂懷舊淚

常磐祠宇自崢嶸

故河田貫堂

カワダカンドウ

名は熙、字は伯緝貫之助と稱した。父は徳川氏の儒臣であつたが氏も父の職を襲いで幕府の儒臣となつた。奥右筆外國局組頭を経て文久三年目付となり開港延期の談判に副使として歐洲に赴いた。後開成所頭取、目付、大目付、静岡縣少參事となり

家達公の家扶となつた。公渡英の時氏も隨行して十五年に歸朝した。爾來詩文に遊んで三十三年三月十一日病歿した。年六十六。氏は慥に晚翠吟社の一驍將であつて、向山黃村のその詩について相談をされたのは貫堂のみであつた。尙氏は佐藤一齋翁の外孫であり、學問文章共に根柢あり、その詩は長篇に最も傑作がある。

送窮

吾文不直半文錢

送汝千言汝輒然

豈若無言焚筆硯

從今與汝絕文緣

自詠示客

五十年來守一經

回思少小昔趨庭

對君今日徒搔首

事業曾無上汗青

河竹繁俊

カワタケシゲトシ(劇)

本姓は吉村、明治二十二年六月九日長野縣下伊那郡山本村に生れ、同縣飲田中學を経て早稻田大學英文科を卒業し、劇の研究に志して文藝協會劇研究所に入りその第一期卒業生として劇作界に乗り

出し「歌舞伎傳助」「勤王遺聞」翻譯「闇の力」等の外先考の遺業を取り纏めて「河竹默阿彌全集」の完成に全力を注いだ。この大事業は容易の業でなく編纂校訂を完了するまでに滿四ヶ年の日子を費して、大正十一年漸く出來上つた。養母いとは即ち劇文豪河竹默阿彌翁の娘である。尙氏は渥美清太郎氏と共力にて「世話狂言傑作集」全二十卷の刊行を始めてゐる。但し春陽堂が紙型全部を震火災で焼失したために「默阿彌全集」の既刊紙型は無くなつたわけであるが、續刊することになつてゐた既刊以後の五刊は、その原稿が書寫のため他人の手許にあつたので幸にも焼け残つた。

現住所 東京府下中澁谷字田川八五〇

故河竹默阿彌

カワタケモクアミ(劇)

本名は菊川金作と言つて、江戸芳町の雇人受宿越後屋の雇人某の子であるが、幼い時から演劇を好んだ。十三歳の時商家の丁稚となつたが劇場にのみ出入るので勘當された。それで二世河竹新七

の門人となつて竹柴金作と稱し、嘉永の頃市村座の作者見習となつた。然るに天才の渠は年僅かに十九歳の時に書いた序幕の劇で大好評を得始めて正作者の列に這入り、二十一歳の時は既に通し狂言の作をするやうになつた。明治元年遂に市村座の立作者となり、十七年二世隠居して河竹黙阿彌と稱し、三世を繼ぎ新富座、中村座、歌舞伎座等の諸劇場に作物を提供して大に名聲を博し、明治三十四年一月十日年六十で病歿した。「弓張月源家鑄箭」「藪原檢校」「嵯峨奥妖猫奇談」「文覺勸進帳」「鹽原多助」「名人長次」「鼠小紋」「鬼あざみ」「勸善懲惡視機關」「辨天娘女男白浪」「花江戸小腕達引」「花街模様薔色縫」「梅雨小袖昔八丈」「人間萬事金世中」等の外其作甚多い。河竹家に於て「黙阿彌全集」を版行したが全二十卷千七百頁の多きに上つてゐる。氏生れは日本橋式部小路であつたが後に竹柴に住した。氏を其水と稱するのはその俳名によるのである。氏は友人と共に遊里に出入すること少く無かつたが酒席に

は列るが女色に接したことが無いので他人を感じしめた。氏も一大抱負があつたには違ないと思ふが、所謂一般戯作者流に
何一つ身はしらなみに狂言もふるき趣向をいつも盗みて

といふ述懐のやうな態度であつた。

前記「黙阿彌全集」は大正八年より同十二年までの長日月を費して漸く版行されたが、同年九月の大震災で紙型まで烏有になつたのであるが、この明治劇壇の巨匠を永久に記念するため又復春陽堂より刊行することになつた。

川田 順

カワダジエン(歌)

氏は岡山縣備中の儒者川田蕪江の息、詩人にして學者なる父君の血を受けた氏は。幼少の頃より讀書を好み作文を綴つたが、東京帝國大學法科大學を卒業して身を實業界に置いて一日として作歌を忘れない。氏は餘程以前よりの「心の花」同人で同派中石樽千亦氏等と相並んでその重鎮であ

る。現に住友銀行員を勤めて大阪に居るが、時々各地に出張して和歌に關する講演を試み、後進のために啓蒙試導を怠らないのみならず、その作歌や歌論は常に「心の花」其の他に發表して斯道の進展に盡して居る。氏は曩に第一歌集「陽炎」を出し續いて「伎藝天」「川海經」を公にした。陽炎は明治三十二年頃より四十一年に至る間の製作を收め、極度の絢爛と情熱と特異の生命として居る。即ち氏が十八歳から二十七歳までの歌を集めたのであるから、その頃の若々しさ、のどけさ及び浪漫的な氣分が漲つてゐて言ひ知れず讀者を喜ばせたものだ。「伎藝天」は「陽炎以後大正六年末までの製作を集めたもので、青春の終りの情味と實相觀と悲哀とが錯綜して内容の複雑を極めてゐる。一度この歌集が出ると、態々奈良の秋篠寺を訪れるものが多くなり、奈良の帝室博物館に足を運んで、鎌倉時代の陳列室に入つて、伎藝天像の前に歩を止める人が殖えたと言はれるのを見ても、如何にこの歌集が多くの反響をもち來たし

たかゞわかる。氏は又最近に至つて「川海經」を出して更に玉成の作品を多く示してくれた。

ふなばたの浪の穂先の蒼白くくづれ光れば暮れ
たれど見ゆ

香久山を晴れゆく雨の返し風夕畑桑の葉揺れ涼
しも

前の浮洲まだ明けぬ夜の蟲鳴いて眞孤一面にく
ろみたるかな

白楊の並木みち前にゆく人の雨傘すぼむるに我
もすぼめたり

杉黒き底あらはして雲の湖は波立ち渦まきなだ
れ去るかも

現住所 兵庫縣蘆屋

故河津直入

カワヅナオイリ(國)

國學者、琴廼舎、また琴屋と稱し、福井藩士である。夙に文武の業を修め鎮徳寺の僧覺巖に歌道を受け、後橋曙覽の門に入り、皇學を研究し、且つ和歌を學び、明道館の句讀師となり、萬延元年藩

士職を命せられ、明治五年隱居した。是より専ら皇學を擴張しようとし私塾を開いた。來り學ぶ者甚だ多い。明治三十六年六月二十五日歿した年八十。直入初め曙覽の門に入つた時曙覽人に語つて曰うのに。歌を學ぶ者は多いが、古學の尊いことを知つて學ぶ者は稀である。河津氏は將來此地斯道の師となるであらうと曙覽の歿後果して其門弟等河津の門に集つた。直入爾來古學を獨修研磨すること多年遂に曙覽の皇學系統を嗣ぎ一國の師と推尙せられるやうになつた。直入性率直人に接する時城府を設けず恬淡で名利を避け、權貴に阿ねらない興わけば床上の一絃琴を弾じ唱歌して自ら樂しみ、琴廼舎と號した晩年沙鷗睡處の別號を用ゐた。

布さらし秋のあしたの眼もさやに一すぢの水山より來る
わだつみの沖くるくともり上り夜空の雲のは
てなきかな
雨空に月は大きくぼやけたり葛城の裾くるく

と見ゆ
いかし峯の石槌の岩黒すみてぶなの林のたそが
れゆくも
前の浮洲まだ明けぬ夜の蟲鳴いて眞菰一面にく
ろみたるかな

故河鍋曉齋 カワナベギヨウサイ(畫)

下總國古河に生れて獨得の一派をなした。日本畫の名家であつて、名は陳之、通稱は周太郎、後洞郁と云つた。初め猩々狂齋、後改めて曉齋、又、周魔、畫鬼、酒亂齋、雷醉、如空人道、賣畫狂者等の別號がある。初め歌川國芳に就て浮世繪を學び、後前村洞和の門に入り、更に駿河臺の狩野洞白の學僕となりその畫を學んだ嘉永二年剃髮して洞郁陳之と稱し、四方に流寓し、安政五年本郷大根畑に一家を張り狩野派の繪を以て立つた。後狂畫などを初め、又元治元年歌川豊國と合筆の錦繪を發行した。明治三年、席上戲畫の禍によつて苔五十の刑を加へられ、以後狂字を改めて曉齋と號

した。氏は性來奇骨稜々磊落不羈で酒癖あつたがその畫才に於ては稀に見る偉才であつた。十四年第二回内國博覽會出品の「枯木鴉圖」は彼が名をあげた名作であつて、他に「龍頭觀音」傳馬町「祖師堂天井の龍」湯島神社奉額「野見宿彌角力圖」成田不動扁額「大森彦七」日本橋水天宮扁額「蘭菱王」等があるし、又多く幽靈妖怪の圖を畫いた。遺著に「曉齋畫談」があり、又明治三年より死去の際に至るまでの繪日記がある。それは東京美術學校、及び佛國巴里のギメー博物館に藏されてゐる。明治二十二年四月年六十二で病歿した。門下は眞野曉亭等がある。

河鍋猩々 カワナベシヨウシヨウ(畫)

東京の畫家、有名な川鍋猩々曉齋の嗣子である。文久三年六月江戸湯島に生れた。名は周三郎、猩々曉雲と號し、夙に父翁の畫を學び後狩野永舟に修めた。明治十八年箕裘を嗣ぎ業を開き翌年關西奥羽諸地方を遊歴し神社佛閣の什器筆蹟を縮寫し

て瀛奥を極め、二十三年第三回内國勸業博覽會に雷神の圖を出品して褒狀を受け、二十七年宮内省の命を奉じて百袋遊戯の圖を畫き中に唐兒七十三人を配して人物總數百九十五人を描いて嘉賞せられた。其嗣曉翠女史も亦妙技がある。現任所 未詳

川西和露 カワニシワロ(俳)

名は徳三郎、明治八年四月二十日兵庫東出町二丁目に生れ、神戸商業學校卒業後、同地の市會議員に選出され、入江補習學校校長となり、神戸讀書會幹事、東出町二丁目協議會長等の要職に在つて、匆忙の餘暇俳句三昧に入るのである。氏の句は「日本及日本人」「阿蘭陀渡」「海紅」等に投稿され「和露句集」といふ氏の著書の中に收められてゐる。

うらゝ來し二の瀧に石桶花の雨
枚を衝むべかりしを逸蛇霧晴るゝ
大守觀楓に枕流亭成りし

塵尾振りてあたりの寒さ拂ひてし
現住所 神戸兵庫東出町

故川端玉章

カワバタギョクシヨウ(畫)

日本畫の大家。玉章はその號、別に敬亭又は璋翁と號した。京都の人天保十三年に生れ、十歳の時富商三井家の丁稚となり暇あれば畫筆と親むので三井家の執事某氏之を觀て玉章の父に勸めて中島來章の門に學ばしめた。是より來章に就いて一意圓山派の畫法を研精し、且傍ら南畫の名工小田海遷に就いて其の畫論を傾聽した。その後維新の變に遭遇し、都下の騷擾を避けて筆硯を携へ四國山陽道を漫遊し、名山水に遭ふ毎に之を寫生帖に收め江戸に來り、居を久松町にトし、丹青の需に應じた。當時畫道衰頽門に顧客の跡を絶つた。幸に三井家の補給を受けて飢餓の憂を免かれた。明治七八年の交洋畫大に流行したので、玉章も亦之を修め造詣する所あつた。十年火災に遭ひ、深川に移り、私塾を開いた。入門するもの甚だ多い。第

一回博覽會に濱離宮の圖を出品して優賞を受け、「大極殿」、「桃源圖」、「墨堤圖」を展覽會博覽に出品して傑作の稱を得たのは此の深川ト居の際である。當時其門下に在つて名を成す者多い。就中山田敬中、福井江亨、結城素明、諸星成章、島崎柳塲、田中頼章、平福百穂、竹田敬方、高橋玉滿、益田玉城、團藍舟、小山友卿、の如きは其の錚々たる者である。廿三年東京美術學校の起つた時狩野芳崖、橋本雅邦等と共に之が教授となり、三十八年更に居を小石川富坂に移し、其の名益々著れた。尋いて川端畫學校を設け、圓山派の畫法を教授した。四十三年美術學校教授として高等官二等に陞り正五位に叙し、同年病のために教授を辭し巢鴨の別墅に退き、宿好の俳句に耽り優遊自適した。晩年中風症を患ひ大正二年二月十日を以て卒した。享年七十二、二子玉雪、茂章各々丹精を善くする。玉章の畫品は天成で橋本雅邦と名を齊うし、明治二大家の稱がある。唯其の人の需に應ずる時先づ價を論定しないでは容易に筆を執らない

風があつたので稍々聲價を損したと云ふことである。氏の歿後も川端畫學校は門人島崎柳塲等の力によつて隆盛に繼續してゐる。

川端康成

カワバタヤスナリ(小)

明治三十二年六月十一日大阪市北區此花町に生れ中學校卒業後第一高等學校を経て東京帝國大學英文科に入學したが、後思ふところあつて國文科に轉じた。これよりさき東京帝大の文科生間には幾度か文藝雜誌「新思潮」といふのが發行されたが氏は大正十年友人四人と共に第六次「新思潮」を創刊した。著作に「招魂祭一景」「油」等があり其の他最近の作としては小説「轉生」評論「創作月評」「現代作家の文章を論ず」「文藝表現の理論」其他を「新思潮」「新潮」「文章俱樂部」等に續々發表して居る。近頃氏は挿繪小説といふものをも書いて婦人に通俗讀物を提供してゐる。

現住所 東京本郷區千駄木町三八

川端龍子

カワバタリユウジ(畫)

名は昇太郎、美術院同人の日本畫家、明治十八年六月和歌山市に生れ、初め西洋畫の研究を志して白馬會及び太平洋畫會の研究所に入つたが、後日本畫に轉じ、第二回院展に「狐の道」第三回に「靈泉由來を出品して犇牛賞金を受賞し第四回に「神職の卷」を出して其の鬼才を認められ、此年即ち大正六年にその同人に列した。圖案、裝飾畫の方面に於ても得意である。洋畫では文展第一回に「隣の人」第二回に「とこしへにさらば」の出品がある。かゝる大家で東西の兩畫に堪能な人は中村不折と氏とである。大正十二年の院展には「鶏の舞踊」「とばく者」「因果」「盜心」の諸作を出した。尙氏には「畫室の解放」「ロダン研究」といふ著書を出してゐる。

現住所 東京府下大森町新井宿一三九五

河原辰三

カワハラタツゾウ(小)

明治二十九年一月二十九日長野市櫻枝町に生れた。別に取立て、言ふべきほどの學歴とは無いが創作に精進して居る。嘗て相州鎌倉に行つて圓覺寺の禪窟で參禪修業に三昧になつたこともある。長編小説「無」「報ひ求めぬ愛」「若き求道者の嘆き」等の著書がある。尙最近の作に小説「妻の家」「秘密」長編小説「深生」等の外隨筆や感想を「秀才文壇」「現代」「信農毎日新聞」「無我の愛」等に發表して居る。

現住所 千葉縣市川平田一六一

河東碧梧桐

カワヒガシヘキゴドウ(俳)

名は秉五郎、號碧梧桐は其の名の音をモヂツたものであつて、高濱清の虚子のやうなものだ。明治六年二月二十六日伊豫松山に生れ、同郷の先輩子規に従つて俳諧に没頭した。しかし氏の俳諧は幼時父靜溪や兄黄塔及び可全等の指導感化によつて其根柢は築かれてゐた。明治二十四年上京して同郷の寄宿會常盤會にありし頃始めて子規に接して

その新らしい俳論を聴き、二十六年松山中學校を卒業して京都高等中學校に入り、二十七年七月高濱虚子と共に仙臺高等學校に轉じ、十一月共に退學して子規の東京の寓居に在つて俳三昧に入つた。二十八年子規咯血して病を養ふに及んで子規に代つて「日本」俳句の選者となり後入社して益々その名を知られた。三十九年八月六日より翌年十二月十三日に至るまで全國大行脚を爲して「一日一信」を草し、其の後幾度も行脚の途に上つて旅装を解かず、大正九年歐洲に航して詩情愈豊となつた。氏の日本行脚は本願寺法主大谷句佛上人の後援によるもの多い。尤も後に洋行する時は例の六朝風の書を買つて渡歐費を得たのである。氏は寫生を極端に主張し、自然そのものを寫すをもつて能事とせず、自然以上の趣味を發揮するを目的とした。又句の廣狹深淺といふことを論じて子規の句は廣く氏自身の句は深いといふやうな意味を圖に譬へて論じたこともある。かくて新傾向句を唱導し虚子氏と別旗幟を樹て、俳句雜誌「海

紅」によつて作句を發表し、高濱虚子のホト、ギス及び荻原井泉水の層雲と鼎立して覇を稱した。旅行癖の氏が日本アルプス登山の先鞭をつけたことは作句以外の功績と言はれてゐる。「日本俳句抄」「三千里」「續三千里」等の著の外、大正十一年外國より歸朝後創作の筆を執つて雜誌「改造」に「美術家町の出來事」を書いた。氏は虚子氏と同じく能樂にも造詣深く、殆んど黒人の仲間入りが出来るほど藝術的に完成してゐる。

花を尋ね詩意に社中の祝ひかな

赤い椿白い椿と落ちにけり

上京や友禪洗ふ春の水

千鳥啼いて浦の名を問ふ船路哉

伊豆の海や大島寒く横はる

つゝじ水に流れ去るより舟はやし

冬の生きた鯛を食ひ俗友にも湛ふる

餅切つてゐるらし遠のく思ひのよろし

親を離れた君を無造作に迎へて火鉢

鳴が北へ北へとぶ水尾の冬の旭

等の句を見ても、伊豆の海やの句あたりまでは日本派驍將としての碧梧桐であつたが、つゝじ水に流れ去るよりの句になると、日本派鼻を脱し、更に冬の生きた鯛を食ひの句よりは明治の末大正の初より唱導した新傾向が高潮に達した大正七年以後の句であつて、字餘り字足らずは云ふまでもなく、句調の上下、懸り結びの調子も或は長く或は短く、従来の規束を脱して自由なるものであつて露石、六花、鶴平、碧童、櫻磯子、一碧樓、地橙孫其他の之に追隨者が少くなかつたが、同じ破格の句としても、もつと極端な行き方をやつてゐる層雲派の井泉水一派のものゝ方に内容のリズムたる詩趣の豊かなものを多く見るやうである。この派の傾向を知るには中塚一碧樓氏著「海紅句集」を一讀するがよい、前に「碧」後に「三昧」創刊。

現住所 東京市四谷區加賀町九

川合玉堂

カワイギョクドウ(畫)

名は芳三郎。明治六年十一月二十四日美濃國に生

れ、少時京都に出て四條派圓山派の折衷大家望月玉泉に花鳥を習ひ、又四條派の大家幸野棋嶺に師事して後東京に移つて狩野派の大家橋本雅邦について學び花鳥山水を得意とする。日本繪畫協會共進會、美術院等の展覽會に出品して漸次その畫才を認められたが、大いに盛名を博するに至つたのは明治四十年東京勸業博覽會に「二日月」を出して一等金牌を得てからのことである。文展には第一回以來日本畫部審査員となり、作品は第一回に「片時雨」第二回に「秋山遊鹿」第三回に「霧」第四回に「高嶺の雲」第四回に「炊烟」第五回に「細雨」第六回に「潮」第七回に「夕月夜」第八回に「雜木山」第八回に「駒ヶ嶽」第九回に「夕立前」第十回に「行く春」第十一回に「小春の夕」を出した。川端玉章隱退の後、東京美術學校の教授に任じ、大正六年六月名譽ある帝室技藝員に任命された。又夙に長流畫塾を開いて多くの子弟を養ひつゝあるが、その門下に山内多門、池田輝才、池田蕉園、平田松堂、長野草風、大島佳山、佐々木尙文、井澤蘇

水、都筑眞琴、菊池華秋、伊藤響浦、田崎芙山、松本姿水、清水玉琴、豊島翠波、等の名畫家を多く出し、大正八年より帝國美術院會員となり、大正十二年大震災後息修二氏は洋畫を研究し、「スケーティング」「秋晴」等の秀作を出してゐる。氏はまた書も上手俳句も巧である。やまめ得て里へ麥酒の使かな
現住所 東京市牛込區若宮町二九

故川合清丸

カワイキヨマル(漢)

伯耆東伯郡太一垣村に生れ、幼時より儒學を好み修養を積み、自ら國士を以て任じ、偶時勢に感憤する所あつて眞教塾を創立して郷黨の子弟を教育し、後單身東上し鳥尾得庵の門に遊び、更に諸家を歴訪して大道の本義を極め、明治二十一年一月日本國教大道社を發起創立し、山岡鐵舟を社長に推し、鐵舟歿後得庵を社長となし、次で自ら社長となり、全國の社員三萬を率ゐて、隱然國家主義者の中堅となつた。明治二十五年大道館を設立し

大道社主義を以て子弟を教育し、晩年得庵の遺業たる統一舎に於て學生を薰陶しつゝ専ら著述に親しみ「大和魂」「建國之大本」「國之大經」其他を著し、大正六年六月二十四日逝去した。年七十

河合新藏

カワイシンゾウ(畫)

慶應二年大阪に生れ、洋畫家小山正太郎に學び、明治三十三年より、歐米に留學すること四ヶ年、後丸山晚霞大下藤次郎等と日本水彩畫研究所を起した。文展へは第一回より第四回まで續けて出品し、第三回には「眞夏の山毛櫨」を出して賞狀を得、第七回に「ポプラ」と夏蜜柑」を出して三等賞の榮を荷つた。太平洋畫會會員である。現住所 東京市本郷區駒込神明町一四

河合英忠

カワイエイチユウ(畫)

名は六之助、明治十五年四月東京に生れ、初め右田年英に學び、三十四年以來日本美術協會、歴史風俗畫會、東京勸業博覽會、東京美術工藝品共進

會等に出品して毎に受賞し、鳥合會、日本美術協會の會員となり、又東京朝日新聞畫報記者となり文展へは第七回に「火車」第八回に「昔嘶」第九回に「夢」第十回に「壬生狂言、能樂」第十回に「秘曲」第十一回に「迷へば、悟れば」を出して褒狀又は三等賞を得、院展へは第一回には「文樂座」を出して好評を受けた。現住所 東京市芝區神谷町二五

故川村雨谷

カワムラウコク(畫)

江戸青山に生れ、名は應心、廣郷、守固、休翁、陸運子、無生居士の別號があつた。少時官吏として長崎に赴き、僧鐵翁、木下逸雲等の諸大家に學び、司法官として終に大審院判事となつたが、公務の傍ら常に筆硯を離さず、造詣極めて深く、明治三十一年官を辭してから南畫界屈指の名家となり三十九年十二月年六十四で病歿した。門下に山岡米華等がある。

川村花菱

カワムラカリヨウ(劇)

明治十七年二月二十一日東京牛込區築土前町に生れ、早稻田大學英文科を卒業し、「流れの女」「中元の夜」「峠の春」「枝川の流れ」「熊と人」「カルメン」「生ける屍」「櫻咲く頃」「夕顔の花」「映畫臺本集」「川村花菱脚本集」(全集)其他創作脚色脚本が七十餘種の多きに達して居る。

「大震災印象記大正むさしあぶみ」は氏の記述と山村耕花氏の畫を挿入して面白く讀ませる。蓋し淺井了意の「むさしあぶみ」に倣つたものである。

現住所 東京市外千駄ヶ谷七二二

川村清雄

カワムラキヨオ(畫)

號は時童、嘉永五年四月江戸麴町に生れ、少時名を清次郎と言ひ、開成所畫學生として洋畫家川上冬崖に學び、明治三年米國に渡り、ランマンにつき、後伊太利に行き、ヴェニス的美術學校に學び

又佛國に遊んで十四年歸朝した。明治洋畫家の先進であつて後進の指導をしたが、大技を振つて世に問ふ所少い。門下に東城鉦太郎、織田一磨等多くある。

現住所 京都府下千駄ヶ谷町一〇〇〇

川村黄雨

カワムラコウウ(俳)

名は種次、文久三年六月二十九日舊幕臣川村良右衛門の長子として江戸に生れ、専門學校卒業後官吏となつた。幼時既に俳句を作り、一旦中絶してゐたが明治二十年の頃再びこれに親しみ、二十二年頃より故森山鳳羽翁について聯句の作法を聞き二十八頃角田竹冷、尾崎紅葉、巖谷小波、大野酒竹、及び無黄、殘花の諸家と秋聲會を作つた。また今日では「六日會」といふ俳席を持して尺予禾刀等の諸氏と盡力してゐる。尙氏の句は「にひはり」「初冠」等に出てゐる。また弓術や茶道に興味を有し、巖谷小波、伊藤松宇、内藤鳴雪、戸川殘花等の諸大家と交際厚く、句興益々豊かださ

うである。

夜神樂や鈿女をほめる稱宜が妻

藏祭お福と名のる大鼠

失戀のそびらにあつき暖爐かな

伊勢が家の礎めぐる飛蟻かな

露ながら關路越えけり茄子籠

眉籠や市隱に嫁して竹婦人

現住所 東京市外下澁谷向山一四一三

川村曼舟

カワムラマンシユウ(畫)

名は萬藏。明治十三年七月京都に生れ、圓山派の大家山元春學に師事して大いに努力し、遂に京都市立美術工藝學校の教諭となり多くの子弟を導き文展へは第二回に「黄昏」第三回に「山村暮靄」第四回に「夕月」を出して各々三等賞を得、第五回に「高野山の夏」第七回に「鶺鴒」を出して入選し、第八回に「比叡山三題」を出して二等賞を得、第九回に「連峯映雪」第十回に「竹生島」第十一回に「日本三景」を出すに及んで特選の列に

入り、大正八年より帝展審査員となり、大正十二年大震災災後秋季に開催された日本美術展覽會の審査員同十四年帝展審査員となつた。

現住所 京都市西洞院三條南

蒲原有明

カンバラアリアケ(詩)

名は隼雄、明治九年三月十五日東京市麴町區隼町に生れ、國民英學會に學んだ外は全く獨學である。今は文壇を退いてゐるが曾て島崎藤村氏と共にわが詩壇に一時代を劃したる有名なる詩人である。その詩集「草わかば」「獨絃哀歌」の如き頗る世を動かした。日本の象徴詩は氏が其先驅をなしたが、「春鳥集」「有明集」等はそれである。氏は又散文をよくし珠玉の如き小品の作が多い。近頃アルスより發行された「有明詩集」は二十餘年に亘る氏が全詩作を悉く網羅してゐる。長短詩合せて二百四十九篇の詩が集まつて其中には五十篇の譯詩がある。

聖菜園

こゝろの糧をわがとる菜園
 榮なき思ひ日毎に耕すなれ。
 ある時ひくき緑はこゝに燃えて
 身はまた夢見心地にわづらふとも、
 時には恐怖に沈むかなしき界の
 地獄の大風強く吹きすすみて、
 こゝにぞ生ふる命の葉は皆枯れ
 歎樂冀願もあだに消え去るとも、
 あゝたゞかの花草や、(羽なくしてさゝやく鳩
 にも似るか、) そのにほひに
 涸れにし泉ふたゝび流れ灌ぎ、
 あゝまた荒れにし土の豊かなる時、
 盡きせぬ愛の花草讃めたゝへて
 聖菜園のつとめに獨りゆかん。
 現住所 静岡市鷹匠町二ノ四

故岸 竹堂 ガンチクドウ(畫)

名は昌祿。字は子和。近江彦根藩に生れ、初め狩野永岳に學び、後岸連山の門に入つてその養子と

つた。短篇小説集「恩を返す話」「無名作家の日記」「我鬼」「心の王國」「冷眼」「極樂」「道理」脚本集「藤十郎の戀」「茅の屋根」「評論集」「文藝往來」長篇小説「眞珠夫人」の外「菊池寛全集」「友と友との間」「白蓮紅蓮」「中傷者」「慈悲心鳥」「火華」「父母」等の著書を出し「悲望」「澄子の一生」「父母妻子」「悪因縁」「特種」「頸縊り上人」「時代は移る」「岩見重太郎」等の小説脚本を出したる外、隨筆「平凡語」「番外不同調」評論「文藝作品の内容的價值」等の作を出したが、一作現るゝ毎に世評を高めた。「藤十郎の戀」の如きは、大阪の名優鴈治郎によつて演出さるゝに及んで、其の舞臺上の眞價を十分に認められた。又「恩讎の彼方」即ち「敵討以上」の如きもどの位喜ばせたかわからぬ。氏の作品の世界は廣汎である。現代の社會はいふまでも無く、或る作品に於ては歐洲大戰が背景となり、また元和寛永の古にも及んで居る。隨つて其處に現れる人物も多種多様であるが作品のテーマに表れてゐるものは氏自

なる。維新以後畫界衰頹の時に際して頗る苦節を
 持し、後西洋畫を修めて其遠近法を取り、之を邦
 畫に加味して一體をなした。京都府立畫學校の設
 立に盡力したが、其の熱心と功勞とは東都畫壇の
 狩野芳崖と好一對とされた。繪畫共進會毎に審査
 員に擧げられ、晩年には名譽ある帝室技藝員とな
 つた。畫は花鳥人物山水共に善くし、山水は殊に
 其の長所であつた。筆致少しく纖巧に過ぎるの難
 はあるが閑雅優麗の趣は他の追隨を許さぬものが
 ある。明治三十年七月年七十二歳で病歿した。

キノ部

菊池 寛 キクチカン(劇)

明治二十二年十二月高松市に生れ、高松中學校を
 經て第一高等學校に入り、更に京都帝國大學文科
 大學に學び、卒業後新思潮同人、時事新報記者と
 なり、遂に戯曲に成功して文藝界の第一人者とな

身の體驗を客觀化されてゐる。しかしその作品
 の最も著しい特徴は心理過程の描寫である。殆ん
 ど心理解剖其のものゝ展開であるともいへる程で
 ある。氏は表現の技巧には餘り重きを置かず、表
 現さるべき内容を作品の第一義と信じ其の渾然た
 るリアリズムとその巧みなる心理解剖とその質感
 投入の深さとが人間性の眞實を出さんとするやう
 な努力を見るのである。

「新小説」「文藝春秋」の編輯に従ひ且つ大阪毎日
 社員をして居る。

現住所 東京市外雜司ヶ谷金山三六

菊池 契月 キクチケイゲツ(畫)

名は完爾。明治十二年十一月長野縣中野町に生れ
 幼いときから南宗畫の泰斗兒玉果亭に學び、後、
 町田曲江と共に畫家たらうとして京都に出で、初
 めは内海吉堂に就き、後、四條派の大家菊地芳文
 の門に移り、其技大いに認められるに及んで師の
 養子となつた。諸所の展覽會に出品して賞を受け

文展へは第一回に「春暖」第二回に「名士弔喪」第三回に「悪者の量」を出して名をあげ更に第四回に「供燈」を出して貳等賞の首席となつた。第六回に「茄子」を出し三等賞を得、第七回に「鐵漿蜻蛉」第八回に「ゆふべ」第九回に「浦島」を出して各貳等賞を克ち得、第十回には「花野」を出して推薦となり、第十一回に「蓮華」を出して其の技の益々圓熟を示した。京都繪畫專門學校教授となり、又父芳文歿後家塾の後を継いでゐる。大正七年より文展審査員となり、大正十二年震災後京都東京に開催の日本美術展覽會審査委員となつた。そして「水波む女」といふ氣品と魅力に富んだ傑作を出して歸朝後の努力と進歩とを示して視聽を惹いた。同十四年會員となつた。

現住所 京都市外衣笠村小北山鳥居前

故菊池 三溪

キクチサンケイ(漢)

名は純、字は子顯、紀州和歌山の儒者である。後幕府に仕へて昭徳公の侍講となり、後京都に轉住

した。詩と戯文に有名であつた。明治二十四年十月十七日年七十三で病没し、若狭國小濱の常高寺に葬られた。息菊池三九郎氏は晚香と號し、夙に早大政治科を卒業し、母校の漢文教授として三十年間同校に勤続し、造詣頗る深く而も名利に淡く脱俗離欲の人で有名であつたが、大正十二年十月九日病氣のため、東京牛込新小川町一丁目十四番地の自宅で死去した。享年六十五。

國府臺覽古

絶壁聳空蒼翠稠、下瞰坂東第一流、
城壘久作香火域、折戟沈沙三百秋、
孤墓苔深無人祭、糊地往々出髑髏、
老僧謾說永祿事、英雄興廢使人愁、
想見萬蹄蹴波々噴雪、九世金湯一舉滅、
安知猴精屠犬豚、顛仆爭踐覆車轍、
吾來吊古水之漚、江霧蒼茫落日斜、
無復鶴鶴來濟水、一禽掠過荻蘆花。

故菊池 芳文

キクチホウブン(畫)

等の多くが出た。養嗣子契月氏も亦斯道の大家として帝展審査員となつてゐる。

菊池 幽芳

キクチユウホウ(小)

名は清、明治三年十一月水戸市に生れ中學校卒業の後三年間佛國に留學した。大阪毎日新聞社員として盛に通俗小説を書いた。今は同社の副主幹として社の重鎮である。「己が罪」によつて一度其の聲名を馳せた氏は、續いて「夏子」を出し「乳姉妹」を出して家庭小説家としての驍名を馳せた。其の他「月魂」「家なき兒」「百合子」「毒草」「女の生命」等も數ある小説の中で世に聞えたものである。

因みに「乳姉妹」の一篇はベルサクレといふ外國の本を譯した末松謙澄博士の谷間の姫百合の後半を翻案したもの、「女の行方」は外國の大探偵小説を翻譯したものである。又大阪毎日東京日々の兩新聞に連載して好評を博した「白蓮紅蓮」は舞台に上せられた。變化に富んだ讀物として娛樂的

名は常次郎、字は公紀。文久二年九月十七日大阪に生れた。三原三郎兵衛の次男であるが出でて菊池氏を繼いだ。十八歳の時畫家滋野芳園の門に入り、明治十五年頃京都の四條派大家幸野樸嶺の塾に學んだ。後一家をなして京都繪畫專門學校教授となり、文展の日本畫部審査員となつた。性質は頗る濃厚其の體量は實に三十貫目、男子が無いので門下の秀才契月を養ひ、女に配して嗣子とした。畫は花鳥を得意とし、用筆輕妙、他の追隨を許さぬものがある。永らく京都畫壇の重鎮だつたが、大正七年一月十八日洛西衣笠村の別墅に逝いた。年五十六。代表作には古く京都の共進會出品の「木曾の秋景」文展第一回の「春秋花鳥屏風」第八回の「小雨降る吉野」第九回の「鶴鶴」等があり、又宮内省御用の大作、及び和蘭ヘーグ平和殿の壁畫がある。晩年には宮中御杉戸に白孔雀の圖を揮毫中であつた。門下に契月の外川北霞峯、山田耕雲、疋田芳沼、田畑秋濤、阿部春峯、長瀬翠塘、中川和堂、合田一蜂、山田松齋、青山好古

讀物に通ずる。氏は蘆屋の邸宅に菊花壇を作つてゐるが數奇者の珍とするものが澤山にある。
現住所 兵庫縣武庫郡蘆屋

故菊池容齋

キクチヨウサイ(畫)

名は武保。通稱は量平。天明元年に生れ、十八歳の時高田圓乘に就いて狩野派の畫法を學び、後京畿の間を漫遊して諸大家の傑作を研究し、先人の遺跡を討究して終に容齋派なる一派を創始した。氏は探幽、應舉、文晁等の長所を採り、古土佐の風に倣つて新機軸を出したから、其人物畫及鳥獸又は神社佛閣を寫せるものは皆眞に逼つてゐる。明治九年米國博覽會に出品して受賞し、十年第一回内國勸業博覽會にも名譽賞を得、十一年六月年九十一歳の高齡をもつて眠るが如く逝いた。有名なる「前賢故實」十卷は前後十八年の苦心に依つて、編成せるもの、畫中の調度風俗多く本據がある。代表的作品には「五百羅漢」十五幅、「元寇圖」「吉野山圖」「阿房宮兵燹圖」等があり、門下

に松本楓湖、渡邊省亭、三島蕉窓、尾形月耕、小磯前雪窓、中島享齋、阿部昇湖、荒井柳坡等の諸家あるが、尾形月耕は最も師の風を倣つてゐると言ふことである。

岸田劉生

キシダリウセイ(畫)

明治二十四年六月東京銀座に生れ、白馬會研究所に學び、初めはフューザン會に入り、大正三年二科會創立の際、鑑査員に擧げられたが之を辭して大正五年、木村莊八等と草土社を起した。文展へ第四回に「若杉」「馬小屋」を出し又二科會へは第四回に「初夏の小路」他數點を出して二科賞金を得て大いに名聲を擧げた。武者小路實篤と合著に「カチカチ山と花咲爺」がある。大正十二年大震災後京都及東京に於て開催された日本美術展覽會に第一部日本畫の審査委員にあげられた。氏は繪畫の外に美術評論も多い。最も新人の喜ぶ洋畫家である。氏は眼藥精録水で名高い岸田吟香氏の家に生れたのである。尙大正十三年春陽會第二回

岸上操

キシノウエミサオ(文)

宇都宮藩士、名は操、質軒又叱劍と號し、萬延元年十月十五日生れ、夙に漢學を修め明治八年栃木縣師範學校卒業後、十二年東京外國語學校に入り佛語學を修め、十三年司法省法律學校に入り、十六年病を得て退校し、二十年大藏省御用掛となり二十三年辭職した。爾後鉛槧に従事し又博文館に聘せられ編輯部に這入つた。其著に「通俗徳川十五代史」「和漢婦女龜鑑」「作文自在」「名家尺牘文集」「贖語文選」「紀行文集」「羅馬戰史」其他數種ある。近來其の消息を聞かない。
現住所

故木蘇岐山

キノキザン(詩)

名は牧、大阪の有名な詩人で其風少しく侷侷であるが、奇宕縱横意思深摯世の稱讚を博したものである。

春晴出游

展覽會に出品中には水筆の靜物畫や「冬日小彩」「果實籠」といふものがあつたが、何れも含蓄のある垢抜けのした佳いものであつた。氏は由來油繪が本職であるが、今日では日本畫も油繪同様本職となつて「古い日本畫の美」をどこまでも生かさうと苦心してゐるやうである。
現住所 神奈川縣鶴沼海岸松本別荘内

岸浪柳溪

キシナミリユウケイ(畫)

南宗畫の大家であつて名は靜司、安政二年十一月江戸下谷豊任町に生れ、福島柳圃、田崎艸雲等の南畫の巨擘に就いて學び、日本美術協會會員、日本南宗畫會幹事、文墨協議員となり、日本美術協會其他で幾度も受賞された。其子に岸浪靜山がある。靜山氏も亦家學を受けて南宗畫を善くし大正十二年に開催された日本美術展覽會には「北國雪景」を出して大に認められた。
現住所 東京市麴町區飯田町六丁目二一

高城雨雨晴、文禽鳴磔磔、殘梅粉末卸、
矜爽尙標格、理策向東郊、逍遙傍阡陌、
土潤風又和、春膏滋宿麥、青裙餉田頭、
東作忙耕殖、問我孰爲來、人生會有役、
此日雖可惜、惡得佳辰擲、逝憇長松陰、
古墓春草碧、豈應泉下人、枯腊就眞宅、
要爲今日懽、原是百年客、清歌開芳顏、
銜杯寄彭澤。

末松青萍子、見貽芝城山館納涼賢輕
妙唱和集、題後却寄二首(内一首)

青衫白袷故遲留、有客新從海外州、
謂是臨川窺秘典、因公綠野盡良游、
珠盤玉敦詩爲敵、茂樹清泉筆借秋、
彷彿身陪河朔飲、目前高興憶風流。

夕日岡
東帝節荒未、風頭尙冷然、殘梅十餘株、
疏花瘦以妍、幽鳥鳴關々、叢篠搖春烟、
頗愜稿項者、意興良奇偏、更尋享保碑、
細讀懷歌仙、奉敕國風選、清華情思繇、

平生荷恩寵、坐視鸞輿遷、暮年自然悔、
青史曷究宣、夕陽若懸鼓、滄々水徹天、
詩來只當處、不必孤岡傳、
槐南森大來氏嘗つて之を評して奇松の山厓の表に
挺立せるとく、霜雪に獨立して以て歳寒と闘ひ
時流とは迥に別異であつて誠に岐山の詩格は貴ぶ
べきである云々と、もつて岐山の手腕を想像する
に難くない。

木蘇 穀

明治二十六年八月富山縣射水郡小杉町に生れ、大
阪北野中學を経て、第三高等學校に這入つたが中
途で退學して早稻田大學の英文科に入つた。しか
し父の死によつてこの學校にも長く居ることが出
來ないで退學の止む無きに至つた。その後「英語
文學」を編輯したことがあるが、今は主として翻
譯を業としてゐる。
現住所 東京府下荏原郡碑倉村倉鐵飛一二五

北尾龜男

キタオカメオ(小)

明治二十五年東京四谷に生れ、三十八年小學校を
卒業後、二十銀行に雇はれ、その餘暇を以て各種
の學校に入つて學んだ。十三四才の頃より文學を
好み諸種の雜誌殊に文章世界の投書家として知ら
れ、爾來玄文社の社員となつた。大正八年十二月
國民新聞社に於て募集した懸賞小説社會劇を出し
て一等當選の名譽を得、賞金五百圓を贈られて一
躍文壇に名を知られるやうになつた。當選小説の
「集散」は夫婦生活の種々相、結婚後の苦悶、所
謂不良妻君の末路等を描いたものであるが、社會
に對する洞察の精透、夫婦生活の種々相や結婚後
の苦悶其他の描寫の巧妙なる實に未來を思はせる
腕の冴えを示してゐる。其後有樂町の飛行協會に
出勤し其の傍ら文學に耽つて居る。
現住所 東京市赤坂區新町五ノ三三

本谷千種

キダニチグサ(畫)

閨秀日本畫家。北野恒富、野田九浦に學び美人畫
を得意とし、第九回文展に「針供養」を出した。
氏はもと吉岡姓であつたが、近松研究家木谷蓬吟
氏に嫁し千種會を設けて後進の指導をなしてゐ
る。
現住所 大阪市外天下茶屋

木谷蓬吟

キダニホウキン(著)

氏は大阪の人、中學校卒業以來淨瑠璃文學の研究
に熱中し、斯道の蘊奥については文壇の老大家坪
内逍遙博士すら驚嘆したほどである。近松翁全集
を編して、翁の二百年祭に之を出版したが、其研
究の眞劍なることは何れの巻にも見ることが出來
る。天下茶屋の別墅にあつて、夫人閨秀畫家千種
女史と琴瑟相和し、藝術生活に浸つてゐる。氏は
俳句をよくし夫人との合作畫賛は大阪高島屋三越
等の展覽會でよく見ることが出来る。

お染、繪日傘の尋ねくゝて梅の門
會我、春の夜や十郎うたひ五郎舞ふ

重の井、雛の日や咎許されてお乳の人
夕霧、金山の名より得より河豚汁
伊左、借錢を背負ふ紙衣の寒さかな
宗五郎、負け公事の宿に下るや納豆汁
吉三、遺羽子の中を小姓の通りけり
現住所 大阪市外天下茶屋

喜谷 六花

キダニロクカ(俳)

名は良哉、明治十年七月十二日淺草馬道に生れ、十四歳僧籍に入り、錦城學校、哲學館、曹洞宗高等學林に學び、二十一歳下谷三の輪町梅林寺に住職となつた。明治三十二年頃より句作を試み、初め二六新報社内二六吟社に在つたが、三十四年よりホト、ギス例會に出で、爾來河東碧梧桐氏の教を受けて今日に至つた。氏の句は「日本」「東京日々」「日本及日本人」「毎日電報」等に投稿してあつたが、今は多く海紅に發表してゐる。そして「續春夏秋冬」「日本俳句鈔」等の諸俳書に蒐録されてゐる。内田昌川氏は六花の句集を編して「寒

烟」と題して公にした。氏は餘技として漢魏の書を好み、不折碧梧桐氏等と龍眠會を起した。

臘八や道風會下の五百人
國守の武士三日狩をつゞけり
層塔も舐る業火の魔舌かな
現住所 東京市下谷區三ノ輪梅林寺

北野 恒富

キタノツネトミ(畫)

美術院同人、日本畫家、名は富太郎、明治十三年五月金澤市に生れ、大阪に住して野田九浦等と大正美術會を起し又、大正四年大阪美術會を起し、大正七年更に水田竹圃、矢野橋村、山口草平、久保井翠桐、金森觀陽、島成園等と茶話會を起して大に認められてゐる。文展へは第四回に「すだく蟲」第五回「日照雨」第九回に「暖か」を出したが、院展第一回に「願の糸」第二回に「鐘の前」を出し、大正六年同人に推された。氏の人物畫は一種獨得の趣きあるもので、殊に大阪情調を寫すに妙を得てゐる。門下に島成園、吉岡千種(今は

木谷千種)等がある。大正十二年大震災後十一月大阪毎日新聞主催の日本美術展覽會に於て第一部審査員となり、佛國大使クロードル氏の著作挿繪を描いて名聲をあげた。
現住所 大阪市上本町八丁目東入ル

北原 白秋

キタバハラハクシュウ(詩)

本名は隆吉、明治十八年一月二十五日福岡縣柳河町に生れ、早稻田大學英文科に入つたが半途で退學し爾來詩作に耽つて居る。氏はいはゆる天才詩人であつて如何なる題材でも氏の文學に取り入れられると實に渾然たる詩となるとまで言はれて居る。夙に「新詩社」の詩人としてその名を知られ後「邪宗門」「思ひ出」「東京景物詩」「桐の花」「雲母集」「雀の卵」「眞珠抄」「白金の獨樂」等を出して詩壇の權威と推されて居たが、盡きざる氏の詩情は益々燃えて其の後實に無數の創作を發表して居る。官能的な南國的な色彩の強いそして豊潤で無垢なその詩的天才は美酒の如くに人をして

醉はせずにはおかぬものがある。會つて「ザムボア」「屋上庭園」「地上巡禮」「アルス」「煙草の花」「曼陀羅」等の文學雜誌を次々發行し、後又「朱樂」の名で雜誌を刊行したが後廢刊に歸した氏の經歷はどちらかと言へば餘程病的であつてよく天才家にあるやうな幼時より早熟な處や普通人と變つた點が多い。著書には右に挙げたもの、外に現代名家選集「木馬集」「白秋小唄集」(これは眞に日本的な新らしい民謡であつて、附録として生ける屍、カルメンの唄等も採り入れてある)。「金魚經」(これは小説といふよりも隨筆に近いものであるが流石に詩的ないゝ味が出てゐる)抒情小詩「わすれな草」繪入童話「とんぼの眼玉」「白秋詩集」「雀の生活」(これは雀の生活を描いて大自然に對する禮讚愛慕の至情をあらはし、雀の生活中に至る處に神の心を示してゐる長篇の散文詩である)英國童謡「まざあぐらす」繪入童謡「兎の電報」民謡集「日本の笛」童謡集「祭の笛」「羊とむじな」詩集「觀相の秋」等の外數多い。最近

には氏が更生の一大詩集「水墨集」を出し雑誌「詩と音楽」の主幹となつた。現住所木兎の家と言ふのは氏の門人等が作つて氏に贈つたものである。近く雑誌「日光」を創刊する計劃がある。

立枯並木の歌

霜ふかき野川の堰、あはれよと今朝見に来れば、
いつとなく水量涸れつつ隙間なく氷張りけり。
枯すすき土堤の枯草、凍りつき白くきびしく、
兩側の立枯並木、いよいよ白くさびしく、雪空
の薄墨色に、こまごまと梢明り、下空の小枝のほ
そ枝、立ちつづき見れども飽かず、入り交り網目
して透く。兩側の立枯並木、下見れば一側並木、
時をりにとまる鴉も、その枝の霜にすぼまり、渡
り鳥ちらばる鳥も、その空に薄煙立つ。風吹けば
かすかに揺れ、雪ふればいよよしづもり、さむ
さむと時雨ふる夜半も、月あかり落ちゆく曉も、
消なんとし消たすかすかに、現にもうつしけな
くも、ただ寂し薄し果敢なし。霜ふかき野川の
堰今朝もまた氷張りけり。その川の兩側つづき、

隙間なく枯木つづけり。あはれあはれ立枯並木。

現住所 神奈川県小田原町十字二ノ三二五

北村四海

キタムラシカイ(彫)

名は直次郎。明治四年二月長野市櫻枝町に生れ、父なる彫刻家北村正信に就て斯道の研究をなし、三十三年フランスに留學し、三十五年歸朝した。のち太平洋畫會會員となり、四十一年より其研究所に於て彫塑を教へた。受賞は三十一年東京彫工會にて二等賞を得たのを初めとして、三十二年日本美術協會にて二等賞を得、文展へは第二回に「春、秋」第三回に「手古奈」第四回に「花の精」第五回に「女郎花」「蔭」第六回に「救を求め居る女」第七回に「空想に耽り居る女」第八回に「水の精」第九回に「イヴ」「橋姫」を出し、褒状又は三等賞を得て大に認められ、第十回より彫刻部審査員となつた。爾來「M翁」「水のほとり」「すみれ」「春」「井泳鹿の娘」等を出した。氏は特に

大理石彫刻を得意とし、博覽會等にもその出品が多い。嗣子に名手北村正信があり、門下に伯爵小笠原長幹氏がある。

現住所 東京府下瀧野川村田端三二五二

喜多村進

キタムラスイム(小)

明治二十二年五月十四日和歌山市廣瀬仲町に生れ芝正則中學校を経て、青山學院高等學部を卒業して今日に至つた。舊和歌山藩主徳川頼倫侯の經營にかゝる圖書館南葵文庫の書司を勤め、傍ら創作に従つて居る。大正十一年九月ロゴス社より長篇小説「靄」を出したる外、小説「愛友」「初秋の街へ」「晚春譜」「樺並木」等の諸作を雑誌「新文藝」「趣味の夫人」「うまぶね」等に發表してゐる。

現住所 東京市外世田ヶ谷村太子堂四三三二

北村西望

キタムラセイボウ(彫)

彫刻家、明治十七年十二月長崎縣高來郡南有馬村

に生れ、同四十年京都工藝學校彫刻科を卒業して後、東京美術學校塑像科に入り、四拾五年優等の成績を以て卒業した。三十九年京都美術協會に出品して文展では第二回に「奮闘」第三回に「雄風」第四回に「寂寥」第五回に「壯者」第六回に「鐵工」第八回に「いざさらば」を出して褒状を得、第九回に「怒濤」「覺めたる人」を出してその「怒濤」は二等賞の選に入り、第十回に「晚鐘」「石工」「栗」の三作を出して特選となり、第十一回に「光にうたれたる悪魔」を出して其の力の確實性を認められて推薦に推され、大正八年遂に名譽ある帝展審査員となつた。氏は「曠原社」の牛耳を取つて東臺彫塑會の朝倉文夫一派と對抗したが大正十二年十一月兩派の美術派團體握手の時、高村高雲、山崎朝雲、米原雲海等の老人連を除外して一波瀾を起した。尙大正十二年の秋大阪毎日新聞主催日本美術展覽會開催の時は選ばれて、第三部(彫塑)の審査員、同十四年會員に擧げられた。現住所 東京府下瀧ノ川村上中里一七二

故北村透谷

キタムラトウコク(文)

名は門太郎、明治元年相模國小田原に生れた。氏の遺した日記や「文學界」等によつて見るに、氏の両親は氏が六歳の時氏を祖父母の手に托して東京に出で十一歳まで極めて厳格な祖父と繼祖母であまり氏の爲には盡してくれない人の手に育てられたが、「愛」の缺陷は遂に氣鬱病の原因となつた。十四年上京して京橋區彌左工門町に住み、數寄屋橋の泰明小學校に通つた。透谷の號はこの頃の町名スキヤの音を採つたらしい。氏はこの頃の一般の青年と同様に政治家を希望してゐた。一時鎌倉へ行きしこともある。十四年十二月優等の成績で卒業した。當時演説をやつたが頗る好評を博した。明治日報記者のごときは其雜報欄内に氏を奇童と稱したほどである。十五年岡千仞の塾に入り又本郷の共憤義塾に入り、十六年三月東京専門學校に入つた。其後巖本善治氏の文學雜誌に批評文を寄せ、更に二十六年一月雜誌「文學界」を創刊

二六八

し、島崎藤村、平田禿木、戸川秋骨、上田柳村、星野天知、馬場孤蝶等を同人とした。當時文壇に勢力を有してゐた硯友社は一大敵國視するに至つた。透谷は尙一方教會に關係して傳道に従ひその雜誌の編輯にも關係した。彼は早く結婚して一家の經營をしたので生活苦の激しいものがあつた。芝高輪の寺内や公園内を數回移轉し後故郷の國府津に歸り海岸に近い前川村に住んだ。氏が戀愛の爲に非常な煩悶に陥り、遂に心にもない商業に従事して戀愛の勝利を夢想し、又は各種の創作や劇詩の構想に日夜心を苦しめたことは吾人の想像以上である。二十七年五月十六日の月夜に病室をぬけ出て庭の樹に縊れて短生涯の幕は下りたが、氏の殘した透谷全集二卷と十二文豪のエマアソン一卷は不朽の記念像である。氏は批評家として優秀の筆をもつてゐたのみで無く、詩人としても得難い天稟の享受者であつた。「人生に相渉るとは何ぞ」「富嶽の詩神を思ふ」「鶯體舞」其他の名文少くない。

蝶のゆくへ

舞ふてゆくへを問ひたまふ、

心のほどぞうれしけれ、

秋の野面をそこはかと

尋ねて迷ふ蝶が身を。

行くもかへるも同じ關

越え來し方に越えて行く。

花の野山に舞ひし身は

花なき野邊も元の宿

前もなければ後もまた

運命のほかには我もなし。

ひらくくくと舞ひ行くは、

夢とまことの中間なり。

月前の柳

まねく手はほそくたゆめど空遠くなびかぬ月の

うらめしきかな

雨後の花

雨すぎてうらめしげなる花のおも散るまで友と

ちぎらざりしに、

俳句

行くへさへ音も聞かせぬ岸の水

雪そらに旅雁迷ふや歳の暮

冬の月雁のつばさも凍りけり

今日から見れば短歌や俳句には満足出來ぬものが少くないけれども論文に於ては今尙考へさせられるものが多くある。

故北村初雄

キタムラハツオ(詩)

明治三十年二月十三日東京麴町區に生れ、横濱第一中學校を経て、東京高等商業學校に入り、大正九年商業大學を卒業した。既に詩人三木露風氏の門に入り、大正六年詩集「吾歳と春」を出してそのロマンチックな象徴詩をもつて、大にその天分を認められたる詩人である。後に説話體の詩になり、また情景の氣分表現的なものになり、自ら「思想的抒情詩」と稱するものに手を染めた。雜誌「未來」「リズム」「詩王」等を出し、後に稻田稔氏等と共に「一致」を出してゐたが、大正十一

年十二月二日病氣の爲に歿した。前出の外に詩集「正午の果實」「北村初雄詩集」を出したる外評論「熊田精華論」等の作がある。

春(Dionysusの誕生)

Dionysus - The spiritual Form of Fire and Dew

薔薇樹は恵まれたり、許多の子等手を叩く。
リンネルの被衣は川邊の樹にかけて、
西風ぞ、よし主なき其を脅かせ、
我ら水神の薄明は此處あり、嬉し、樂し。
實に眞晝こそ牧神 Sthenus の醒めの時、
羊脚は蕃紅花と白堊の露とにはた酒に塗れつゝ、
飛ぶなり野を、躍るなり原を、空立ち騰るこの歡聲！
圓舞のうちに足を竦むる蜜蜂の颯り、和し、叫
けべその翅蟲ども！
日神は子午線の上に輕車を進まず、季まさ
春！
水砕けたり地の上に、地被れたり洗輝の光、
彼、生る！ 飛上がりて、

高鳴らす Pan が亡き愛人、盧荻の笛に、
群集る土地の神、牧の神、水の神、
見よ Sthenus はその大いなる眼瞳に嬉し涙を洒
へたる

右に擧げたる二柄杯、左に取持つ酒神杖、
「水」「光」、賀筵の日より此處に算へて幾許ぞ、
溢るゝ葡萄酒、溢るゝ歡喜、溢るゝ季節、
蔓葛の冠は白き彼が額に波立ちて、
持て餘す大神の碧色の大盃より流れ碎るゝ黄金
は、彼を惱まし、彼を溺らす、あゝ春！春、あ
ゝ春！

北村正信

キタムラマサノブ(彫)

彫刻家、名は友吉、明治二十二年一月新潟縣に生
れ、彫刻を斯界の大家北村四海に學び、小笠原貞
幹氏と同門であつて、又洋畫を太平洋洋畫會研究所
に學んだ。文展へは第五回に「炭臺の男」第六回
に「赤毛布」「鍛工」「老婆」第七回に「女勞働者」
第八回に「絶望」第九回に「髪」「花の精」第十回

に「希望」第十一回に「若い女」「闇の力」を出
し、褒狀又は三等賞を得た。師四海氏と同じく大
理石彫を得意とする。「曠原社」の優秀作家とし
て將來有望の伎倆を示してゐる。師匠北村四海の
嗣子となつた。

現住所 東京府下瀧ノ川村田端三五一

紀 潮雀

キチヨウジャク(小)

本名は下村悦夫、潮雀はそのペンネームである。
十四歳の春郷里の小學校を卒業後、土地の銀行に
勤め、十七歳の時初めて上京し、新詩社與謝野寛
氏の門に遊び、某私立中學及正則英語學校に學ん
でまた中途退學、二十二歳の初夏まで紀州の山間
地の製板所を二三ヶ所流浪し其の間に短歌に志し
て若山牧水氏の主宰する雑誌「創作」に毎月投稿
した。通俗小説を書き始めたのは二十四歳の夏で
あつた。氏は明治二十七年二月十六日紀伊國新宮
町に生れ右の經歷をもつて現に短歌雑誌「朱光土」
を主宰し、傍ら「現代」「少女俱樂部」「講談俱樂部

部」「面白俱樂部」等に寄稿してゐる。著書には
歌集「口笛」童謡集「螢の提灯」等があり、短歌
童謡、長詩、創作に力を入れてゐる外餘技として
繪を描いてゐる。

現住所 紀伊國新宮町

吉川靈華

キツカハレイカ(畫)

名は準。明治八年五月東京に生れ、父は淡齋と號
した有名な儒者であつた。幼時から大和繪を好ん
だので、初め狩野良信に就いたが、別に洋畫も研
究し、後松原佐久に指導を受け、初めは冷泉爲恭
に私淑し、次いで藤原、奈良、飛鳥より唐、印度
のものに就いて研究して得る所があつた。文展へ
は第五回に「菩提達磨」を出して褒狀を得たが其
後出品しないで専ら研究に耽り、大正五年、鍋木
清方、結城素明、平福百穂、松岡映丘、田口掬汀
等の諸大家と金鈴社を起した。作品には京都方廣
寺天井畫「龍」及原安民氏の藏せる「文珠」ほか
金鈴社第一回展覽會に出品した「寶相獅子」等が

ある。大正十一年帝展審査委員に擧げられた。中央美術編輯同人で、大正八年帝國美術院推薦となり、大正十二年大震災後開催された日本美術展覽會の審査委員となつた。

現住所 東京市小石川區坂下町四一

故衣笠豪谷

キヌガサゴウコク(畫)

名は縉候、字は紳卿、豪谷は其號である。別に天柱山人と號す。嘉永三年七月備中國倉敷に生れた。幼い時句讀を神崎小魯に受け、詩畫を石川晃山に、書を本城梅屋に學び、後森田節齋阪谷朗廬に從つて經史を研鑽した。慶應二年「讀課餘錄」を著し、次で江戸に遊び、書を市川萬庵に、詩を大沼枕山に、畫を佐竹永海松山延洲に學び、歸りて「西泛歸錄」を著した、後又京都に遊び、畫法を中西耕石に問ひ其技日に月に進み名聲益揚つた。明治六年清國に渡り、歸國の後「清國式躰卵圖解」を著し又「欽定授時通考」「農時有功傳」を校してのち農商務省に仕官した。既にして官を辭

木下尙江

キノシタシヨウコウ(小)

明治二年九月長野縣松本市に生れ、早稻田大學校の前身なる東京專門學校に入つて法律科を卒業し後一種の思想を有して之を創作に盛らんとして文

學生活に入り、小説「火の柱」「良人の自由」「懺悔」「靈か肉か」「乞食」「墓場」等の著書を出した。中でも「火の柱」のごときはその出版當時に於ては珍らしい社會小説であつたが、相當に讀者を有したものである。

現住所 東京府下三河島村字町屋

木下蘇子

キノシタソジ(俳)

名は立安、慶應二年十一月一日和歌山縣に生れ、明治二十一年慶應義塾を卒業し、時事新報の記者となり、紀和鐵道支配人、鐵道時報持主兼經營者として今日に至り、外に旅行案内社事務取締役を勤めてゐる。氏の句は大正二年遠州池田に遊びし時に始まつて、爾來「ホト、ギス句會」「新緑社」「ましろ社」等に作句を出し、乙卯吟社、六日會、石楠社、常盤木社等にも出席してゐる。従つて氏の句は「新緑雜誌」「ましろ雜誌」大阪發行の「藥石新報」「石楠社」「にひはり」「初冠」「俳諧雜誌」等に投稿したがその多くは「炬火」に收めら

れてゐる。餘技として謡曲、習字等をよくする。

現住所 東京麻布區本村町一一六

木下白露

キノシタハクロ(詩)

名は善二、明治二十七年十二月富山縣下新川郡魚津在に生れ、年少より北海道にあつて詩歌、政治經濟、武術を研鑽し、一方青年會長、民力涵養員憲政會北海道支部評議員として、東北の政界に活躍すること數年、偶々中央政界の風雲急なるによつて、邁進の意氣止みがたく、且つ往時幕末の志士として懐しき祖父なる酒井雅樂守の侍臣の面影を偲ばんと上京し、淀橋町惠風會本部員となり、憲政會總務小泉又次郎氏に寄寓して、政界の氣運を窺ふこと約一年の後、大に悟るところがあつて日本大學美學科に學び「文學世界」を主宰するに至つた。著には詩歌集「銀河」其他がある。

現住所 東京市外中目黒七五九

木下空太郎

キノシタモクタロウ(文)

本名太田正雄、明治十八年八月伊豆伊東に生れ、獨逸協會中學校、第一高等學校を経て東京帝國大學醫科大學に入り、卒業後長らく南滿醫學堂に勤務して居たが、古宇田學士と共に皮膚病學研究の爲洋行した。それはコイデイユムといふ黴菌の研究が主であつて、或る毒草の採取が從、餘暇には本職ものゝ日本文化の背景をなした來つた即ち支那朝鮮、印度、ペルシャ等の東洋文化の歴史をあらゆる研究して來るのである。氏は本職の醫師としてよりも寧ろ文藝方面に於て知られて居るので、本名よりも木下左太郎で通る作家であり、又別號北村清六として知られ、批評もすれば畫もかく。即ち頗る多才で詩人として戯曲家として小説家として、また文藝評論家美術批評家として何れの方面にも傑出した伎倆眼識を有して居る。嘗て木村莊八氏と支那に遊び、大同の石窟寺研究に従ひ、其の結果を集めて日本美術院より公刊した。常に短歌雜誌「アラ、ギ」及び文藝雜誌「明星」等に載せて居る。滯歐中大正十一年醫學博士の學位を

授けられた。著書に戯曲集「和泉屋染物店」「南蠻寺門前」小説集「唐草表紙」「論說「印象派以後」詩集「食後の歌」翻譯「十九世紀佛國繪畫史」(獨逸のリカルド・ムツラル原著)及び前記の大著「大同石窟寺」の外「雲崗日錄」等を出して居る。餘技としての畫も甚だ巧みであつて、石窟寺の寫生等に於ても十分に其の腕を認めることが出来る。嘗て「スバル」同人として活動したころは、其の特色は異國情調の豊かなるのと、文章の透徹にあつたが、今日に於ては其の技が益々冴えて來たやうに思はれる。四十歳にして家をなさずに孜々として自己の道を精進する點は確に偉いものである。醫者で文學に名あるものには氏の外に吉村寅彦、森林太郎、大野酒竹、井上通泰、坂田九峰永坂石埭等の近現代人がある。

現住所 名古屋市東區武平町二ノ六

木下利立

キノシタリゲン (歌)

明治十九年一月一日岡山縣吉備郡足守町の舊藩主

利永の嗣子として生れた。五歳にて上京、學習院を経て明治四十四年東京帝國大學文科大學國文科を卒業した。國文學に造詣深く新進歌人として知られてゐる。「心の花」「白樺」「短歌雜誌」其の他の新聞雜誌に作歌を發表し「新家庭」其の他に隨筆等を出してゐる。歌集に「銀」「紅玉」の著がある。子爵。

うちあげし潮退けばすでに迫る後のうねりを磬床までり

たそがれのたぎつ瀬近み川床の湯つぼの湯氣のしみに立つも

現住所 神奈川縣鎌倉町名越一三三七

故君

尾

キミオ (歌)

京都祇園の歌妓、氏は中西、父は俠客雁金文吉と云つた。君尾は父の氣風を受けて俠名があり、當時の志士高杉晉作、久坂玄瑞、桂小五郎、西郷隆盛、山縣狂介、品川彌二郎、井上聞多、桐野利秋土方孫左右衛門、伊藤俊介等の諸士に愛せられ、

常に杯盤の間に侍し、勤王藝妓と稱せられ、殊に土方氏の如きは其狎客であつたと云ふことである。大正七年二月十七日七十五歳で病歿した。「白梅でちよつと一杯や死出の旅」といふ辭世を残した。

故木村香雨

キムラコウウ (畫)

天保十三年十二月九日仙臺に生れた。父は藩士であつたが氏は畫を好んで遂に一代の大家となつた。氏名は長明、字は子徳、香雨は其號であるが尙別に芝石山房、幽馥堂、小朱石、石頭等の號がある。幼名は熊之助と言ひ、幼より畫を好み初め同藩士草野東薫を師として四條派の繪畫を學び、陸山と號したが、後藩の畫師東東萊について南宗派の畫法を修め、明治八年東京に遊び香雨と改めこの間に諸國に歴遊した。同十三年居を東京に移し、南宗畫を専門として内國勸業博覽會及工藝品共進會其他日本美術協會等に於て銅牌又は優賞を得た。後日本美術協會々員となり大に盡すところ

があり且つ鐵筆を以ても一家をなすほどの妙手となつた。大正元年十一月逝いた。享年七十一。生前の住所 東京市芝區西久保明舟町

木村小舟

キムラシヨウシユウ(著)

氏は明治十四年九月十二日岐阜縣加茂郡加治田村に生れて獨學自習、幾多の少年雜誌に關係し、著書實に二百餘種の多きに達してゐる。其うち我が國の寺院に於ける國寶を書いた「國寶物語」及び「推古より天平へ」等は裝釘内容共によく出來てゐる。「少年の友」「奮闘」の顧問、日本國寶全集刊行會理事並に廣文館出版部の主任である。佛教藝術家及び少年文學に携はれる人々と往復し、嗜好や趣味に至つて廣い人である。

現住所 東京府下豊多摩郡代々幡町佐々木初台五六一

木村莊太

キムラソウタ(翻)

明治二十二年二月東京芝に生れ、京華中學校に學

んだ。後文學に志してストリンドベルヒの「痴人の懺悔」の翻譯を出してより數年を経過したが其後の翻譯や創作等の發表を見ない。東京市外平塚村蛇窪三二〇

木村莊八

キムラソウハチ(畫)

明治二十六年八月二十一日東京市日本橋區吉川町一に生れ、京華中學校卒業後は専ら繪畫に従ひ、少時翻譯をなし文筆を弄んだ。初めはフューザン會に據り大正五年岸田劉生氏等と草土社を起し、其の作品を主として此の會に出品したが、其の數實に數百點の多きに達し見る人をして驚嘆せしめた。又泰西の美術に關する論評や翻譯に従事して「後期印象派論」「ロダンの藝術觀」「ワシントン・ゴッホの手紙」「藝術の革命」「近世美術」「ミケロ・アンジェロ」「未來派立體派論」「ボテイチェリ傳」「レオナルド・ダ・ヴィンチ傳」「グレコ傳」等の著がある。尙ほ木下左太郎氏と共に支那大同の石佛寺に遊び、其の研究の結果を集めて「大同石佛寺」

現住所 湘南辻堂驛梅花園新宅

木村恒

キムラツネ(小)

明治二十年三月十二日埼玉縣北埼玉郡埼玉村大字百四十五番地に生れ、獨逸協會中學を経て早稻田大學專攻科を卒業し、爾來東京朝日新聞記者となり、傍ら創作に従事して「狂人の妻」「人間」「吹雪」「驚愕」「女の三大敵」「女の拘摸」等の小説隨筆を出した。

現住所 兵庫縣武庫郡六甲村字高羽四

木村毅

キムラツヨシ(小)

明治二十七年二月十二日岡山縣勝田郡勝間田町岡に生れ、早稻田大學に這入つて英文科を卒業し、爾來文學生活に入つて創作翻譯等に従事してゐる。また「春秋社」編輯部員となつて實務に當つてゐる傍ら小説「龜屋の叔母」及び「ルツソオヨリトルストイまで」「新文藝講話」其他の翻譯を公にした。尙ほ近く「須藤鐘一論」「自然兒オー

の大著を出し斯會に有益な參考資料を與へた。また「子供の爲の美術史」を書いた。又大正十三年四月春陽會展覽會に出品した「玄蕃立去る」は美術界の評判となつた。

現住所 東京市本郷區森川町一、仲通り二八七

木村鷹太郎

キムラタカタロウ(著)

明治三年九月愛媛縣宇和島市に生れ、明治學院を経て東京帝國大學文科哲學科の選科を卒業して、専ら著譯に従事し「東洋倫理學史」「日本太古史」「統合世界史」「希臘羅馬神話」等の著及び「プラトーン全集」「バイロン傑作集」の譯もあるが、其後研究の方向一轉して大正六七年頃より力を専ら日本民族の新研究に用ひ、日本歴史の改造を目的として日本民族協會を組織し毎月「日本民族研究叢書」を發行してゐる。大正十三年三月畫家小寺謙吉氏夫妻と共に文藝家の社交的會合なる「滿月會」を起し、その第一回を同月二十日海上ビルデング中央亭を開いた。

バルホワイトレイ」「パスカルを憶ふ」「宗教と藝術との史的考察」「宗教家對革命家」「宗教のために辨ず」「危機に立てる宗教」等の評論を早稻田文學、新潮等の文學雜誌に出した外に文藝講話の連續的發表をもしてゐる。氏の郷里地方よりは創作家額田六福評論家井汲清治文學哲學の研究家出隆等の新進が出て居る。

木村半文錢

キムラハンモンセン（川柳）

明治二十二年三月七日堺の宿院に生れ獨學をして文筆に携るやうになつた。萩村といふ別號も時に使ふ。もと砂糖商であつたが商業を忘れて文筆に親しんだ結果商業に失敗を來した。主として單行本に筆を執つてゐるが子供雜誌「樂園」及川柳雜誌「番傘」に時々寄稿してゐる。又小康社を組織して「小康」を發行してゐる。作には通俗小説四五十種と雜文學書類二十種程ある内小説「少年の悩み」は氏の最も自信あるものである。尙氏の主

張する川柳は詩としての川柳であつて從來の醜穢な趣のものとは大に異つて、所謂新派の川柳である。
夕燒雜草思ひきり走つてやれ
つくね芋ほんにつくねた儘賣られ
壺の水そのまゝ圓く汲み出され
海の上手に一枚の紙をもち
眼の上に眉毛四角な家の中
等は氏の主張する詩川柳の具體例である。

現住所 大阪府西成郡今宮町字三日路六六五

木村武山

キムラフザン（畫）

名は信太郎。明治七年九月茨城縣笠間町に生れ、東京美術學校に入學して、二十九年優等の成績をもつて日本畫科を卒業し、後、畫壇の新人先覺者として有名な天心岡倉覺三に従つて横山大觀、下村觀山、菱田春草等と常陸五浦に移つたが、大正元年東京に歸り、大正三年日本美術院の再興と共に其同人となつた。作品は文展では第一回に「阿

房劫火」第四回に「孔雀王」を出して何れも三等賞を得、院展では第一回「小春」第二回に「彌陀三尊」第三回に「朝霧」「不動」第四回に「法然上人」「日盛り」等を出した。大正十二年震災後の院展に於ても「龍田姫」「黎明」「カルタ」の諸作を出した。日本美術院評議員として同院の重鎮である。

故木村正辭

キムラマサコト（國）

有名なる國學者、下總國成田の人、父を清宮仁右衛門と曰つて 氏は文政十年四月成田に生れた。幼名莊之助と稱し、後木村氏に養はれ、幼時國學を伊能穎則に、漢籍を岡本保孝に學び、幕末の頃擧げられて和學所頭取となつた。明治の初大學助教授となり、尋で神祇官文部省七等出仕太政官權少書記官等に歴任し、二十三年東京學士會員に選ばれ、又文部書記官文科大學教授高等師範學校教授を兼ね、二十六年官を辭し、爾來家に在つて著述に従事した。氏は學和漢を兼ね造詣最深く就中

萬葉集は其の蘊奥を極め、前人未發の解が多い。専ら萬葉の註解を究め、既刊の書十五種に及び未刊の稿本は家に山積してゐる。氏は好んで書を藏し數萬卷になつた。嘗て明治天皇に珍本數種を獻じた。其の支那に跡を絶つた古書で正辭の家に藏するものが少くない。それであるから支那公使の本朝に駐劄する者は必正辭の家に就いて珍書を披閱するを例とするのである。氏は他の嗜好がなく終日家に在つて讀書するのみであつたので晩年視力が甚だ衰へた。そこで養子兼吉に「源平盛衰記」「太平記」「十訓抄」其の他の古書を讀ましめて聽くのを樂とした。のち文學博士を授けられ、大正二年四月十日年八十七で病歿した。

清浦明人

キヨウラアキンド（詩）

本名は人見圓吉、明治十六年一月岡山に生れ、早稻田大學文科に學び、詩を作り小説を書いて文學生活に入り、曾て東明の號をもつて聞えたものである。さきに詩集「夜の舞踏」「戀ごころ」の二著

を出し、又最近には「榮光を求めて」「運命の力」「人間の心」等の小説を出した。
現住所 東京市小石川區音羽町二ノ三

清見陸郎

キヨミミチオ(劇)

明治十九年十月十一日神田區猿樂町に生れ、少時畫家にならうとして、東京中學校を卒業したる後東京美術學校日本畫科に入つて一ヶ年在學したが途中志を文藝に轉じて退學し、爾來常盤興業會社所屬の劇場のために脚本創作に従事して、戯曲集「宮古路豊後椽」を著した外に、雜誌「人と藝術」に戯曲「故國の家」を發表してゐる。
現住所 東京市外巢鴨町三ノ二六

桐谷洗鱗

キリタニセンリン(畫)

名は長之助。明治九年十月新潟縣三島郡宮本村に生れ、初め風俗畫家で版畫界の重鎮である富岡永洗に學び、後橋本雅邦に就き、四十年東京美術學校日本畫撲科を卒業した。文展へは第一回に「旅

の友」第十回に「佛地憧憬の旅」第十一回に「涼園」を出した。大正六年冬印度に渡つて七年五月歸つた。そのアヂヤンタ石窟寺を始め彼の地の寫生等は我國畫壇並に佛敎界の良參考品となつた。
現住所 千葉縣市川町真間

クノ部

故陸

羯南

タガカツナン(文)

岩手縣の人、名は實、羯南はその號、家は津輕藩の儒家、氏夙に經史に通じ曾て司法省法學生となり、成業の後内閣官報局に奉職してその長官となり、幾もなく官を辭して筆を東京電報社に執つた。後改題して「日本」となつた後は之が主筆として國家主義を鼓吹した。これより氏の才學江湖に鳴り、従つて「日本」は雜誌新聞界に重きを置かれるやうになつた。氏はまた曾て東洋の事務局に注意し、副島伯岫本日南等の諸氏と東邦協會の設

立に與り、轉旋するところが尠くなかつた。後「日本」の社長兼主筆となり又歐洲を漫遊視察して見聞を廣めた。歸來その偉大な豊富を著々行はうとする時に偶々病を得長らく鎌倉に構へて治療をしてゐたが四十年九月二日遂に歿した。享年五十一。氏曩に仙臺師範學校に這入つたが故あつて退學を命ぜられ函館に行つて佛人について佛語を學び、次いで司法省の法律學校に學んだ。最初入學した師範學校に順當に在學したら、或は一村夫子として終つたかも知れなかつたのに、一退學命令が氏の奮發となり活動となつて、遂に侃々の論議の議正に論壇の雄將となり政論壇に花々しい活動をさせた。殊に明治初年より歐米崇拜の傾向甚しく、やゝもすると本末を忘れるやうな極端な者も輩出する時に當つて、氏等が大に國家主義の爲に論陣を張つて筆戦をしたといふことは氏にとつても國家にとつても禍を轉じて福となしたのもとも思はれる。末松謙澄の高等師範に於ける奥田義人の高等學校、木村銳市氏の鳥取師範に於ける

何れも思ひ合せると感憾無量である。尙ほ正岡子規の俳句を日本派と言つたのは、最初子規が根岸の家其隣家なる羯南氏宅を訪問して俳句の文學的價値を説いたのに對し、氏が爾來紙面を割いてくれたのに起因する。京都大學の文學部教授で現今詩壇に於ても有名な文學博士豹軒鈴木虎雄氏はその女婿である。越後の詩人儒學者の子として生れた豹軒氏が漢詩の外に和歌や俳句に巧なのもこの「日本」からと思へばそれらの連想にも文藝愛好家にとつて盡きざる興味が湧く。氏は朝比奈知泉三宅雪嶺、徳富蘇峯、黒岩周六、池邊三山等と共に文名を争うたものである。
生前の住所 東京下谷區上根岸町八六

日下勺水

クサカシヤクスイ(詩)

氏は古河の人名は寛、川田甕江の門に學んだ有名なる東京の詩人、現に故高橋月山の後を承けて「雅文會」を主宰し「大正詩文」及び「斯文」に數多の詩文を發表し且つ諸大家の詩に批評をも試み

てゐる。

扇浦所見

雲起群松欲飛舞、
紀南名勝我將題、

湯崎

縹緲仙寰別樣奇、
銀沙金液千秋色、

書懷

老來抗節臥林泉、
耿耿隱憂誰共說、

徐福墓

避秦長計只求仙、
萬里蓬萊靜藏魄、

西望咸陽浪拍天、
孤墳不滅二千年。
氏の能文は「彌彦公園」「玉堂遺琴記」「荃汀遺文序」「聞水園記」「與牛島別天」等の外數多の文章を發表して、能文の大家なることは世既に定評あるところであるが詩も亦専門詩人も及ばぬほどの力量を示してゐる。加藤弘之博士を壽した次の律學從中外究天人、不怪步趨群俊循、

一代經綸贊樞議、
微言常辨薰猶別、
桃李滿門歌五柳、
も評判高かつたが、福島大將の碑文も立派なものである。こゝにはその文を略して銘のみを掲げて置く。

將軍在世、
士馬惘然、
碓嶺之北、
擒藻以鑄、

氣蓋乾坤、
厥身雖逝、
淺岳之前、
偉勳千古、
將軍去世、
美靈在天、
豐碑屹立、
炤耀史編、
小牧櫻泉氏は之を老史筆と稱し、館森袖海氏は此筆に非れば此人を傳ふべからずとまで激賞してゐる。

尙下總の人靜庵小宮保氏の左の一首は翁の人物を知るに参考となるからこゝに載せることにした。

贈日下勺水先生
保與先生同貫籍、故知先生殊深、大正十年先生齡躋七十、因獻所藏青銅儒像一軀、附以蕪詩一章。

年少見頭角、老來儒業成、
精、褒貶千年跡、文章百世名、
燈明。翁大正十年翁七十歳の時左の作があつた
七十自述

點易刪詩七十年、
空言無補愧鄒賢、

青山有約身將老、
俯仰乾坤一慨然、

青厓氏はこれを評して風韻あり魄力あり、固より
小家の有するところに非ずと、全く其の通りである。

現住所 東京府北豊島郡西巢鴨町池袋二二三

故日下部鳴鶴

クサカベメイカク(書)

最も有名なる東京の書家、名は東作、字は子賜、
鳴鶴はその號で、別に野鶴閑人の號がある。舊彦根藩士田中些翁の男で天保九年八月江戸に生れた。養父三郎右工門は櫻田の難に殉じ、氏は其後を嗣ぎ、元治慶應中京都及桑名征討の役に従つた。明治維新の際徴士となり、諸官に歴任して太政官大書記官となり、十二年決然冠を掛けて官を辭し、

葛巾野服檢山討水足跡幾んど海内に過く、興懷の觸れるところ一に之を吟咏揮灑に寓し、其逸韻高情豊かに時流に超越した。氏は幼時より書を好み一意研精數十年最初は貫名海屋緒遂良の書を學び其技大に進み明治二十年頃には書名夙に鳴り、長三洲巖谷一六と並んで斯界に重きをなした。後清人楊惺吾子敬に交り彼の地の歴代の碑帖一萬餘種を涉覽して深く悟るところがあつた。これより漢魏六朝の書を唱道して篆隸楷行草皆其蘊奥を究めた。又筆を載せて清國に遊び吳越の勝概を探り、吳窓齋楊見山廖養泉吳俊卿等の諸家に交つて金石の學を講究し、三代の鐘鼎彝器數百種を觀て古籀文を玩味し文字の淵源に溯り、古今書法の推移沿革を詳にした。當時上海申報といふ新聞は特に掲げて東海の書聖來ると稱した。翁の得意誠に想ふべきである。歸朝後其名聲愈高く世推して翰墨楊中の泰斗と爲し一代の書聖と仰いでゐる。詩は梁川星巖に就いて研鑽し作究怠らずこれ亦斯界稀に見る大家となつた。かくて氏は實に閱歴、學問、

藝術兼備つて他に其比類を見ないのみならず、高傑清雅の人格、趣致自ら世の慕ふところとなり桃李の下不言の間に自ら蹊をなすの道理で門下雲集し、依頼される絹統扇帖の机上に堆きを見、書債いつ果つべしとも思はれぬほどになつた。これより六朝の筆風愈全國に廣まり、筆を畫仙唐紙に下すもので他流を見ることまた實に稀になつて、書と言へば一六鳴鶴を宗とするやうになつた。この後書道に名をなした中村不折や前田黙鳳等も、皆この餘風を受けたものである。門人には丹羽海鶴、比田井天來、山本竟山、近藤雪竹等の諸大家があり、今や翁の書風は全國至る處に普及してゐる。大正六年二月翁の八十の壽筵には朝野の名士東京に雲集して非常に盛會であつた。巖谷一六居士の二男辨二郎氏を二女に配して養嗣子としたが辨二郎氏は工學博士として令名あり嘗て東京市技師長の榮職に就いたこともある。翁は大正十年一月二十七日歿して世田ヶ谷の豪徳寺に葬つた。

辛酉新年試筆

二八四

九九加三保健躬、清閑堂上曙光通、磨松烟墨徐揮筆、宛不鳴條羽習風。

鎌倉圓覺寺迎歲

蕭寺逢年物外情、朝來無客賀新正、梵鐘百八醒塵夢、便是陽春第一聲。

題達磨硯箱蓋

昨夜街頭買硯歸、金星點々映書幃、磨來池底雲翻墨、恐汝化龍霄漢飛。古歛一丸龍尾石、彫鏤不假本天然、洗心松露佛因在、幾載僧房參墨禪。

現住所 東京市赤坂區青山南町五ノ五三

草野柴一

クサノシバジ(譯)

姓は若杉、名は三郎、明治八年十一月岡山縣北和氣郡羽仁村に生れ、仙臺中學校第二高等學校を経て、明治三十七年東京文科大學英文科を卒業して「モリエル全集」「デヨンブル及び其の郷土」等の翻譯がある。埼玉縣熊谷中學校の教師を奉職の傍ら文學の事業に従つてゐる。

現住所 埼玉縣熊谷町仲町三六一

久志本梅莊

クシモトバイソウ(書)

伊勢山田の人、安政二年八月伊勢國齋神宮長官從二位常庸の男、名は常幸、字は公慶、別號は師竹軒主人、幼い時から八木道に執着をもつて日夜研鑽し、夙に業を松田雪柯に受け、後居を東京に移して巖谷一六、日下部鳴鶴、長三洲の諸名家と周旋し博く碑板法書を究め、元明より六朝漢魏に遡つて益々深奥の研究をした。又詩文を河崎格齋三瓦等に學んで雅懷を養ひ、染筆の餘暇平仄を探つて情を表はした。曾て神宮禰宜に任して正五位に叙せられ又學習院習字科の教授になつて名門の子弟にその得意の指導をしたが、東京京橋區木挽町の私邸に家居し、家を梅花書院として多くの門人を教導し、且つ希望の者に絹紙扇統を頒つてゐる。號梅花の字は花を窓とも書くことがある。大震災以後九州各地を漫遊したが、この頃から梅叟の號を用ゐてゐる。

現住所 東京市小石川區原町一三三

楠田敏郎

クスダトシロウ(歌)

明治二十六年丹後宮津に生れ、嘗て「文光堂」「講談落語界社」「大正日日新聞社」「毎夕新聞社」「大東京新聞社」の社會部に勤めたことがあつたけれども、今は短歌に没頭して浪人生活をしてゐる。號を「檜山鳥夢」と言つて、創作「神經の尖つた男」「追放」「お美津の誘惑」其の他數篇ある。短歌は前田夕暮に師事して歌數既に數千に上つてゐる。

現住所 東京府下目黒村中目黒九八四

葛原 幽

クズハラシゲル(詩)

明治十八年六月廣島縣深安郡八尋村に生れ、福山中學校を経て東京高等師範學校の英語科を卒業した。父勾當は有名な音楽家文學者であつたために其感化を受けて音楽家文學家の血が多い。學生時代から作歌作曲を盛にやり公開の處で音楽の演奏

もやつた。卒業後博文館に入つて編輯部にあつたが、今は獨立して主に少年少女の讀ものや唱歌などを作つてゐる。かつて文部省で懸賞募集した假作物語には美しい文が一篇當選して載せられた。

「新唱歌集」十二冊「大正幼年唱歌」十二冊「大正幼年傑作文」「大正少女傑作文」「一姫二姫三太郎」等の外少年に關する多くの著がある。東京女子音樂學校及跡見高等女學校講師

森の仕立屋

森の仕立屋は

小鳥がお客

黒羅紗マントは

鳥の一張羅

年中白着は

鳩つ子でござる

インコいつまでも

者に便にした。碩水少より人の下に立つことを耻ぢ慨然として讀書した。曾て豊後に遊び廣瀬淡窓に從て學び又草場佩川、木下韃村の門に入つた皆得る所無くして去り、後江戸に遊び業を佐藤一齋に受けた。氏は平生最も自立を重じ苟も世と合はぬ。しかし其の忠孝を勵まし、名分を謹み、出處を審にし、義利を辨するに至つては則ち凜として犯すべからざるものがある。其の學博く、大學中庸に於て最も見る所がある。嘗て曰ふのに大學は是性學の書であつて知を主とする。故に格致よりは入る。中庸は是心學の書で行を主とする。故戒懼よりは入り。朱子の序文、大學に於て性を言ひ中庸に於て心を言ふは此れがためである。書既に治まれば則ち語孟六經治めなくとも明かであると其の學はもと山崎氏より入り更に進んで得る所があつた大正五年十二月廿日歿し、年八十五。著す所「碩水文叢」「隨得錄」「日本道學淵源錄等がある。

ハイカラでござる
仕立も縞柄も
氣に入らないと
怒つてゐるのは
あうむでござる
現住所 東京市本郷區西片町(十ろノ五八)

故楠本碩水

クスマトセキスイ(漢)

儒者、名は字嘉、字吉甫、謙三郎と稱し、又天逸と號した。肥前國針尾島の人、端山の弟で養齋の子である、少時佐々氏を習し、平戸藩主松浦氏に仕へ十六才で藩學生員に補せられ句讀師及助教を経て遂に教授と爲つた。明治戊辰貢士となり、のち會計官租稅司判事を命ぜられたが固く辭して漢學講官に轉じ、又大學少博士に叙せられ 庚午大學廢せられて氏は平戸に歸り直に針尾山中に入り庵を結んで居た。四方風を聞いて來り學ぶ者甚だ多い。是に於て同志相謀り舎を其の傍に設けて學

楠山正雄

クスママサオ(劇)

明治十七年十一月四日東京市京橋區竹川町に生れ國學院、早稻田大學英文科を明治三十九年に卒業して、讀賣新聞記者となり、早稻田文學社員、新日本記者等を経て今日に及んだ。演劇に關するもの及び兒童の讀みもの等の創作翻譯及び評論が多い。著書に「其の昨夜」「インツツブ物語」「世界童話寶玉集」「日本童話寶玉集」「近代劇選集」「近代劇十二講」「シュニツツレル選集」「廣野の道」「チエホフ戯曲集」等の翻譯がある。現に富山房編輯局の囑托をしてゐる。氏は三年の間京都市上京區南禪寺永觀堂町三三に在つて文筆に從つてゐたのであるが、大正十三年六月歸京して麻布に卜居した。
現住所 東京市麻布區材木町三〇

久津見蕨村

クズミケツソン(著)

東京の人、名は息忠、蕨村はその號、又の號を暮

村隠士と稱してゐる。全く獨學自習で研究し學校生活の經歷は無い。思想家として一權威を有してゐる。現に雜誌記者であつて頗る著書が多い。「人生の妙味」「眞人僞人」「現代八面鋒」「ニイチエ」「自由思想」「基督教罪惡史」等はその主なるものである。

氏はその哲學や思想を和歌や俳句にも詠んでゐるがなか／＼面白。

獅子の勇駱駝の力身に兼ねて小兒の如く無邪氣なれかし(超人)

偉なるかなツラアストラはさましけり三千年の哲學の夢(ニイチエ)

たらちねはしこのされわさゆくりなく泣兒うめく子徒にます(色戒)

禪學も本來くうやくわすでは參ぜんどこか一ぜんもなし(禪)

をんなどとはかよわき者の名なりけりマルテもあり巴ありとも(女)

見えぬこそ遙か勝なれ眼のあかは世の様々のう

き事や見ん(盲人に)

萌出づる力ふまへて今朝の雪(雪)

眼を閉ぢて見る人も有り今日の月(月)

現住所 東京市小石川區宮下町二二

故工藤他山

クドウタサン(漢)

陸奥弘前の儒者、名は主善、字は温克、津輕藩の世臣古川儒伯の次子である。幼より學を嗜み、嬉戲を喜ばない。藩學稽古館に入つて講習數年の後、儕輩を超え、弱冠擢んでられて典句となつた。然し自ら足れりとしないうで四方に遊學せんと欲して嘉永元年職を辭し、衣服器具を賣つて江戸に至り朝川善庵に師事し、又大阪に遊んで篠崎小竹の門に入り、當時の名士と往來研鑽業大に進んだ。然し學資既に盡き傭役して僅かに給した。會々脚氣に罹つて歸郷し北郷中里村に住して子弟に教授し以て口を糊した。藩老某他山の名を聞き之を其家に聘用しやうとしたが、他山は貧乏ではあつたが陪臣たるを屑としないで之を峻拒した。文久中青

邦枝完一

クニエダカンジ(劇)

明治二十六年一月一日東京市麴町區有樂町に生れ慶應義塾大學の文科並びに外國語學校伊語專修科に學び、時事新報の文藝部主任となつた。また帝國女優學校主事及び研究座舞臺監督等をしたことあれど現在はその總てと關係を絶つて専心創作に従事してゐる。著書に脚本集「異教徒の兄弟」「明暗録」「邪劇集」の外數多くあるし近來は小説にも筆を染めて「雜草」「師走空」等の作を發表してゐる。

現住所 東京市外大久保百人町三〇一

國枝史郎

クニエダシロウ(劇)

明治二十一年十月長野縣諏訪郡宮川村茅野に生れ文學に志して早稲田大學英文科に入り、卒業後「レモンの花咲く丘へ」外十數篇の創作戯曲を書いた。現に大阪朝日新聞社に在つて文藝演藝記者として趣味ある筆で其の批評紹介等の欄を賑はし

森に移り帷を下して生徒に教授した。時に、空乏益々甚しく弊衣糲食人の忍ぶことの出来ぬほどであつたが他山は平氣であつた。慶應三年藩主辟して稽古館助教に任じ俸米を給した。他山江湖に落魄すること殆ど二十年の後こゝに始めて出仕した。己に五十であつたが、官餘私塾を開き思齋堂と曰つた。來り學ぶ者數百人明治三年學士に遷り尋いで一等教授に陞つた。十年東奥義塾の聘に應じ生徒に授けた。十四年天皇東北に巡幸の際他山頌及「津輕凶荒記事」を獻じた。時に編修官川田剛氏扈從したが之を見て歎稱して學問文章東奥罕に有る所とほめた。是より先き「他山津輕藩史」「靈墓碑」「官制」「職制」「學制」「租稅則」を編纂しようとして欲業暇筆を採つて老の至るを忘れた。二十年に至り盡く成り、二十二年二月二十七日病んで歿した。年七十二。他山清癯短小事に臨んで毅然屈せず學洛閩を宗とし章句に拘泥しない詩文は彫琢を事としない文鈔及遺稿があつて刊行された。

て居る。

現住所 大阪朝日新聞社内

國方林三

クニカタリンゾウ(彫)

號は天海。明治十六年二月香川縣に生れ、のち上京して太平洋畫會研究所彫塑部に入つて學び、文展へは第二回に「暮ゆく空」第三回に「焦心」第五回に「もだえ」第六回に「憩」第七回に「女の半身像」第八回に「種まく女」「瞳」第九回に「わなゝき」「夏」「衣がへ」第十回に「網」「春の夢」「陰」第十一回に「幻惑を打拂ふ女」「驚異」を出した。「曠原社」例の名手として東臺彫塑會の朝倉文夫氏一派と對抗してゐる。大正十二年帝國美術院展覽會審査員の候補に擬せられた。

現住所 東京府下田端臺通二二二

故國木田獨歩

クニキダトツボ(小)

明治四年七月十五日下總國銚子に生れた。幼名は龜吉、父は舊播州龍野藩士國木田專八と言つて異

母兄二人あつた。四歳の時母に伴はれて上京し一家下谷徒士町脇坂侯の邸内に住し、裁判官なる父が周防國岩國に奉職の爲一家同地に轉住し、七歳の時更に廣島に移つたが、八歳の時再び岩國に轉住して錦見小學校に入學し、明治十八年十五歳の時山口中學校に入學し、同二十年東京專門學校に入つてその英語科に學び後英語政治科に轉じた。二十二年植村正久氏に依つて洗禮を受けてクリスチャンとなり、二十三年鳩山和夫氏の東京專門學校長となるのを排斥して納められず、を退學した。この時が氏をして本當に詩文に喰ひ入る機會を作つたのであつた。この年二十歳にして山口縣なる父母の家にて靜に修養に志し、高青邱、ウオーズオース、カーライル等を受讀し、又私塾を開いて少年子弟を教育し英語と數學を教授した。翌二十二年再び上京して友人數名と共に青年文學會を起し、雜誌「青年文學」を發行した。二十六年金森氏の「自由新聞」に入り、初めて新聞記者となつた。九月徳富蘇峯の紹介、矢野龍溪の

周旋の下に豊後國佐伯鶴谷學館に教頭として聘せられ、翌年九月國民新聞社に入社した。十月軍鑑千代田に乗込んで從軍し「愛弟通信」を同紙上に載せた。翌年雜誌「國民の友」の編輯に従事し、六月佐々城信子と相知つて九月北海道空知川沿岸に赴き、十一月妻信子と共に相模國逗子に卜居した。四月信子失踪したので失戀の苦悶を癒さうとして米國渡航を思ひ立ち内村鑑三氏に諮り、十一月田山花袋・柳田國男と相知つた。三十年四月田山花袋と共に日光に行き照尊院に寄寓した。有名なる「源をぢ」はこの時に書いた處女作である。四月二十九日最初の「獨歩吟」を「抒情詩」に於て公にした。三十一年一月第二の「獨歩吟」を「山高水長」に於て發表し、四月「報知新聞社」に入り、三十二年糟糠の妻治子を娶つた。翌年五月同社を退き家計漸く窮迫した。十二月「民聲新聞社」に入り三十四年第一文集「武藏野」を出版した。また代議士にならうとして下總國で運動して失敗し、十二月西園寺公望侯の神田駿河臺の邸

に寓した。三十五年齋藤弔花・原田東風等と共に鎌倉に卜居し、十二月矢野龍溪の慫慂によつて「近時畫報社」に入つた。三十八年七月「獨歩集」を出版し三十九年三月有名なる「運命を公にした。八月「獨歩社」を芝に起したが翌年四月破産した。五月「濤聲」を出したが六月病氣の爲湯ヶ原に療養した。十一月杉田恭介氏の別荘に赴き翌四十二年二月茅ヶ崎の南湖院に入院した。四月友人二十八名相諮つて、其の病床に「二十八人集」を贈つたが六月二十三日天才獨歩は遂に同所に於て逝いた。二十四日茅ヶ崎に於て荼毘に附し二十四日東京青山墓地に葬つた。享年三十八でこれからといふ時に他界したことは氏の爲にも文藝界の爲にも多大の損失であつた。人の眞價は棺を覆うて定まるといつたやうに、今日こそ氏も大に認められたものゝ生前の氏は殆んど其の力量を認められないで不遇のうちに逝いたのは同情に堪へぬ。これは「獨歩集」の序に自分もそれについて十分感じて居つたことが書かれて居る。即ち「予

の作物と人氣」といふ題の下に「予といへども予の作物が今の讀書界に於て人氣の多からんことを願ふものなり。人氣役者となりて不愉快を感じるものあるなし。若しありとすればそはヒネクレモノならざるべからず。予は幸にして未だ斯かる不具者たらず。而も不幸なるかな、予の作物は今日迄の経過によれば、人氣なるものなし。今の人氣作者に比ぶれば、只僅かに文壇の片隅に籍を加へ居るが如き觀あり、これ甚だ面白からぬ事といふべし。」と慨嘆して居る。併し又「斯くて思へらく、予の作悪しきかと、有體に言へば、予は否と答へんと欲す。當然の事なるべし、誰しも自ら悪ししと思ふ作を世に出す筈なければなり。若しありとすれば、文學者として大なる無責任ならざるべからず。予はかゝる文壇の不徳兒たるを願はず。既に自ら悪しからずと信ずる作物が、尙且つ今の人氣に投ぜずとすればこれ予にとりての大打撃なり、大痛棒なり、大閉口なり。何とか一思案なかるべからず。されど名案のあるべき譯なし。

要するに人氣を迎へて作る作者は人氣を得、人氣に頓着なくして作る者は時として人氣を得ることもあり、得ざることもあり、逆ふて作るものは遂に得ることなし。予は其の第二に屬する者にして得ざることもある部類なるが如し。「最後に唯詩人の本分としては人氣に頓着すること能はず云々と云うて文藝的良心と人間的欲望との苦闘を語り知己を千載に求めたのは誠に悲痛である。著書には「獨歩集」「武藏野」「渚」「濤聲」等の外數多くあるが、今は「獨歩全集」の中に凡て收められて居る。中でも「牛肉と馬鈴薯」「運命論者」「武藏野」等は取りわけて名高いものである。青年詩人國木田虎雄氏は獨歩の息であつて未來ある作家として期待されて居る。

高峰の雲よ
 高峰の雲よ、心あらば、
 乗せてもゆき、この我を
 大海原のただ中の
 人無き島に送れかし。

形は、そんなに寂しい。

×
 どんなに寒いと落葉するか。

鉛色の陰影陰影は冷い霧雨の様にはてしもない黒い土に、

庭池や木立や、枯草の胸に、

×
 悉く皺んだ睡蓮の葉の紫の掌に、

過ぎた日の緑玉は褪色しくづれてゐる。

眞裸な細枝の間に、

×
 蒼褪めた河原鴨は聲も無く掠め過ぎる。

冬よ。どんなに勞苦が

かくまで君を疲に封じたのか……。

どうして君が語り得よう、限らない昔話を、

今日の日も、私も、たゞ無言の散策者である。

現住所神戸市西須磨千森筋六四ノ六地佐々木方

故國澤新九郎

タニザワシンクロー(畫)

國木田虎雄

クニキタトラオ(詩)

かくてこの身は浮世より
 消え失すとも、この我は
 天地ひろき間にて
 人とし生きん、しばしだに

明治三十五年一月東京市赤坂に生れ、中學に這入つたが病氣のために半途退學の止む無きに至つた。其後各地を轉々して生活した。氏は有名なる文章家故國木田獨歩の息であつて、父の天才的血液は虎雄氏の脈管にも流れて、青年詩人として名をなすに至つた。其の作に詩「二つの季節」「明るい散策」「孤帆」隨筆「父を憶て」其他があり、著書に詩集「鷗」がある。

無言の散策者

冬よ、何と云ふ疲勞の極みなのか……。
 君がものうげに揺する、冷たい蒼穹の飾に、
 打顫えつゝ往き來る灰色の斷れ雲あゝ、其色々の

土佐の人、明治洋畫の開拓者、氏以前我國の洋畫家は密蛇油を以て繪具を溶解し、これを畫けるのみで學術的に修業したものでない。川上冬厓の如き唯其の理を書籍の上に讀んで之を講じたのみであつた。高橋由一、五姓田義松も亦英人ワグマンの新聞通信に日本風景を畫いたのを見て其の教をうけたに過ぎない。新九郎は始めて明治五年英京に渡航し油畫をジョン・ウキルカムに學んで歸り明治の初彰畫技堂を東京麹町區隼町に開きまた京橋區竹川町に洋畫展覽會を催して世人に洋畫の如何なるものであるかを知らしめようとした。門人に淺井忠、本多錦吉郎、西敬、守住勇魚等の名家があつた。後畫塾を本多錦吉郎に譲つた。明治十年六月歿し、年六十。

久保猪之吉

クボイノキチ(歌)

二本松藩士久保常保の長男で明治七年十二月二十六日福島縣二本松町に生れた。第一高等中學校に入學以來故落合直文の知遇を受けて文學界に歌や

文典に興味を持ち作歌に熱中した。三十一年頃醫科大學在學中友人服部躬治や尾上柴舟氏等といかづち會を起し和歌の革新を唱へ、讀賣新聞、この花、明星等に作品及意見を發表した。しかし三十三年十二月大學卒業後耳鼻咽喉科を専門とし次第に文學に遠ざかつた。氏は九州帝國醫科大學耳鼻咽喉科主任として聲名があり獨逸國出版萬國耳鼻咽喉科中央雜誌及萬國耳鼻中央雜誌の共同編纂者に擧げられ四十二年九州耳鼻咽喉科地方會を創めて其の會頭となつた。大正二年七月英京倫敦市開會の第十七回萬國醫學會列席のため再度渡歐し歐洲各地大學等を視察し翌三年一月歸朝、同年獨逸國伯林喉科學會「コルレスボンチーレンデス、ミットグリード」に推舉せられた。著書鼻科學三卷ある。絶えず學術上の論文を獨佛の専門雜誌に發表して耳鼻咽喉科學者として内外に知られてゐる。氏はかゝる専門の方面に多忙であるために文學上に於ける著作もまだ出さないが時に心の花や諸新聞に其の文を見ることがある。明治四十

五年大學内有志と共に文學雜誌「エニグス」を發刊して久々に同誌上に詩歌及譯詩を發表したが其雜法は大正四年に廢刊され従つて氏の文學上の發表を見ることも少くなつた。氏は餘技嗜好として蝶の研究史料の研究をやつてゐる。夫人ヨリエは閨秀作家として有名である。

現住所 福岡市大工町

窪田空穂

クボタウツボ(歌)

名は通治、明治十年六月八日長野縣東築摩郡和田村に生れ二十八年松本中學校を出て三十七年早稻田大學の國語漢文科及英語を卒業した。三十三四年の頃早稻田大學に在學中既に新詩社に入り清新の作風を以て鐵幹、晶子、以外別に一地歩を占むる作家として重きをなした。のち新詩社を退き中澤臨川、蒲原有明等と共に雜誌「山彦」を起して一旗幟を立て、三十七年早大卒業後處女歌集「まひるの」を出し晶子薫園について歌壇一方の雄と稱せられた。引き続き「空穂歌集」「濁れる川」

等の歌集を出した。靜觀的な心理的な非常にデリケートな作風である。尙小説にも筆を染め短篇集「爐邊」の作がある。雜誌「國民文學」を主宰して歌文の研究と後進の指導に従事してゐる。「十月會」といふは氏の率ゐる歌團である。右の外著書に歌集「鳥聲集」「朴の葉」「土を眺めて」「青水沫」の外古典の注釋、歌論文集各數篇ある。早稻田大學講師

竹むらの葉すき本すき春の月こぼるゝ見つゝ人とかくるゝ

さと落ちて楓のみどり薔薇のあけ暫し領じて風の隠るゝ

來ては倚る茗葉の蔭や鳥啼きて鳥啼きやみて靜寂にかへる

人とわれ黙しても立つ磯の上波まららかに走りて還る柳のかげ

つれづれにも人を見てうづくまりある宮の鹿ども

常磐なる八つ手の廣葉解け霜に濡れてさやけく

打ち重りつ
悲しみを心に持ちて冬空に眞白く立てる富士の
山見る

現住所 東京市外雜司ヶ谷龜原四

久保田金僊

クボタキンセン(畫)

明治八年京都市に生れた。名は滿昌。金僊は其號
幸野椋嶺、鹽川派の畫風を修め、後京都畫學校に
入り卒業の後上京して父米遷に學び、諸所の博覽
會、展覽會等で受賞し日本美術協會、日本畫會、
異畫會等の會員となり、文展へは第九回に「庭の
一隅」を出した。兄久保田米齋も亦名畫家であ
る。尙松坂屋吳服店意匠顧問となつてゐる。
現住所 東京市小石川區小日向台町一ノ二八

故久保田桃水

クボタトウスイ(畫)

京都の人。久保田八兵衛の男。初め横山清暉の門
に入り、後大阪に来て西山芳園に就く。更に東京
に出て、明治二十年、皇居御造營の節欄間に「芭

蕉の圖」を描き、二十四年、芝離宮洋館の天井に
「四季草花の圖」を揮毫し、三十五年、伊太利萬
國美術展覽會に「遊鯉の圖」を出品し、其の遠近
法に明らかなる筆力をもつて斯界を驚かした。三
十七年大阪に歸り、四十四年五月十八日逝いた。
日本美術協會會員。年七十一。

故久保田米遷

クボタメイセン(畫)

東京の畫家、嘉永四年京都に生れた。名は寛、米
遷は其號、別に錦鱗子の號がある。幼時より畫を
好み長じて鈴木百年に就いて學んだ。しかしその
家貧しかつたので師の學僕となり、薪水の勞餘を
嫌んで其技を修め、尙畫縁、繪具の料に乏いので
扇畫を描いて之に充てた。二十四歳の時業成り獨
立するに方つて南嶺の勢を得た、め筆を貿易畫に
染めて口糊を凌いだ。己にして京都美術の發達隆
興を計るため幸野椋嶺等と畫學校の設立を企圖し
竟に京都府立畫學校の設立を見るに至つて同校に
出仕した。十四年第二回内國勸業博覽會に出品し

て銀牌賞を受け爾來東京に寓し、二十三年佛國大
博覽會の開設に際し渡航して畫報を京都日報に投
後、二十六年米國に遊んで頗造詣するところがあ
り歸朝後國民新聞社に聘せられ、畫報を擔當し大
に名聲を揚げ、二十七年日清戰役に從軍し、二十
九年第四回内國勸業博覽會の審査員となり、三十
年石川縣石川縣工藝學校教授となつて翌年辭職、
三十三年遂に失明し、三十九年五月歿した。享年
五十五。其の子金遷、米齋共に有名な畫家となつ
てゐる。

久保田萬太郎

クボタマンタロウ(小)

明治二十二年十一月七日東京淺草區田原町三丁目
に生れ、慶應義塾普通部を経て同大學部文科を卒
業した。永井荷風氏の藝術的感化を受け享樂派的
傾向がある。短篇小説集「東京夜話」「戀の日」
「春ふる雪」長篇「末枯」戯曲集「淺草物語」「雨
空」「萬太郎戯曲集」等の作がある。いづれも江
戸人を主人公として舊江戸の情調を漂はしたもの

で哀婉な作が多い。赤木桁平氏より遊蕩文學者と
して痛棒をうけた一人であるが、氏の作は決して
遊蕩文學といふ一評語で罵倒し去るべきものでは
ないやうだ。尙ほ近く發表したものに戯曲「心ご
ころ」小説「入院」「夕日」等がある。氏は普通
部時代俳人岡本松濱氏につき發句を作り、後松根
東洋城氏の指導を受けて俳句をよくし、暮雨の名
で盛に句作に耽つたものだが今は傘雨と號して、
句樂會の牛耳を取つてゐる。其句に「燈籠や縁に
馴れ寄る夜の犬」「濡れそめて明るき屋根や夕時
雨」などがある。大正八年母校法科の作文教授に
擧げられた。
現住所 東京府下向島寺島村一七三六

久保田天隨

クボテンズイ(詩)

本名は得二、秋碧詩人の別號がある。家は信州の
人であるが、明治八年七月東京下谷に生れた。第
二高等學校を経て東京帝國大學文科大學に入り、
明治三十二年其漢文學科を卒業した。秀才で漢籍

明日紅滿_レ陽。江山萬里非_レ吾土。皇穹在上。臣過誰補。

軒轅臺

九州一割判_レ華夷。涿鹿歸來聲教熙。

登極當年旌_レ土德。趨廷百辟紀_レ雲師。

蒼黃牲玉饗_レ神罷。獻黼文章制禮宜。

臺上應龍今不見。雪花如_レ席北風吹。

氏は漢詩に於て詞藻豊潤、起伏頓挫筆墨老横の概あつて、時に磊々時に麗々、千萬言立ちに成るので、現今の詩壇では殆んど無人の野を行く趣がある。氏はまた俳句をもよくし大に誦すべきものが少く無い。

日は西に我影長き枯野かな

修業者の總髮白き師走哉

樓と樓の中を流るゝ春の水

戀も無し吾旅にして夏瘦せず

現住所 東京市外巢鴨町上駒込一三

久保よりえ クボヨリエ (歌)

の蘊蓄が深く兼ねて詩才も十分あるが言訥なること甚しいので一室に籠つて著書に従事して居る。「東洋通史」「朝鮮史」「支那文學史」「日本儒學史」「東洋倫理史要」「秋碧嶺盧詩鈔」等は氏の多くの著書の中で主要なものである。氏は長らく講義録と言はうか通俗讀物と言はうか六ヶ敷い漢文を一般に讀ませるやうな仕事に骨を折つてゐたので世間では一註疏學者位にしと思つてゐなかつたが近來は詩作に於て森槐南以來第一人者の觀がある。旅行好で國內の行脚は言ふ迄もなく支那にも數回行つて詩囊を肥やしてゐる。

吉野

幾載僧居作_レ闕庭、隔簾咫尺暮山青、

愁聽一派潺湲水、曾攪_レ龍牀御夢醒。

寺樓斜日磬聲幽、萬疊櫻雲盪_レ古愁、

返闕願_レ虛陵土冷、等閒白盡老烏頭、

魯山操

子規啼、聲何苦。煙已暝、天欲雨。

嘉木陰成。韶光無主。冤血灑_レ花。

愛媛縣宮本正良の長女で明治十七年二月十七日伊豫國松山市に生れた。幼い頃より文學繪畫に興味を持ち歌文を作つてゐた。大正元年以來寫生文小品文を書き同七年春始めて俳句に入門した。拐童氏の懇切なる指導と女史の熱心なる精進とによつて大にその進境を示してゐるが蒲柳の質で身體の虛弱なのは惜しい。園藝に興味を有し時に和歌や文章をエニグマ(今は廢刊)やほととぎすに發表し泉鏡花氏夫妻と交つてゐる。問題の人白蓮夫人が在福の當時親交のあつたことは多くの人の知つてゐるところである。醫學博士で歌人久保猪之吉の妻。

磯濱や五日ばかりの月かげにほのくくと咲く月

見草の花

繪の島のきしの岩より海ごしにいつまた見べき

富士の神山

現住所 福岡市大名町一〇五

熊岡美彦 クマオカヨシヒコ(畫)

明治二十二年三月茨城縣石岡町に生れ、大正二年東京美術學校西洋畫科を卒業し、文展へは第七回に「花屋の店にて」「かつらした」第八回に「靜物」「カーネーション」「椅子によれる少女」第九回に「母と子の肖像」第十回に「裸體」を出したる外に光風會、太平洋畫會等にも多く出品してゐる。

現住所 東京府下巢鴨三ノ二六

故熊谷直彦 クマガイナホヒコ(畫)

日本畫家、幼名を藤太郎、後兵衛と改め、終に直彦と稱し、篤雅と號した。文政十一年十二月京都に生れ、父を山本季金と曰ひ神職を勤めた。氏幼より繪を好み十四歳にして四條派の畫家岡本季彦の門に學んだ。季彦は岡本豊彦の高弟である三年の後季彦歿した。そこで師を他に求めず獨力を以て畫道を研精し、十七歳藝州藩士熊谷直左衛門に養はれ、京都に在つて高倉家に就いて衣冠束帯の故實を究め、又廣島に歸つて武技を學び、維新の

際一たび筆硯を擲つて國事に奔走し、明治の初廣島縣大屬となつた。十七年繪畫展覽會の開かれた時直彦山水人物を畫き出陳して優賞を受け、爾來博覽會及展覽會に出陳し褒賞を得たことは擧げて數ふことが出来ない。三十七年帝室技藝員を命ぜられ、又東京美術協會の顧問となり、嘗て帝室博物館長の命を受けて加茂競馬圖及月瀬梅花嵐峽楓葉の雙大幅を畫いて天覽に供した。直彦の畫は筆致出俗大に氣品に富むので以て有名である。資性沈黙で猥りに言笑せず、暇あれば筆硯を携へて四方を漫遊し、名山奇勝に遭へば畫囊に收め、足跡海内に遍かつた。大正三年二月八日年八十六才で歿した。

久米桂一郎

クメケイイチロウ(畫)

慶應二年八月佐賀に生れ、初め藤雅三に就て學び明治十九年佛國に留學してラファエル・コランの門に入り、二十六年黒田清輝と共に歸朝し、二十七年東京に洋畫研究所を起し、二十九年、黒田清

輝、安藤忠太郎と白馬會を組織し、又東京美術學校に奉職して教授となり、西洋考古學、解剖學を講じ、高等商業學校にも出勤してゐる。文展には第一回より第三回まで、第五回より第七回まで洋畫部審査員となつた。作品は明治二十八年京都内國勸業博覽會及び佛國巴里博覽會に出品して受賞したる外著述もある。氏は今年死んだ黒田清輝氏と共に現代洋畫界の元老で美術界の爲に努めた功勞は少くない。

現住所 東京府下大崎町上大崎六三二

久米正雄

クメマサオ(劇)

明治二十四年十一月長野縣上田町に生れ、福島縣安積中學校及び第一高等學校を経て大正五年東京帝國大學文科大學英文科を卒業した。脚本作家として「牛乳屋の兄弟」「三浦製絲場主」「阿武隈心中」其の他十數篇の戯曲がある。その多くは上演してかなりの成功を收めてゐる。小説を作り短篇「手品師」「學生時代」「痴人の愛」「弱き心」「母」

「銀貨」「就職辭職」長篇「螢草」「不死鳥」等がある。すべてに才氣煥發といふ風で作家中の健筆家である。翻譯には「沙翁名作選」がある。夙に芥川龍之介等と共に雑誌「新思潮」を經營し新赤門派の作家として望を將來に囑されてゐた。氏は漱石の門下生としてまた萬朝報の懸賞旅行記者として一高の學生時代に既に其才筆は知られてゐた。氏の父は御眞影燒失事件で自殺したが相當の詩人であつたから氏はその血を受けてゐるのだと言つた人がある。「彼女と私」は現代の青年男女の生活にピタリ合致した活々とした世界が現はれて氏に特有な「センス、アノド、センチビリティ」が隨所に活躍して長い物語を一氣に讀ましめるに十分な魅力を持つてゐる「痴人の愛」には劇に上せて注目的になつた「地藏教由來」以下得意の短篇十數篇を集め「破船」は作者の戀の懺悔録とも云ふべきもので、哀切沈痛を極めた長篇小説である。外に近く出したるものに「良友惡友」「或る求婚者の話」「和靈」「赤光」「猿の町」戯曲「牧

場の兄弟」久米正雄戯曲全集及び氏の隨筆集「人間雜話」等を出してゐる。氏はまた俳號を三汀と稱して盛んに句作もやる。又和歌も詠み、畫も巧である。

又も梅曇りぬと機に塵見る日

砂風呂の砂より熱き汝かな

つぬさ這ふ岩間を垂るゝ岩水の寒々として土わ

けゆくも

現住所 相州鎌倉大町

倉澤廣吉

クラサワヒロキチ(文)

慶應三年十月群馬縣新田郡内ヶ島村に生れ、幼時より學を好み郷里の學校を卒へて後舊館林藩儒古屋直氏に就いて學問した。その後飄然郷關を辭して上京し自營の傍小永井小舟氏等の門を叩いた。當時氏は新聞記者にならうといふ目的で大に研究を積み、爾來その目的を變ぜず奮勵した。明治三十年關東新聞即ち後の下野日々新聞衰微の極に達した時、氏は之を慨して押山長吉氏を社長に推し

自ら主幹となつて其の難局に當り辛苦經營忽ちにして社會の信用を博し關東東北有數の大新聞となつた。同新聞は現今金澤大谷諸氏の力によつて益々隆盛に趨いてゐるが、今日あるは全く押山氏の力によるとは云へ氏の敏腕と奮勵努力とによることは特記するまでも無い。

現住所

倉田 艶子

クラタツヤコ (劇)

廣島縣備後の國庄原町の人、「出家と其の弟子」の著者として青年崇拜の的になつた思想文藝家倉田百三氏の妹であつて、かねて文藝を愛好し理解と表現の天才を兼ね具へてゐる。著書「大雀命」について實兄百三氏の述べてゐるところは最も其の眞を得てゐるやうに思ふからこゝにあげれば「その本質的な點に於て豊富な點に於て、氣品を持ち潤ひに富んでゐる點に於て、今の日本の女の作家には珍らしい、素質を持つてゐる。正直なところ自分は「大雀命」の第一幕の蹴鞠の場や第

二幕の髪媛と大雀命との構會の場や第四幕の和紀節子の墓前の場等には可成の程度迄感心した。これだけ掲げる人は女には珍らしい氣がする。美しい叙情詩的空氣が豊かに満ちてゐる。且つ女には珍らしい鋭さがある云々。女史も百三氏のごとく健康勝れずして文筆に親しんでゐる。大正十一年四月帝劇で舞臺協會が百三氏の作「父の心配」を伊藤松雄氏の舞臺監督のもとに上演した時、女史は實兄と共に實演せしこともあつたが、かゝる劇的の才に於ても驚くべきものをもつてゐるとの評があつた。

現住所 東京府下大森

倉田 白羊

クラタハクヨウ (畫)

名は重吉。明治十四年十二月埼玉縣浦和町に生れ初め淺井忠に就いて學び、後、黒田清輝に移り、東京美術學校西洋畫科に入學して三十四年卒業した。曾つて美術雜誌「方寸」の編輯に従事し、文展へは第一回に「つゆ晴れ」第二回に「牡牛」第

四回に「小倉山の微雨」第六回に「川のふち」を出し、大正四年美術院同人となり、其第二回に「葡萄を採る男」第三回に「蝦蟇仙人」第四回に「草花」「へちまの家」「老漁夫」等を出した。氏が羊を描く爲に房州に羊を飼養し、其生活を實地について研究してゐるといふが、いかに自己の仕事に忠實であり、眞劍であるかがわかると思ふ。現に太平洋畫會員である。大正十三年三月春陽會第二回展覽會に出品の「獨鈷山の景」の如きはその表現の新鮮味とどつしりした山の描寫に腕の冴えを示してゐた。

倉田 百三

クラタヒヤクゾウ (劇)

廣島縣備後國庄原の人、同地中學校卒業後第一高等學校に入學したが、病氣の爲中途にて退學し、創作に従事した。最初一燈園に入り西田天香氏の門に在つて奉仕生活をやり又は宗教哲學文藝の書を耽讀して冥想に時を移してゐたが「出家と其の弟子」を出して世に問ふに及び天下翕然としてこ

れに靡くとも言つたやうに非常の讀者を得た。

これは親鸞及其子善鸞を取扱つた宗教小説而も事實を本にした宗教小説であるのと、現代の自己主義の醜我に飽きあきした人々の頭には、ロマンチックな、階級的な、形式的傳統的な宗教や諸々の權威に満足しなくなつた現代人には、その涙ぐましいほどに敬虔なそして愛にみちた上人の温い心に引きつけられぬものは無い筈である。氏は此の著によつて眞宗よりは親鸞を誤り傳へるものだとの非難もされ、又或人よりは眞宗とキリストの混合だと言つてけなされたが、一般人のこれに對する崇拜と讀書慾は少しも減殺されなかつた。後東京に於いて上演された時には、九條武子夫人は態々劇場の樂屋に於て倉田氏に對して眞宗宣傳の功果偉大なりとの意で感謝の意を述べられたやうに當時の新聞は傳へてあつた。山口高等商業學校講師グレンシヨウ氏はこれが英譯を試み The Priest and Disciples と題して、大正十一年東京北星堂より發行した。原著は教科書の中にさへ見るやうに

なつた。其後「歌はぬ人」「俊寛」「布施太子の出山」「父の心配」「静思」「超克」等を出して所謂倉田ものとして書店では讀者を多く呼んだものである。蘆花ものゝ時代が去つて漱石ものとなり、漱石ものより倉田有島武者小路三氏のものに移つたのであつた。氏は筆に一小説家に終らうとはせないので寧ろ一大社會改造家の理想をペンの力によつて實現しようといふ抱負をもつてゐるのである人を喜ばせることよりも人をして成るほど、思はせるやうなものを與へようとしてゐる。勞働問題などの論議にしても有島氏等とは絶えず論争をしてゐたが理路整然としてゐる。また氏の主張する精神勞働者のペン生活も肯定さるべきものと思ふ。尙ほ氏はレイゼドラマを主張し從來の見せる芝居を考へる劇にしようとするのである。それがため病軀を推して自分が舞臺に立つて「父の心配」其他を演出したこともあるほどで其の熱心なのは驚かざるを得ぬ。氏は藝術をもつて妻とするといふ決心をもつて家督を棄てゝ居るのを父は許さ

なかつたが、その後父も理解して、今日では氏の理想が父に容れられるやうになつたさうである。妹艶子も「大雀命」を著してゐる。

現住所 東京府下大森新井宿美奈見一一〇九

故倉田 柚岡

クラタユコウ(漢)

漢學者、名は績、初名朔太郎、伊勢下の庄の人、佐藤一齋の門人、紀州侯に仕へて和歌山に居た。明治六年同所小野町水門神社及吹上神社の祠掌を兼ね、帷を下して諸生に教授し、二十三年竈山神社社掌に任じ、從五位勳六等に叙じ、大正八年四月三日年九十三で歿した。特に從五位に陞せられた。

故倉田 幽谷

クラタユウコク(漢)

漢學者、名は施報、字は務郷、佐倉藩士立見直施の子、通稱直八、儒を安井息軒に學んだが藩侯學資を給與して昌平黌に入らしめ、業卒へて藩學の都講となつた。幽谷藩風の輕薄を疾み、且老臣に

忤ひ、姓名を變して倉田務と云つて信毛の間に遊んだ。上野吉井藩主に聘せられたが、廢藩の後東京に還つた。友人木原老谷によつて埼玉縣學に出仕したが幾くもなくして學制の改更に遇ひ再び東京に歸つた。明治三十三年五月廿九日年七十四で歿した。幽谷は和歌及び書畫を善くしたが書は小島成齋の風格を得たものである。

九里 四郎

クリシロウ(畫)

明治十九年一月東京麻布今井町に生れ、初め和田著作に就き、後東京美術學校西洋畫科に入つて四十二年卒業した。四十四年十月佛國に渡りイギリス、イタリー及び印度を歴遊して大正元年十月歸朝した。それより四年五月まで大阪に住み後再び東京に移つた。作品は文展第一回に「霧の椿冬の野」第二回に「藏」第四回に「老人」を出して數回三等賞の榮を荷ひ、大正三年二科會の創立と共に鑑査員に選ばれたが翌年脱し、其の第二回に「至陰」「奈良」等四點、第四回に「夏山」「老人

習作「奈良の秋」等を出陳して好評を博した。

現住所 相州小田原町十字四丁目七五四

栗田 興功

クリタオキノリ(文)

氏は水戸藩士興詩の長子文久二年五月四日水戸市に生れた。字は有情、湖東と號し、又暹睡庵、落花流水所主人、逐水草堂主人、十里庵缺一、無花廻舍、寔堂等の別號がある。父興詩武術を能くした。氏初め慶應明治の關久米幹文、彦阪水庵等に學び後鈴木重任の門に移つた。明治五年寺門謹に漢學を吉田慎一に英學を古川仁三郎に數學を學び八年佐々長徳の塾に入り塾長となり、又成島柳北に漢英二學を攻め、馬場辰猪の法學を修め、又佛人ゴープル氏米人ドクドル、ヂ、ペリン氏等の神學を修め兼ねて支那語、朝鮮語を學ぶ。夙に自由黨に籍し、爾來筆を千葉總房共立新聞、茨城新報常陽通志、水戸喜笑、演說叢誌、東海新報、奥羽日々新聞、實業繪入新聞、福原實業新聞、福島日報、明日新聞、宮城農商工協會雜誌等に執る。其

栗原古城

クリハラコジヨウ(譯)

明治十五年九月埼玉縣大宮町に生れ、東京帝國大學文科大學の英文學を專攻して三十九年卒業した。エマーソンの「偉人論」カーライルの「英雄論」「衣裳哲學」マーテルリンクの「死後は如何」「萬有の神秘」等の翻譯がある。

現住所 東京本郷區彌生町三番地ほ十六號

故厨川白村

クリヤガワハクソン(文)

本名は辰夫、明治十三年十一月京都に生れ、第三高等學校を経て東京帝國大學に入り三十七年其英文科を卒業した。第五、第三高等學校教授を経て京都帝國大學文學部教授となつた。大正四年米國に留學して六年歸朝した。留學の決定後重患に陥つて一時危篤を傳へられたが助かつたけれども、この時大手術をして一足を不具にした。「近代文學十講」「文藝思潮論」の外歸朝後に紀行や評論十數篇を集めた「印象記」及び「北米印象記」外

間實に十有餘年嘗て議論危激のため政談を禁ぜられ又尋て誹毀罪に觸れ禁獄三年に處せられた。氏もと繪畫を好み、獄中の娛とした。「しのぶ草」「遅睡雜著」「遅睡蟹譜」「同酒譜」「傳書鳩考」「松島考」「俳人列傳」「考古畫譜」「文人印譜等の著がある。氏もと書畫とも奇癖ありて左腕を用ゐ又香茶琴等の特技がある。

以前住所 東京市神田區西小川町二ノ二一

栗原玉葉

クリハラギヨクヨウ(畫)

名は文子。明治十九年四月長崎に生れ、東京に出て女子美術學校に入り、端館紫川に學び、四十二年卒業して寺崎廣業の門に入つた、文展には第七回に「さすらひ」第八回に「幼どち」第九回に「お鶴」第十一回に「身のさち、心のさち」を出した。爾來母校女子美術學校に教鞭を執りつゝ作製に耽つてゐる。門下に石田芳玉、西森綠葉、白瀬千代子、棚澤みつ子、丸山照子等がある。

現住所 東京市小石川區白山御殿町一〇

三篇を出した。氏の研究は文藝上のみならず社會の實生活や政治方面にも興味を感じてゐるし、その觀察眼も可なり鋭いやうだ。非常に能文達筆である。大正八年京大教授となり、博士に推薦された。著者は右の外「小泉先生その外」「象牙の塔を出で」」「英詩選釋」及び「近代の戀愛觀」「抒情詩選」「苦悶の象徴」等を出してゐる。氏は謂ゆるエッセイストであつて、隨筆體で頗る肩のこらない文中に氏の主義主張をよく表してゐる。

「近代の戀愛觀」の如きは可なり問題を惹き起した著書であつて、一時はこの書の讀者が研究會さへ開いた程であつた。氏の論は少しく極端なやうにも聞ゆるが、氏はその講演に於て言うてゐるやうに、世の中が理想的になれば必ずかうなければならぬといふのであるから、氏の自由戀愛論は何も驚き怖れる程のものでない。氏は筆の人であると共に辯の人でもあり、不自由なる足をも厭はず各所に出かけて講演などもやつてゐたものだが大正十二年九月一日の震災の時鎌倉に在つて海嘯に

さらはれ、それがもとで遂に絶命した。夫人蝶子女史は明治の名文章家福地源一郎氏の息女であつて夫君博士にも劣らぬ才人である。嘗つてPI會の幹事として有名なものであつた。

黑板勝美

クロイタカツミ(美)

長崎縣士族亡黑板要平の長男で明治七年九月三日生れた。東京帝國大學文科大學國史科を卒業し尋いで大學院に入つて我が國史の蘊奥を究めて文學博士となつた。四十一年學術研究の爲歐洲に渡航し歸朝後東京帝國大學助教授史料編纂官を経て大學教授となつた、氏は文筆に長じ國史に精通し我が國の建築美術を深し調査し其の結果國寶となり特別保護建造物となつたものが少くない。氏はまた演説に長じ政治的手腕があり勢力亦旺盛であつて古文書の研究等に於ても發明するところが多し。「歐米文明記」は渡歐中の見聞録であつて外國の事情を知らうとする者にとつて極めて好參考書である。

現住所 東京市麻布區筈町一五五

故黒木欽堂 クロキキンドウ(書)

名は安雄、夙に東京帝國大學に入つて漢文を專攻し、各地の中學師範學校等に奉職し、後東京帝國大學文科大學漢文科の講師となつて令名があつた。氏は金石文の權威者であつて楚辭や文選等はその最も得意とするところであつた。又詩作に長じ入木道は其の堂に入つてゐる。大正十年頃上田萬年博士と共に支那に遊び、魯鄒を廻り泰山に上り蘇州に遊んで歸つたが、後病を得て歿した。大正六年奈良女子高等師範學校夏季講習會に於て「朋張鳳翼の書論」によりて書道に關する講演を試み高評を得た。

寄國祝擬應制

祖德金甌固。邊籌威武揚。滄溟製鯨鱷。
關寒攘豺狼。冠帶會胡越。勛銘超漢唐。
春光解冰海。日彩照檳榔。令丙先諮詢。
夔龍列廟廊。居治不忘亂。國祚尙無疆。

十四年「美育社」を興して出版事業に従事し、雜誌「饒舌」少年雜誌「日本一」を發刊し、三十五年二六新報社に入り、大阪支局に勤めた。三十七年の役に朝鮮に特派され、三十九年同社を辭して光村合資會社に入つて雜誌「海軍」「笑」の主幹となり、大正四年東京毎夕新聞に入り八年之を辭して「文案考へ所」を興し十一年滿洲日々新聞社に聘せられて大連に赴き、後同社を退くに當つてハルビン、北京等を巡遊して歸り、大正十二年春中外商業新報社に入つて今日に至つた。氏は巖谷小波を中心とする木曜會の諸友と交り俳句を作り「南柯」「木太刀」等に時々發表して居る。著書に小説「大學攻撃」「滑稽旅日記」「新奥様」「滑稽ですわね」の外キツブリングの「ジャングルブック抄譯」「少女物語片多くば」「少年膝栗毛」「日本昔話續話」十四冊(小波氏と共編)「集金手紙」等諸種の著譯を公にして居る。
手を打てば橋にかつ散る紅葉かな
滿山の紅葉かつ散る鐘遠し

鹽溪山中雜作

群峰合脊上眉端、翠壁丹崖秀可滄、
回顧橋頭幾回顧、雲中身似駕虬螭。

(回顧橋)

百道清溪注一川、蠶叢會闢嶠中仙、
輪蹄容易指東去、雲木蒼茫古奧天、

(寒凄橋)

登岱

小天下矣古今同、登岱奇觀不負公、
多謝玉皇錫清福、雙懸日月一天中、

黒田湖山 クロダコザン(文)

明治十一年五月滋賀縣甲賀郡水口町に生れ、小學校を出ると京都の電信通信技術員養成所に學び、明治二十六年の春から近江の八日市三等郵便電信局の電信技術員となり、十八歳の時上京して巖谷小波の門に入り、二十一歳の春中央新聞社に勤務して親しく其の指導を受けた。三十三年從軍記者として北支那に渡り、秋歸つて同社を辭した。三

拍手や先づ元旦の音にして

刈穂積む車に團き月出る

鳴立つてやがて火ともる風の家

星一つ茅花が丘に鐘消ゆる

現住所 東京府下代々木南山谷二九五

故黒岩涙香 クロイワルイコウ(文)

名は周六、高知縣安藝郡川北村の産、高知縣士族黒岩市郎の二男、文久二年九月二十八日土佐に生れた。幼時大阪の英語學校に學び後成立學舎及び慶應義塾に學んだ。初め同盟改進黨新聞日本タイムス繪入自由新聞等に這入つたが後獨力で萬朝報社を起し萬朝報を刊行し遂に今日の盛運の基を作つた。思想問題並時事問題に對し常に一家言をなして社會の木鐸を以つて任じ、文章家としては徳富蘇峰等と匹敵すべきものがあるけれども論調は概して過激にわたつた。ユーゴーの翻譯「噫無情」ジューマの翻案「巖窟王」「鐵假面」「有罪無罪」「人耶鬼耶」等の外探偵小説の翻譯殆んど幾十卷

所謂「涙香もの」を以て一時讀書界を動かした事である。「天人論」は洛陽の紙價を高からしめた。「精力主義」も可なり讀まれた。氏の思想の根本は民主的傾向であつて一時は随分危険視されたが後幾分穩かになつた。世界大戦争に對しては平素の持論に反するやうな出兵論者であり憲政黨内閣の提灯をもつたといふ非難もあつた。大正八年渡歐して講和會議の狀況や戦後の歐洲を取調べて歸つた。氏の文章は概して明快徹底的のものが多い。

大正九年五月以來肺腫瘍症にて入院十月六日遂に永眠した。享年五十九歳。氏は夙に文筆に親み、大阪に居た頃、匿名で「大阪日報」に投書しその椽大の筆はどんな大家の覆面かと怪まれたが、それが僅か十六歳の少年黒岩氏であつた事がわかり當時大阪日報主筆關新吾氏の如き舌を捲いて驚嘆した。又二十歳頃より黒岩大と稱して新聞雜誌に筆を執りまた政治運動に關係して諸方に演説して歩いたものであつた。これで見ても氏は生れなが

らの文章と政治の愛好家であつたことがわかるであらう。詩も歌も時には作つてゐた。

車窓喜看水滿塘、四野雲低雨氣涼、

一路湘南三十里、秋風吹送稻花香。

故黒川眞頼

クロカワマヨリ(國)

上州桐生に生れ、明治二年大學小助教となり、後大學教授となり、文學博士の學位を得た。全國寶物取調委員、東京美術學校教授等にもなつた。美術に關する主なる著書は「考古畫譜」「工藝志料」等であるが、その遺著を集めたものに「黒川眞頼全集」といふのがある。明治三十九年八月七十八で病歿した。

黒木拜石

クロキハイセキ(書)

名は一二、明治十九年十月熊本縣球磨郡水上村大字湯山に生れ、中學校を半途にて退學の後殆んど獨學によつて今日に至つた。氏は廿一歳の時文官試験に及第して官途に就き爾來八ヶ年在官、大正

五年聘に應じて大阪商船會社に入り、現に同社に在る。幼より甚だ書道を好み、職務の餘暇をもつて専ら王羲之系統に屬する南派の古帖に就き研究した。氏は大正元年書道教授開始の後、入門するもの七百餘名に及び、内中等教員の資格を得たる者十數名ある。又社中として「墨池會」を起して之を主宰する外、書道奨勵墨華會發行の月刊書道雜誌「書道趣味」に時々有益なる入木道話を寄稿してゐるし、又その審査員に擧げられてゐる。氏の書は漢字によく假名によく、二書の調和また頗る其の妙を得てゐる。

現住所 大阪市北區西野田吉野東之町四四六

故黒田清綱

クロダキヨツナ(歌)

鹿兒島藩士清直の長男、天保元年三月二十一日同藩の城下に生れ、藩主齋彬に仕へ、同藩兵制の改革に力め、王政維新の際國事に奔走して貢獻するところ尠くない。文久三年遠竄に處せられたる西郷隆盛の宥免を乞うて幕論を一定しようと企て、

慶應二年幕府の使を論退し、三條實美等五卿を救つたごとき其功績の一つである。維新後東京府參事、教部小輔、元老院議員、貴族院議員、錦鷄間祇候、樞密顧問官等に歴任し勳功をもつて明治二十年五月特旨を以て華族に列し、子爵を授けられた。子夙に八田知紀翁に就いて歌學で修め、瀧園と號して詠吟に巧である。後錦鷄間祇候となり御歌所長心得となつたこともある。家集に「瀧のしぶき」「にはたつみ」等がある。帝國美術院長で西洋畫の大家黒田清輝氏は實に子の男である。

唐土の虎ふす野邊もいを安く旅ねする世となり

にけるかな

天地と共に久しき大御代も昔の今日ぞはじめな

りける

眞金地をはしる車のなかりせばいかで一日に千

里ゆかまし

君が見し田子の浦波沖津波明石の浦の下にやは

立つ

讀高山彦九郎傳

朝拜山陵夕紫霞。東西奔走布衣身。
誰知肉食縉紳外、別有勤王倡道人。

(和歌略統) 香川景樹—八田知紀—

若松則文
村山松根
前田宗恭
高崎正風
井上長秋
黒田清綱

生前住所 東京市麴町區平河町六ノ一四

故黒田清輝

クロダキヨテル(畫)

慶應二年六月鹿兒島高見馬場に生れた氏は子爵清綱の男で、明治十六年渡歐し巴里にあつてラファエル・コランの門に學び、二十六年歸朝し明治美術會を脱して別に洋畫研究所を設けた。これ後年の白馬會の濫觴である。二十八年春、京都に開かれた第四回内國勸業博覽會に婦人裸體「朝妝圖」を出品して我國に於ける最初の裸體畫問題を起した。二十九年東京美術學校に洋畫科の設けられた時久米桂一郎氏と共に入つて教授となり、活人の

裸體モデルを用ひた。

又此年、久米桂一郎安藤忠太郎等と白馬會を組織し、秋、十月日本繪畫協會と共に第一回展覽會を開き「小督」を出し第二回には裸體畫「智感情」を出し、文展には創立以來洋畫部審査員となり、第一回に「白芙蓉」第三回に「鐵砲百合」第四回に「荒苑斜陽」第五回に「百日紅」第六回に「習作」「木苺」第七回に「菊花」「足立軍醫總監」第八回に「もるゝ光」「其の日はて」第九回に「跡見刀自」第十回に「茶休」等を出した。又明治四十三年十一月、帝室技藝員を命ぜられて初めての洋畫技藝員となり、大正二年日本美術界各方面の大團結たる國民美術協會を起して其の會長となつた。現代洋畫界の重鎮で各方面に其の功頗る多く門下に岡田三郎助、和田英作等の多くを出した。大正八年帝國美術院會員となり、大正十一年森院長の薨後院長となり、大正十三年病歿した。
現住所 東京市麴町區平河町六丁目一四

黒田重太郎

クロダジユウタロウ(畫)

明治二十年九月大津市に生れた。淺井忠、鹿子木孟郎に學び、後、佛國に留學して彼の國の紹介に盡力するところ少くない。文展へは第六回に「尾の道」を出し、二科會第一回に「孟宗藪」「山の池」「自畫像」を出した。大正七年歸朝し二科會會友として今日に至つた。
現住所 京都市下鴨東林泉川町

黒田鵬心

クロダホウシン(美)

名は朋心、明治十八年一月東京に生れ、東京帝國大學文科大學哲學科に入つて美學を専攻した。數卷の「趣味叢書」「美術辭典」「美學及藝術學概論」「都市の美觀と建築」「日本美術史講話」「古美術行脚」等の著がある。「奈良と平泉」の如きも小冊子ではあるが實地踏査の上眞面目に書いたものであるから非常に研究上参考となる。文も平易で極めて分りよい。趣味普及會の主幹で兒童教

養研究所理事をしてゐる。元三越店顧問。

現住所 東京市赤坂區青山北町七ノ二

故畔柳芥舟

クロヤナギカイシユウ(文)

名は郁太郎、山形縣士族畔柳ぎんの長男、明治四年五月十七日生れた。同二十九年七月東京帝國大學文科大學英文科を卒業して大學院に入つた。同三十一年十月第一高等學校教授に任ぜられた。氏は高山樗牛、姉崎正治、佐々醒雪、大町桂月等と同窓であつて所謂帝大文科に於ける人物豊年の頃の産物である。大學院に在つては文學に現れたる植物方面を研究したものであるが博文館より發行の「世界に求むる詩觀」は楊柳詩美論、薔薇詩觀の發達等十七章から成つたもので氏の専攻方面の結晶である。この外「天才論」「文談花談」「向陵より社會へ」等の著書もあつて、文學界に貢獻するところ少くなかつた。大正十三年病歿した。

桑木嚴翼

クラキゲンヨク(文)

東京府士族桑木愛信の長男で明治七年六月二十五日東京に生れた。二十九年帝國大學文科大學を卒業して直ちに大学院に入った。同三十二年九月第一高等學校教授に任ぜられ文學博士の學位を得東京帝國大學文科大學教授を兼任した。三十九年京都帝國大學文科大學教授に轉じ後再び東京帝國大學文科大學教授に任ぜられて今日に至つた。令弟九大教授理學博士桑木或雄博士も篤實勤勉な學者であるが氏は一層篤實にして勤勉なる學者である。

カントに私淑しカント研究を以つて「日課の大部分を費し」生涯の事業としてゐる。カントに出發し新カント派に依りて發展させられた論理主義から文化主義なるものを唱へ出して論理派の哲學を主張する思想界一方の驍將で、カント前後の研究に於ては東大流石に此の人ありと言はれる。嘗つて思想家文章家として青年の崇敬するところであつたが、今は哲學の著書以外に文藝上の作はせぬ。嘗つて博文館で日本の十傑を投票した時に學

者の最高點として十傑の一人に數へられた事がある。四十年歐米に留學して一層見識を高めた思想を深くした。「哲學概論」「哲學綱要」「現代思想十講」「哲學と文藝」「カントと現代の哲學」「哲學大系」等の著がある。

現住所 東京市牛込區北町三四

桑名鐵城

クラナテツジヨウ(書)

京都の鐵筆家、慶應元年二月生れた。名は箕、字は星精、鐵城は其號である。又大雄山民の別號がある。又其印室を九華と號し、其閣を天香といふ。慶應元年二月越中富山に生れ、幼時郷儒小西有義氏について句讀と書法とを學んだ。しかし家が貧しいので深く學ぶことが出来ない。當時氏は好んで壁窩の大字を書いたので、神社の大旗を囁せられることが多い。氏は其潤筆を以て口を糊し餘あれば印篆の書を求め蠟石を購つて篆刻を試み遂に之を以て遠江に遊歴した。後山岡鐵舟の門に遊び劍道を學んだ。蓋し書法と刀法とは其理法に

於て一脈相通するものがあるからである。後越後飛驒能登に漫遊し廿四年九州北方心泉和尚の門を叩いて斯道を問ひ特に家を金澤に移し、苦筆一年餘説文金石等の要に通じ二十五年家を京都に移し爾來専ら篆刻に従事した。二十八年大本營より臺灣總督府の印を命ぜられ、三十年支那に遊び蘇の吳俊卿の門を叩いて篆法を訪うた。三十二年再び蘇に入り遂に其蘊奥を傳ひ且つ秦漢の印譜十數部を得て歸朝した。是より業大に進み秦漢の古法に通達して一大家となつた。

現住所 京都市下京區柳馬場佛光寺北入一六

ケの部

故桂花園桂花

ケイカエンケイカ(俳)

小字は正一郎、遠江掛川の人、幼より江戸に出て江戸室町三丁目なる幸島市右工門の養子となつた。竹我の門人となり初め綾守と言つたが後今の

名に改めた。桂花園紫曙堂の號を用ゐて都家俳壇の宗匠となつた。氏は家は由來算盤を嚮くを業としてゐたが、弱冠の頃昌平塾に學んで漢學を研究し、十八の時感ずるところがあつて斯道に志を轉じたのである。明治三十二年六月十六日七十才で歿した。

故下條桂谷

ゲシヨウケイコク(畫)

名は正雄。天保十四年七月出羽國米澤に生れ、明治四年海軍省少祕書となり一等屬海軍大祕書より同少書記官同主計監少。月督賣部理事官、横須賀鎮守府會計監督長、佐世保鎮守府主計部長、海軍主計學校長等を歴任して海軍主計大監となり、東京帝國博物館評議員、日本繪畫名譽會員、日本美術協會終身會員等となり、明治十二年佐野常民等と龍池會を起して以來美術界に盡した事が多い。門下に八木岡春山等がある。明治三十年貴族院議員となり、大正九年十二月一日七十九の高齡を以つて卒した。

生前の住所 東京市麴町區元園町一丁目四〇

毛束又太郎

ケツカマタタロウ(漢)

栃木縣の人、諱は義恭字は孔儉原學と號し、又三峯樵者、阪東居士、東海波臣、神龍洞士、山水觀主、東海文華書院主人、太明山洞道士等の別號がある。氏の父長兵衛義載は花山と號した。氏は嘉永二年正月二十八日安蘇郡下永野村(今上都賀郡)に生れた。幼名治郎吉、繼祖母の兄高瀬嘉内義綱の義子となり、文久二年復籍した。幼より圖畫を好み、歳十二の時已に俳句を作つた。十三歳で赤尾思敬に皇漢學の指導を受け、詩文を兼修し、周防の處士櫻井寛齋を家に請じて漢學を習ひ内藤兵部に兵法を肥後の處士原口文益に受け、詠歌を足利の罹麥園主人に質した。歳十八の春桑原五郎(金井之恭)薄井德之助(龍之)赤尾思敬等と上州新田岩松家を擁立し、仁和寺の令旨を得て攘夷の策を運らさうとし、幕府の嫌疑を得て暫らく身を江戸に潜め、又日光山に匿れて日光山學問所教

三一六

授岡田重助に漢學を受け名を又太郎と改めた。後大藏省に出仕して文を金陵翁に學んだ。十三年の頃周易を研究し學道大に進んだ。十四年牛山塾を牛込矢來町に設置し官暇をもつて國語漢文を教授し、當時既に「大學講解」「莊子和解」「孟子批文」「笠表諺語集」「文式譯擬」「照世杯」等の著がある。又「譯文用字辭書」を蒐校した。小山春山翁の如き最も深い交りがあつた。後栃木義塾の講師し葛生に移轉して門生を教養し、十七年「古文孝經」「鄭氏中經」「朱子小草」「文章軌範」「八家文」「詩經」等の傍解を書いた。十八年葛生に私立皇漢學東海文華書院を設置して校主兼教師となつた。これより各地を歴遊して古跡を探り、二十二年下都賀郡岩舟に徙り寓して巖舟學齋の講師を擔當した。二十四年再び葛生町に移住して時習學會講師を擔任した。此年佐野常民伯の需に應じて藤原秀卿の履歷を編纂し、二十六年別格官幣社唐澤山神社禰宜に補し、皇典講習所を再興してその講師となり、佐野常民伯の托に應じて唐澤山城

趾録を稿し、二十八年古城山學會を開いてその講師となつた。著書は前記の外「毛中城墟録」「見聞筆記」「楷書法」「佐野家歴代取調書」「唐澤山城戰爭記」等の外數種ある。
現住所

コ の 部

小池秋草

コイケシユウソウ(文)

本名は堅治、明治十一年四月福井縣福井市に生れ東京帝國大學文科大學獨逸文科を出て第二高等學校教授となり、翻譯並に獨譯等を出して居る。翻譯「フラウゾルゲ」「エグモンド」「マリアスチュアート」並に獨譯「舞姬」「倫敦塔」等がある。蓋し第二高等學校に於ては氏と同一方面の獨逸文學者の先輩にして、嘗て「みだれ髪」の名篇を出した登張竹風氏や、天地有情以來幾多の詩集を書いて定評ある英文學者で詩人の土井晚翠氏等が在

るのであるから、文學熱は相當高いでは無からうかと思はれる。

現住所 仙臺市消清水小路五〇

小泉迂外

コイズミウガイ(俳)

名は清三郎、明治十七年五月五日東京市本所元町に生れ、中學校卒業後家業に従事し、十九歳の時岡野知十氏と相知るに及んで諸種の新聞雜誌に寄稿した。氏は三十三年頃叔父なる淺倉屋主人に勧められて伊藤松宇の門に入つて新俳句を作り。傍ら古俳家の考究に没頭し、三十六年朱明氏と雜誌「サラシキ」を興して史的研究を鼓吹し、同志廢刊後史筆を弄して「卯杖」「高潮」等に發表してゐたが、四十四年松宇翁の「にひはり」創刊に際し、入つてその編輯に従事してあつたが、大正四年からこれと關係を絶つてしまつた。氏の句は嘗て「毎日新聞」「サラシキ」等に投稿したが、今は多く俳諧雜誌に發表してゐる。著書は料理に關するもの數種の外、演劇、謡曲、落語等に關して

三一七

各一種を出してゐる。

移り住む觀世が宿や風薫る

しみぐと二人で聴きし水鶏かな

現住所 東京神田區西繪田町一

小泉 鐵

コイズミマガネ(小)

明治十九年十二月十日徳島市に生れ、東京帝國大學文科大學哲學科に入つたが思ふところあつて中途で退學し創作や評論に従事し、「白樺派」の有數作家として其の才を認められてゐる。現に慶應義塾大學教授を勤め、全日本鑛夫總聯合會に關係し雜誌「白樺」の編輯に従ひ、多くの創作と評論を發表してゐるが、そのうち近く出したものについて見れば「一教師の失敗」「文選職工となるまで」「彼の生ひ立ち」「蟹」等がある。

ポオルゴオガンの原著を譯した「ノア・ノア」はセザンヌ、ゴッホ、と相並んで佛蘭西繪畫壇に於ける三大畫家と稱せられた斯界の大天才ゴオガンが南太平洋中の孤島タヒチに原始的自然人の生活

を求め、ブルジョアの文化より遁れんとした記録として同時に又彼自身の人間的記録をして現代人に何物かを暗示せずにはおかないものである。更にまた社會人類學にとつて貴重なる材料として見のがすべからざるものと言はれてゐる。

現住所 東京市外下灘谷三七二

故小泉 八雲

コイズミヤクモ(文)

氏は歸化日本人、元英國臣民である。一八五〇年アイオニヤ列島リユカデイヤ(サンタ・マウラ)に生れ、アイルランド、英國、ウエールズ、(及び一時は佛國)で成人し、一八六九年アメリカに渡り、印刷人及び新聞記者となり、遂にニュオルランス新聞の文學部主筆となつた。當時ニュオルランス博覽會の事務官であり後に兵庫縣知事となつた服部一三氏にあつた。一八九〇年ハーバード兄弟書肆より日本に派遣せられたが、この先知遇を得た服部氏は文部省普通學務局長の地位にあつて、其の好意で出雲松江の尋常中學校に於て英

語教師となつた。一八九一年の秋熊本に赴いて第五高等中學校の教官となり、一八九四年神戸に赴いて暫らく神戸クロニクルの記者となつた。一八九五年日本臣民となり翌年東京帝國大學に招かれて講師となり一九〇三年まで英文學の講座を擔任した。其の間實に六年七月、日本に關する著述十一部ある。新らしいものを求めるのは文人の通性であるがヘルンにとつては一生に通ずる特色であつた。幼時與へられたフランス製の美しい宗教畫を捨て、ギリシヤ、ローマの神話に讀みふけた傾向は、最後に西洋の文明を呪うて舊日本にあこがれしめたのであつた。後未見の友パウルに與へて讀書修養を論じた一節に「想像を強く刺戟するものでなければ私は讀まない。珍らしい不思議な變つた強い想像を有するものなら何でも讀む。無數の落葉で想像の地面が肥やされた後言語の花は無造作に咲く。想像力を豊富にするものに四種類ある。神話・歴史・小説・詩歌である。殊に詩歌は人間理想の結構とも人生の苦痛の壓力で出

來た金剛石とも云ふべきものである。詩歌には真によいものが少いから選擇は容易である。歴史では異常なる恐るべき不思議な方面ばかり。神話や小説では最も刺戟の強い變つたものばかりを求むべきである。しかし文章の鍛練には科學の研究がよい。天文學地質學人種學等の異常な事實を腦中に蓄積するに至らば必ずやその人は無數の比喩説明例證を得るに相違ない。これだけの修養を積みば人を感動させる文體は自然に得られる。云々というて居る。氏はかくの如く人に教へ自らも又かくの如き修養を積んだのであつた。

舊日本の文明を賞讃することは今日に於てこそ珍らしくは無いが、ヘルンの日本に來た當時は歐米人は勿論日本人の多數と雖も夢想しないことであつた。繪畫彫刻等に於て或點までは賞讃を惜しまない人はあつた。風景を贊する人もあつた。しかしながら文明全體を通じて殊に或點では西洋文明以上に賞賛した人はヘルンであつた。氏は翻譯に小説に紀行に論文に近世散文詩の大家であり没後

發表された書簡はクーバー、フイツジェラルド、メレデイスの書簡と共に英文學に於ける第一流と稱せられて居る。氏の英米文學史に於ける地は分類の内に入れられないほど一種特別なものである。著作には英文翻譯英文作の外「東洋に於ける第一日」「弘法大師の書」「地藏」「江の島への巡禮」「盆市に於て」「盆踊」「八重垣神社」「婦人の髪について」「英語教師の日記から」「幽霊とお化け」「生と死との片々」「石佛」「柔術」「祖先崇拜に關して」「人形の墓」「日本俗謡に於ける佛教の影響」「蟲の音」「蛙」「日本の古歌」「梅川忠兵衛の話し」等の外甚だ多くて一々枚舉出來ないが、「女の日記」は特に讀者を動かした。文學に關する主張は國家主義道義的傾向のものでその色彩特に濃厚であるから、今日の人々に喜ばれるものではなさうであるが、當時は多くの人の崇敬的であつた。氏はまた立派な人格者であつたことは大谷繞石氏が大學在校中一切の學費を貢いでやつたのにも見てもわかる。氏の傳記を詳細に知らうと

すれば田部隆次著「小泉八雲」を一讀するがよい。
尙氏の著書に譯註を施したものを東京の北星堂より發行したが其のうち既刊のものは
英語教師の日記と手紙(田部隆次譯註)
日本印象記 (落合貞三郎譯註)
東京からの手紙 (大谷繞石譯註)
蟲の文學 (同)
こゝろ (田部隆次譯註)
海の文學 (大谷繞石譯註)
等である。

故小出 榮 コイデツバラ(歌)

石見國濱田藩主松平右近將監の家臣松田三郎兵衛の四男で、天保四年八月江戸八町堀の藩邸に生れた。幼名は新四郎と稱し幼い時畫伯荒木寛畝について畫を學んだが中途之を廢して藩學官諭社に入つた。しかし學問よりも武藝を好んで槍術は寶藏院流の皆傳を受けるまでになつた。然るに十六

七歳の頃より歌道に志し、後鳥原藩の瀬戸久敬の門に入つた。二十歳の時當時給人である小出修去の養子となり大小姓より近習に拔擢せられた。其後藩主に從つて所領濱田に赴いたが幾もなく長州との戦が起つたので、幼主を守護して京都に上り其後江戸に至つて家令となつた。明治八年太政官十三等出仕を拜命し、十年始めて御歌所に入り、文學御用掛を命ぜられた。十七年京都に轉勤し二十年歸東し、二十四年吉野京都市行幸の供奉を命ぜられ、累進して御歌所主事になつたが晩年之を辭し御歌所寄人となり特に勅任の待遇を賜はつた。爾來朝野の歌人間に周旋して斯道の獎勵に努め當代第一流の歌人と稱せられたが、四十一年四月十五日病氣のため歿した。享年七十八。病危篤の報天聽に達するや破格の思召を以て正五位に昇叙せられた。性質頗恬淡、多能多才で繪畫を始め彫刻も亦頗強く三段を打つた。其の歌風は頗飄逸で即感即録敢て洗鍊を用ゐぬ。蓋し歌は天才である。

「暮るゝまで柳に見えし春風は梅の匂になりけけるかな」「我がために水波む妹があさかげのやせたる姿見ればかなしも」の二首は氏の最得意の作であつて歌學會に喧傳せられてゐる。尙此の外虎の尾もまづふみこえて幸をうといふ年をけふはむかへつ(年の始めに)
あまりにも瑕あらせじと思ふにぞま玉ははちさくなりけるかな(玉)
梓弓ひかぬ車をいかにして矢を射るばかり走りゆくらむ(自轉車)
くれわたる霞のうちに光なき月は見えながら春雨の降る(春雨)
かちならば田中のあぜもゆくべきを急ぐ車のまはり道かな(人力車)
青柳のかけ行く水は見えねども蛙鳴くなりおぼる月夜に(蛙)
蓄へてこゑもきく世となりにけり形見は鳥の跡ばかりかは(蓄音器)
といふやうに古い調子の歌もあればまた新らしい

題材をも多く採つて澤山に詠んでゐる。氏の書は頗る讀みにくいので有名なるものである。書體は松花堂其他を習つた上定家なども試みたと思はれるふしもあつて結局小出流の書となつたと見られる。短冊の書き方では氏は必ず兩行の間隔を澤山にとるので一寸見は可笑しいやうであるが熟した氏の水莖の跡は一種云ふべからざる味があつて現代の所謂書家とは大變徑庭がある。名の讀み方をサンといふ人もあるが、つばらと讀むのが正しい。

小出 檜重

コイデナラシゲ(畫)

明治二十年十月大阪市南區長堀に生れ、東京美術學校に入學して、大正三年優等の成績を以つて西洋畫科を卒業し、院展第二回に「夏の初夏」第四回に「夏の斜陽」を出し二科會へは第六回に「竹林」「Nの家族」「靜物」を出して名譽の樗牛賞を得た。氏は洋畫の外日本畫もよくして新浮世繪のやうなものも描いてゐる。大正十三年三月鍋井克

かけて中止した「天打つ浪」等いづれも得難い傑作である。氏頗る博覽強記、漢籍に國學に歴史稗史に若しくは彫刻俗文學等の變遷沿革等に至るまで一として通ぜざるなく、殊に佛教については造詣最も多い。氏の思想に佛教臭いところのあるのはその爲である。紅葉の歿する前後より文壇を退き一度聘せられて京大の國文科講師となり、徳川文學を講じたが、後東京向島の蝸牛庵に籠つて讀書三昧に耽り閑あれば碁を弄し釣を垂れ時に修養書類に筆を執る。「潮待草」や「努力論」は随分よく讀まれてゐるが、歴史小説「頼朝公」なども推獎に價するよい著書である。露伴叢書は氏の著書の大部分を集めてゐる。大正八年雜誌「改造」に「運命」を發表して以來再び小説に筆を染めるやうになつた。「幽情記」は支那古典に見ゆる多くの情詩中より特に感興ある十餘篇を抽出して叙述したもので玉のやうな典雅な行文上の技巧は氏のこの方面に於ける益圓熟を示してゐる。又「日本史傳文選」は史上の人物凡そ六百一種の名文名

之、國枝金二氏等と共に信濃橋洋畫研究所の實技指導者となつた。

現住所 大阪市南區鍛冶町五〇

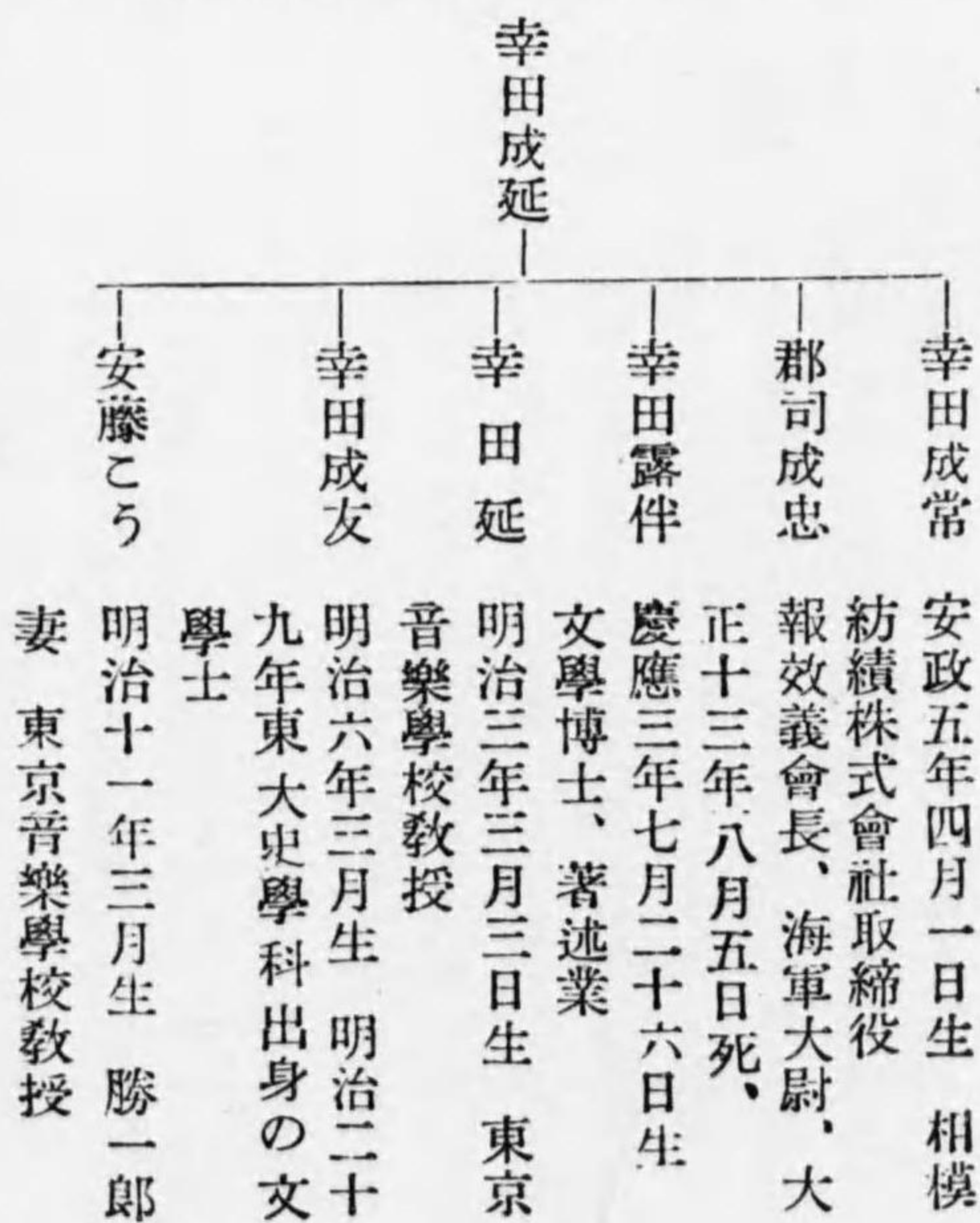
幸田 露伴

コウダロハン(小)

東京の人。名は成行。舊幕士成延の三男で慶應三年七月二十六日に生れた。相模紡績會社取締役幸田成常及千島開發者として報公義會會長郡司大尉の弟、文學士幸田成友氏音楽家幸田延子女史安藤幸子女史等の兄であつてこれといふ學歴はなくて殆んど自學したのである。二十三年「露團々」の一作を公にして文名大に上がり「一口劍」「風流佛」等を書くに及んで紅葉と並稱された。兩氏は何れも西鶴の研究より出發をしたが紅葉は寫實に赴き女性の描寫に力を盡し、露伴はそれに對して理想派の旗幟を掲げ、「五重塔」の一篇を出して文名一世を動かした。文章高渾、着想雄大「五重塔」は明治文壇不朽の名作である。ついで「二日物語」きくの濱松」「ひげ男」及び讀賣に書き

辭典を成してゐる。

(備考略系)



現住所 東京市小石川區表町

故上月 豊蔭

コウツキトヨカゲ(歌)

歌人、姫路藩士爲彦の嫡子、和歌を本居豊穎に學び、又書を善くし、明治十四年國幣中社海神社宮

司に任ぜられ、正六位に叙せられた。櫻花眞人と號し、三十三年十一月五日歿した。年六十一遺著に櫻園一枝がある。

故幸堂得知

コウドウトクチ(劇)

新聞記者、幼名庄吉、後平兵衛と改めた。父は加藤彌平と曰ひ世々上野輪王寺宮の用達を勤めた。得知天保十四年を以て生れ、少時俳諧音曲を學んだ。得知は其俳號である。維新後鈴木氏を嗣ぎ、三井兩替店に入り、累進して青森支店長に至つたが部下の過失に責を引き、遂に牙籌を擲で操觚界中の人となり、中外電報社員となり尋いて東京朝日新聞の客員となり、専ら劇評俳諧に筆を執つた。後新聞社を去り珍本蒐集に耽り、時に劇評を爲した。著書は「黄表紙百種」「大通世界」「幸堂滑稽」其他頗る多く南蕪二、饗庭篁村等と並び稱せられた。得知江戸趣味に深く、演劇故實に精しく、且つ俗曲に通じ、大正二年三月廿二日病歿した。享年七十一谷中三崎町金嶺寺に葬つた。

三二四

故河野小石

コウノシヨウセキ(儒)

儒者、名微、字は文獻、別に視庵と號し、安藝廣島の人、幼時驚風を病み、六歳まで口を言ふこと出来なかつたので父は之を憂へ乃ち手島三郎右衛門に託し試に句讀を授けしめた。のち言語を稍々發するやうになつた。十二歳頼事庵に従つて學び業大に進み、名聲亦大いに著はれ、遠近争ふて之を聘した。帷を倉橋島に垂れ、生徒に授けること五年、嶋人大に其德に化した。嘉永安政の間海内多事であつた。小石藩命を帯び山陽南海の形勢を巡察し、文久三年擢んでられて儒林に列し五人扶持を賜はつた蓋し異數である。翌年世子の伴讀となり、慶應二年幕府征長の師を起したが、長藩の兵攻波驛に在り小石藩命を奉じて立野一郎、河合三十郎等と二十日市に赴き、長州隊士に會見し説いて廣島を通過するなからしめた。後寺西繁人成川猪八郎等と藩政に預かり、明治元年命を受けて備後に至り、尋いで備中江原の營に屯し、二年兵

部省に徴せられたが眼疾のために之を辭した。後嚴島神社禰宜に任じ、神官僧侶説の幹事となり、六年廣島師範學校の教官と爲り、十年辭職後私塾を開いて子弟に教授したが來り學ぶもの甚だ多かつた。二十八年歿す享年七十二。

河野通勢

コウノツウセイ(畫)

長野縣出身の洋畫家で、二科會の第一回到「蛇の家」「裾花河」「村塾の跡」第三回到「長野の近郊」を出し文部省美術展覽會には第十一次に「自畫像」を出して名をなし、草土社の同人となつて岸田劉生氏の影響を受けてゐるところが少くないと言はれてゐる。大正十二年大震災後大阪に開かれた日本美術展覽會にはエツチング「妍華盛籠」「ロト、ソドムを逃る」「布施太子出城」を出して何れも入選し、エツチング「妍華盛籠」は特に岡田審査員の推薦によつて銀牌並に賞金五百圓を贈與せられた。これは洋畫中に南畫の味を十分出したもので一般の注意を惹いたものゝ一つであつ

河野桐谷

コウノトウコク(劇)

た。大正十三年三月春陽會の第二回展覽會に出品のデッサンなどは實に獨得の技を示して觀者の注意を惹いた。現住所東京市外長崎村荒井一八四一

名は讓明治十二年十月東京深川區仲門前町に生れ夙に文學に志し早稻田大學文學科に入つて劇の研究に力を用ひ、後秋田雨雀、桐山正雄等と共に美術劇場を起したることがある。現に國柱文藝會の仕事に従つて日蓮宗の宗教雜誌「開顯」を編輯し傍ら著作に従つて「廊の焼くる夜」「西行の娘」「業平」等の戯曲と美術に關する數種の著書を出した。數年前美術雜誌「畫堂」の主幹をしたこともあつた。尙最近に發表したものに舞踊劇「羽衣」「石橋」等がある。現住所東京市下谷區上野櫻木町三九

三二五

故幸野棋嶺

コウノバイレイ(畫)

名は直豊。棋嶺の外、鶯夢、長安堂、青龍館、六抑、北圃、金仙茶寮、如意山樵、三守蝸室、春風樓、雪の舎等の別號がある。弘化三年、京都四條安田治郎兵衛の三男に生れ、九才の時圓山派の大家、中島來章の門に入り、二十年後鹽川文麟に就いて四條派の畫を學び、兼ねて又神山鳳陽に漢籍を受け、前田暢堂、中西耕石等と來往して南畫の趣致を會得した。永く貧窮の内にあつたが後東本願寺嚴如上人の保護を受け、始て糊口の安定を得た。これより後進の誘導に力を盡し又京都府立畫學校に教鞭を執り、更に明治十九年京都私立繪畫研究會を設けた。明治十五年内國繪畫共進會審査官に擧げられ、二十六年帝室技藝員となり、二十八年二月病歿した。年五十二。「百鳥畫譜」「工業圖式」「花鳥圖譜」「棋嶺畫圖」「棋嶺菊百種」「千草の花」「亥中の月」等の著がある。何れも後學に資するところ甚だ多い。門下に菊池芳文、谷

口香嶠、三宅吳曉、竹内柄風、都路華香、川合玉堂、立松輝石等頗る多士濟々たるものがある。實に近代に於ける畫壇の巨擘である。

國府犀東

コクフサイトウ(詩)

名は種徳。加賀の人。有名な漢學者で内務省囑託として民力涵養に盡している。兼ねて詩を善くし、官用を以て各地に出張しては多くの吟詠を残してゐる。明治天皇崩御の際は氏は大喪使事務囑託を命ぜられたが、其時に發表した「靈柩供奉小觀」は立流な文章として評判高かつた。又外國に渡航して歐米の國情風景をも視察して歸つた。

調 伊勢神宮 恭賦

皇祖崇 祠萬古尊、 鈴川水潔未會渾、
只教靈鳥棲神域、 不許風禽宿禁園、
景雲深處謁神明、 老木參天寒翠清、
默禱瑤階如有應、 千年靈籟是天聲、
晦巖禪師屈錫同午餉賦贈
不比衡山煨芋肥、 小厨偏媿點心微、

留師卻喚醒酬味。

禪悅禪恬散宿脾。

日下勺水氏は之を評して句に深息あり筆に恠意無く東坡の餘響があると激賞してゐる。

辛酉歲朝賦得社頭曉

西映丘 雲東海雲、 生紅祠樹自在芬、
仰看瑞色鍾神苑、 擊出熙春第一斬。
瑞氣の毫端に溢れてゐるのを見る。

杜陵弔原一山墳

天入黃梅不見雲、 牢晴此日四無氛、
蕭條埜域人爭拜、 道是平民宰相墳、
鈴諸燕麥隴田重、 地似北歐多赤松、
風景尤優比公墓、 崢嶸巖手玉芙蓉、
瀟々精藍映夕陽、 題楣金字祭生光、
君蒿一路傷心切、 白髮英雄葬故鄉、
原敬氏の面目字句の間に躍如たるものがあるのを見る。

尙氏には「犀東文集」の出版あるが、其文は奔騰を以て優り、飄逸を以て鳴つてゐる。しかも其變化の多いのと筆端の窘促しない點は他の追隨を許

さぬものがある。中に紀行文、論說、美術論、漫録、美文、歴史談等がある。筆力頗る縦横で一時期に讀まれたものである。

國分青崖

附國分操子コクブンセイガイ(詩)

仙人の人、名は高胤、字は子美、一に太白山人と號し東京に在つて最も有名なる詩人である。明治二十七八年の役山縣大將に従つて遼東の征戰を賦し、又曾つて日本新聞社に在つて評林體の一派を創し「詩董狐」の著がある。氏は好んで各地に旅行するが、至る處數十首の詩を作つてゐる。これ速作多作詩人として著名な所以である。雅文會の顧問として、其詩は「大正詩文」「斯文」に寄稿して後進に範を垂れてゐる。氏の詩は殆んど口を衝いて出るやうであるが、腹案中の苦辛慘澹たるものは實に吾人の想像も及ばぬものである。

塔尾御陵

聞昔君王按劍崩、 時無李郭奈龍興、
南朝天 地臣生晚、 風雨空山謁御陵、

藏王堂

紫翠環周輦路空、 驚時未一著妍紅、
藏王忿怒何年歇、 颯起丹墀按劍風、

送田邊碧堂游支那

六朝高節憶陶公、 典干山河感慨中、
久道斯人眞隱逸、 安知其器本英雄、
古琴傳志世千載、 老菊傲霜秋一叢、
栗里柴桑君遍訪、 歸來囊裏起清風、

氏は田邊碧堂を送るにこのやうな詩を疊韻で二十
五首の多くを作つて、其の多作能を示してゐる。
館森袖海氏はその詩を評して「贈別二十五首、首
々精金玉、殊に佩服すべし、且つ贈別篇什是の
如く多きこと恐らくは前人未だ有らざる所なるべ
し云々」と激賞してゐる。

讀耶馬溪圖卷記疊韻九

頼君修史何所源、 青衿覽古幾句奔、
西游特愛馬溪勝、 圖描其眞文細論、
森森矗矗紫雲上、 玉筍簇立百千嶂、
道是天然黃大癡、 玩景不厭兩度訪、

天下何地無山川、 閩幽君此詡祖鞭、
君無馬溪自不朽、 馬溪有君名始傳、
當時騷客少游覽、 蹄輪不通蠶叢險、
山靈久待超群才、 只許君筆縱點染、
遷固文章議失得、 淺人不解具遠識、
葵花一片傾陽心、 托迹山紫水明國、
詞情豊蔚にして造語幽秀、尤に老手として推さね
ばならぬ。

懷舊似同人疊韻十三

讀書萬卷筆有源、 少壯何心徒競奔、
星陵吟友互標榜、 拍肩把臂詩屢論、
種竹瓣香王貽上、 懷古低回鏤雲嶂、
槐南品在錢吳間、 宰相徵詩時一訪、
吾性愛靜游山川、 肯趁羣俊爭彩鞭、
偶爾詩就亦言志、 虛名誤被江湖傳、
近修舊業務研覽、 生硬詰屈語逾險、
每遭詩問顏赧然、 慙汗不覺衣袂染、
兩漢六代溯不得、 菲薄稟性心自識、
安得雄如蒼海公、 揚風挖雅昌明國、

聲調高亮にして風情秀麗、確に現代詩壇の辯冠と
いうても溢美では無い。尙堀春潭の氏を詠んだ次
の詩は氏の人となりを知るに便があるから載せて
置く。

寄懷國分青厓先生

一代詩人青厓翁、 囊括大塊氣象雄、
秦漢爲經唐宋緯、 樸茂瑰麗得正宗、
豪懷鬱勃托逸興、 快鞭直驅八駿來、
只見行險如坦途、 心之所向手能應、
元輕白俗豈同流、 郊寒島瘦非其儔、
逸氣浩蕩搖五嶽、 風神遶上凌滄洲、
詞壇會見二三子、 牛鬼蛇神弄妙技、
海内詩風赴淫靡、 先生憂國名節砥、
浩歌白日氣軒昂、 不關世人喚爲狂、
狂乎未必離大道、 忠以爲衣信是裳、

太白山人の詩を添削する殆んど完膚無きに至るの
で、七絶をもつて得意とする田邊碧堂の詩集を縦
横塗抹して作者を驚駭せしめたとき、大沼枕山
の態度などとは反対であつて、意匠慘愴自ら經營

するもの、やうである。

夫人操子は落合直文門下の國學者で東京女學館の
學監を奉職して令名ある女流教育者である。女史
の歌に「君が代と共に榮えて天地の神の守れる大
八洲國」「立ちむかふあた浪もなし日のみ旗かゝ
げて進むいくさぶねには」といふのがある。

現住所東京府下代々木

故小坂芝田

コサカシデン(畫)

明治五年一月信濃國上伊奈の伊奈町に生れ、畫伯
中村不折氏と從兄弟である。七才の時同國松本に
移り、卿光生小室屈山の塾に入つて英語漢籍を學
び、後澁温泉兒玉果亭に就いて南宗畫及漢詩文書
道を習つた。苦闘の結果一家をなした。文展には
第二回に「深遠」を出して直ちに三等賞を得、第
六回に「秋爽」第七回に「幽邃」を出品して共に
二等賞を得た。又大正四年の日本美術協會展覽會
に「白雲積翠」を出して宮内省御用品となつた。
大正六年九月。年四十六で歿した。氏は支那の粉

本蒐集に努め唐宗元明清各時代に亘つて研究し、性質温厚廉直で精力も亦絶倫であつて、文人畫家中の大家と稱せられた。

故小坂象堂

コサカシヨウドウ(畫)

初め島村力松といひ、稜石、又は蟬山と號した。幼時より甚だ畫を好み、十才の時、出石窯の陶畫を巧みに描いて腕のある大人を凌いだと稱せられるほど神童であつた。明治十九年畫家を希望して京都に出で、不遇數年の後京都府畫學校に學び、更に東京に出で名家淺井忠の門に入つて洋畫を學んだ。斯くして聲名漸く擧り、終に東京美術學校助教授となつたが、三十二年六月逝いた。

小島鳥水

コジマウスイ(文)

名は久太、明治八年十二月讃岐國高松に生れ、横濱商業學校に學んで卒業後は横濱正金銀行員となり、榮進して今は北米桑港の同行支店長をしてゐる。それ故氏の文學的生活は全く有能忠實な銀行

員としての餘技である。初め「文庫」の記者となり評論紀行文を以つて名を知られた。最も自ら愛し自然の中でもとりわけ山岳の踏破と研とが道樂である。「不二山」「山水無盡藏」「雲表」「日本アルプス」等は氏獨得の山岳紀行文で山岳研究の好參考資料である。思想豊富筆亦自在であつて一方頭腦緻密科學的研究にも長けてゐる。氏はまた美術を愛し、日本の浮世繪の研究に於てはその蘊蓄殆んど専門家を凌ぐものがあり、その方面の著書も多い。前年廣重流行當時、遙かに米國より我が新聞雜誌に投稿して説明や紹介に努めたこともある。著書には前記の外、「日本山水論」「山水美論」「浮世繪と風景畫」等の論文集がある。

現住所 米國桑港、横濱正金銀行桑港支店内

兒島星江

コジマセイコウ(詩)

名は獻吉郎、岡山縣平民兒島東雄の二男で慶應二年六月二十日生れた。幼時家學を受け、邑久中學

春日雜誌

春日 何照々、 愁心與雲開、 紅霞散遠樹、
餘綺入樓臺、 鶯啼達四境、 蝶舞爲誰來、
高歌學玉斗、 豪興湧金罍、 百年醉鄉客、
人事付塵埃、
不醉芳春酒、 恐負青帝心、 芳菲連臺榭、
煙霞媚山岑、 蛺蝶尋花至、 黃鳥有時吟、
一笑對韶景、 尊酒不停斟、 外嶠且困望、
惠風入我襟、
現住所 東京市小石川區第六天町四八

小島德彌

コジマトクヤ(評)

明治三十一年七月二日京都市三條大橋畔に生れ、京都府立第一中學校を経て早稲田大學政治經濟科に入り、次いで文科に轉じて愛好する文學藝術の研究に力を用ひたが、中途より退學して約三年間博文館の訪問記者をしたことがある。大正十一年世界思潮研究會編輯に入つて今日に及んで居る。「父親と息子」(ツルゲネン)「最近思潮及び批評」

校を経て三島中洲翁の二松學舎に學び明治十九年東京帝國大學文科大學古典講習科に入つて二十二年卒業し、帝室博物館に出仕して美術史の編輯に従事し同三十一年八月第五高等學校教授になり四十二年一月東京高等師範學校教授に轉じて現に其職にある。漢詩文は氏をよくするところであり支那文學史は氏の最も得意とするところであつて、教壇に立つて一度講演を始めるや精に入り細に涉り比較論評し言々句々珠玉を連ぬるを見る。氏亦邊幅を飾らず物事に拘泥しない。老子の講義などもその無爲の教と氏の實生活とが渾一融會してゐるやうで生徒に感興を起さしめる。近年「韻文考」を提出して文學博士を授けられた。故文學博士三島毅は氏の師であり且つ親戚である。

歸京雜感

東都百萬戶、 飛薨連十里、 人々矜財賄、
闔城趨華靡、 甲第占景勝、 洞房何綺美、
朱門策白馬、 玉堂拖青紫、 乃知文明風、
一從黃金起、 黃金最尊時、 人情薄於紙、

(三冊)「現代主義十講」「最近教育思潮」「近代ロ
シヤ作家論」等の著書翻譯を多く出してゐるが、
其の多種多様にしてまた健筆なること實に稀に見
るものがある。近く書いた評論や感想だけでも
「批評家の立場について」「無産階級の藝術につい
て」「天才と民衆」「階級闘争と精神文化」「現代
文藝に現れた宗教思想を論ず」「プロレタリアー
トの文學」「豊島氏の反抗を評す」「藝術を生む
心」「社會生活と藝術」「最近の谷崎潤一郎」「民
衆運動と藝術」「藝術的價值と内容的價值」「須藤
鐘一氏の作風」「無産階級教化機關としての活動
寫眞」「人間哀史を読む」「有島武郎氏の生活と藝
術を読む」「小川未明氏の生活の火を読む」等實に
矢継ぎ早やに書かれて「秀才文壇」「早稲田文學」
「文章俱樂部」「文學世界」「演藝畫報」等の諸雜
誌及び各種の新聞に發表して居る。尙氏は「世界
パンフレット通信」の記者をして居る。
現住所 東京市外下戸塚六二六

卷ある。氏はもと慶大卒業後鼻山人の匿名で洒落
なことを書いて其の方面の讀者を喜ばせて居たが
八年以來は母校に在つてその得意な國文學の講義
をして生徒の信頼を受けて居る。「家」に取扱は
れてゐる百五六十年来も下谷に住まつてゐる老舗の
失敗、之を憤る大學出の息等がよく書かれてゐる
のは、氏の生活境遇から最も得易いまた熟知しき
つてゐる事象を取入れたがためであるかも知れ
ぬ。慶應義塾大學文學部教師。
現住所 東京市下谷區上根岸町一一〇

故小杉 榎 邨 コスギスギムラ (國)

天保九年九月阿波徳島に生れ、杉園と號し有名な
國學者であつた。幼時より古典の研究に耽り、
本居宣長の門人池邊眞榛について學び、幕末大に
勤王の大義を唱へて一時幽囚の禍を蒙つた。明治
二年十一月徳島藩廳國典學助教となり、次いで東
京大學古典科及國語傳習所其他諸學校に教鞭を執
り、得意の古典及考古學の一端を講じた。又別に

兒島虎次郎 コジマトラジロウ (畫)

岡山縣の人。明治三十七年東京美術學校西洋畫選
科を卒業し、後、永く歐洲に遊んだ。光風會員と
して同會に多くの出品がある。大正八年四月東京
及京都に個人展覽會を開き後直ちに歐洲に再遊し
た。氏は備中倉敷大原孫三郎氏の援助のもとに專
心研究に従事してゐるが、大正十二年帝展洋畫審
査員候補者の一人に擬せられた。嘗て個人展覽會
を開いて斯道の諸家に刺戟を與へたことも少くな
い。
現住所 岡山縣都窪郡倉敷町酒津

小島政二郎 コジマサジロウ (文)

明治二十七年二月三十一日東京市下谷區一ノ五な
る吳服屋の家に生れ、京華中學校を輕て、慶應義
塾大學部を卒業して文學の創作に従事し「睨み合
ひ」「一枚看板」「家」「法隆寺の歸り」「喉の筋
肉」「兄弟」「童話猫の島」等の外に御とき歌集二

考古學會を起して考古學の復興に力を盡した。廿
三年帝國博物館技手に任じ、臨時全國寶物取調局
書記兼鑑査掛を命ぜられ、又古社寺保存會委員と
なり、帝室博物館學藝委員となつた。後宮内省御
歌所に出仕して參候となり、東京美術學校教授と
なつたが、明治四十三年三月三十日病氣のため歿
しようとする時、帝室博物館評議員を命ぜられ勅
任の待遇を受けた。享年七十七。著書には「榮花
物語月の宴評註」「博物館出版美術史中書道の部
及稽古雜抄」等がある。その古典に造詣深いこと
は今更めて言ふまでも無い。夙に菅公を欽慕して
德行を磨き、書道に詳しく殊に古假名の研究を再
興して難波津會を設けた。大正の今日近世墮落し
た御家流が勢力を失墜して、尾上紫舟、岡山高蔭
阪正臣、大塚治六等の諸大家によつて貫之行成俊
頼等の古筆が宣傳せられるやうになつたその源は
こゝにあつた。又安政年間より死する數日前まで
の日誌は一日も之を缺かなかつたのを見ても、氏
が如何に一筋に思ひ入つて或種の研究に没頭する

だけの忍耐力があつたからわかる。しかもその日誌の中には美術考古有識古實等に關する有益な記録があるので見ても、氏の生活は學問そのものであつて他に遊戯的娛樂道樂を持たなかつたことが知られる。生前文學博士の學位を授與せられ其蘊蓄の深いことは氏に接したものの、皆等しく驚嘆するところであつた。土佐日記の研究等に於ては氏が實地について調査したのにも見ても其學究態度の眞剣なことがわかる。資性頗謹敬であつて討談長時間に涉つても決して情容が無かつた。

名所花

筆とりてしのふの岡、かきながす黒田の塘、きのふけふ、咲きてにほふ花、岡ごしの嵐吹きなば、川風の雨透ひなば、いかさまにちり亂れん忍ぶの岡、墨田の塘、嵐にも雨にもあてじ、昨日今日さきの盛りに、さきてにほふ花。

冬山

きのふまで錦を着つる木々やせてほねあらはなる今日のやま山

山殘雪

雪折の松の雫の音すなり都は今や雨かすむらむ

詠新年雪

新玉の年の初のけさの雪梅にさき立つ華やこの花

小杉天外

コスギテンガイ(小)

慶應元年九月十九日羽後國六郷町に生れた。父は豊治といひ氏はその長子である。家は農を業とし兼ねて醬油醸造絞油呉服太物商等を營んでゐる。氏名は爲造、天外はその號である。初め法律家にならうとして上京し英吉利法律學校に入學したが後感づる處があつて法律研究を思ひ切り、東京専門學校、中央學院、國民英學會等に學んだ。小説に志して尾崎紅葉、森鷗外の門を訪ねて斥けられ縁雨に逢つて其の門に學んだ。縁雨張りの諷刺小説「改良若殿」以下の作を公にし後「蛇莓」の一篇を出して世評漸く高く、更に「はつ姿」「はやり唄」も人生には美も醜もなく唯あるものは眞實

のみといふゾラの自然主義を日本に輸入した最初の作家である。次いで「新學士」「新夫人」「女夫星」等を出すに及び名聲益々揚り「魔風戀風」を出すに及んでその名聲は絶頂に達した。更に「コブシ」「長者星」等を出して相當の流行小説家ではあつたが、自然主義勃興當時より漸次文壇を遠ざかり今は主として通俗作家として新聞等にその老熟の技を揮つてゐる。「二人傘」は感覺的な方面に優れた描寫を見せた藝術として認められ、今や氏の藝術は極度の發展をしてすつきりこなれた美しさが現れて來た。最近には「伊豆の頼朝」「七色珊瑚」等を公にして氏の藝術の益々展伸してすつきりした美しさの加はりつゝある事を示してゐる。氏は其の創作にかゝるたびに必ず一世一代の作をなす。吾が骨を削り肉を殺ぐの苦を積む作であると云ふことを告白する。或人は一世一代の作が幾度出ると皮肉な冷笑を與へたことがある。しかもいづれの作に對してもそれ丈の熱心と意氣を以て努力を積ま

れる。藝術に對する天外氏の其の眞面目なる態度は尊いものである。

草の汁妹の腕に染めんと思ふ

現住所 東京市芝區白金三光町四六〇

小杉未醒

コスギミセイ(畫)

名は國太郎。明治十四年九月栃木縣日光町に生れ初め五百城文哉について洋畫を學び、十八九歳の頃東京に出て小山正太郎の不同舎に入り、後國木田獨歩の獨歩社に入り、二十七年日清役に従軍し四十年東京博覽會に「降魔」を出し、其後屢々太平洋畫會等に出品し、文展には第四回「杣」を出して三等賞を得、四十四年春の太平洋畫會には「白木蓮」を出した。文展に「水郷」「豆の秋」を出して共に二等の主席となり、大正二年歐洲に遊び、翌年歸つて再興日本美術院同人となり、又二科會に参加して爾來毎年その展覧會に出品したが大正六年、二科會を脱した。院展出品の主なるものには第二回に「黄初平」第四回に壁畫「山幸彦」

等がある。又著書に「畫筆のあと」「日本風景版畫」を出した。大正十二年大震災後大阪毎日新聞社主催日本美術展覽會の審査員となり、同十三年四月春陽會出品の「鶏頭花」は頗る好評を博した。現住所 東京府下田端五四

小杉余子

コスギヨシ(俳)

本名は義三、明治二十一年一月十六日相模國藤澤町に生れ、小學校卒業後直ちに事務練習のため藤澤銀行に入り、明治三十七年の春東京中井銀行に就職し、在勤九年の間各地に轉任し、大正二年埼玉縣粕壁支店長となり、同四年新設越ヶ谷支店長に移り、同七年忍支店長に轉じた。俳句に就いては石島雉子郎、靱山柑子、松根東洋城の諸氏に添削を受け、國民新聞盧子選に専ら投句してゐたが其後は「俳諧雜誌」「澁柿」等の選者に列してゐる。尙ほ氏の句は「新春夏秋冬」其の他の俳諧に出てゐる。

冬の月畑のくぼみに人家かな

鶏追うてうしろ暮れ行く冬木かな
親王のみぐしに寒し小野の雪
檜の雫春日々々の草の丈
機糸は藪まで張りて百千鳥
現住所 埼玉縣忍町

五姓田芳柳

(二世)ゴセイダホウリュウ(畫)

元治元年八月茨城縣猿島郡沓掛村に生れた洋畫家であつて、本名は持倉子之吉といふのである。五姓田義松、ワグマン・サン・ジョバンニ、カペレツケ等に學び、明治十三年、一世芳柳の養子となり、十八年二世芳柳を號した。二十三年、第三回内國勸業博覽會に出品し、三十三年、佛國巴里萬國大博覽會に出品して共に褒狀を得た。門下に徳永仁臣等がある。

現住所 東京市小石川區原町三〇

故五姓田芳柳

(一世)ゴセイダホウリュウ(畫)

本姓は淺田、初名岩吉と言つたが後屢々改名し又

他姓を冒した。父は富五郎と云つて紀州藩士であつた。文政十年江戸赤坂に生れ、七歳の時父を失ひ、本多莊兵衛に養はれた。莊兵衛の父人物畫を描くのでその感化を受けた。後井原國芳に就いて浮世繪を學んだが、十七歳の時外に遊び、五年の後歸つて樋口探日に狩野派を學んだ。之より先彼は長崎に於て和蘭畫を見て之を喜び、之を學ばんとして獨習數年に及んで遂に一新派を開いた。後横濱に移り、瑞西人スネルに其技を認められて其名忽ち高くなつた。明治六年畏くも明治天皇の御影を寫し、十年、西南役病院の圖を描き、十五年淺草公園に光彩會を建てた。十八年芳柳の名は義子に譲り、自ら柳翁と號して、米國に遊んだが、明治二十五年二月年六十六歳で病歿した。

巨勢小石

コセシヨウセキ(畫)

天保十四年九月廿八日京都に生れた。金岡三十七世の嫡流金親の男である。名は金起、小石は其號である。夙に家學を承け、佛畫は特に祖父金彦に

學び、年十三岸連山に就いて別に雜畫を修め、後南宗畫法を中西耕石について研究した。其間屢々遊歴して寫生を事とし、明治十一年清國上海に遊び、歸朝後京都府畫學校出仕、京都華族會館分局中畫學場教師、同府畫學教諭等に擧げられ、廿年京都府新古美術會に御臨幸の日揮毫して天覽を辱うし、二十二年東京美術學校教諭に任じ、更に教授に昇進し、二十五年コロンブス世界博覽會出品審査員を命ぜられ、又聖徳太子勝曼經講讚の圖を出して名譽賞狀及び紀念章を贈られた。二十七年病氣のため教職を辭して非職となつた。三十一年皇太子殿下京都へ行啓の時、美術館内に於て御前揮毫の光榮を膺ひ、三十三年二條宮離東溜間天井及び同所御張付御用畫を成功した。近頃の消息はよくわからぬ。

現住所 京都市下京區烏丸五條下ル

故五姓田義松

ゴセイダヨシマツ(畫)

安政二年江戸の三田臺町に生れた。洋畫家本朝油

全景、「ナイヤガラ瀑布」及「美人彈琴圖」等、
文展第一回には「水師營の合見」を出品して好評
あつた。

古泉千樫

コセンチカシ(歌)

名は幾多郎、明治十九年五月千葉縣安房郡吉尾村
細野に生れ、アラ、ギ派に入つて其の同人となつ
たが、これと言ふ學歷は無い。嘗て伊藤左千夫に
ついて歌を學んだのが今日の基となつたのであ
る。「竹里歌話」歌集「屋上の土」を出した外詠
歌は月々の機關短歌雜誌「アラ、ギ」に載せられ
てゐる。

みんなみの八峰八峽つぎつぎに黒雲なびき夕立
來る

夕立の雨に濁れる山河に沿ひつゝ行かむみちの
ともしき

ぬば玉の夜はふけにつゝ雨やまず未だも汽車は
國に入らぬかも
年まねく父のかたはらにわれあらずすべては今

繪の開祖の一人と言はれる五姓田芳柳の子で十歳
の時横濱に赴き下岡蓮城高橋由一等と共に英人ワ
グマンに従つて油繪を學び、業成つて明治七年東
京に歸つた。のち其の伎倆は人の知る所と爲つて
大久保利通の需めに應じて其肖像を描き、尋いで
宮中の御用を命ぜられ、英照皇太后及建宮の肖像
を描き又孝明天皇の肖像を描いた。十一年明治天
皇の北陸東海兩道の巡幸せられたとき、氏は奏任
待遇の畫師として車駕に隨ひ、沿道の名勝を寫し
尋いで警視廳の囑託となつて、西南の役警視隊三
船山攻撃の圖を描いた。此圖は後に九段遊就館に
保存せられた。十三年七月佛國巴里に赴きレオン
ボナーに就いて研鑽すること二年餘、英米を経て
二十三年歸朝してその年帝國議會開院式の實景を
描いた。氏は人となり名利に恬淡で人に阿らず、
且つまた佛國より歸朝後身體羸弱藥餌に親しむこ
と多かったので晩年境遇轉た落寞たるものがあつた。
大正四年九月四日横濱に於て年六十で卒した。其
の代表作は「明治天皇乘馬金華山」、「田子の浦

はすぎにけるかも

この夜頃寝ねがてぬ夜のつづきつゝ今宵も更け
て眼はさえにけり

丘をおりて道ひややけし白々と障子しめきりし
家に音なし

現住所 東京市赤坂區青山南六丁目一〇八

故小曾根乾堂

コソネケンドウ(篆)

通稱榮、長崎の人である、安政六年外國通商の日
に盛なのを視て波の平海岸僻遠の地を買ひ、山を
開き海岸を埋め、新に小曾根町を作つた。氏は人
となり俊敏強記書畫を善くし又尤も篆刻に巧であ
つて明治四年四月命を奉じて長くも御璽及國璽を
製作した。此の五月伊達宗城に従つて清國と通商
條約締結のことに與り、十八年十一月二十七日病
のため五十八で歿した。

兒玉花外

コタマカガイ(詩)

名は傳八、明治七年七月山口縣三隅郡大津村に生

れ、京都同志社、札幌農學校及び早稻田大學校の
前身なる東京専門學校等に學んだが何れも卒業せ
ぬ。夙に詩人として知られ「花外詩集」「行く雲」
「天風魔帆」等の著がある。熱列の調、華麗の句、
慷慨悲歌の詩は一時青年の間に愛誦されたもので
ある。時々太陽等に登載されてゐるが詩風は全く
氏獨得のもので表現は歌に於ける啄木といふやう
な感があるが、漲れる感情を感情としてでなく説
明的に取扱つてゐるのはちよつと見に浅いやうな
感がする。一口に言へば文語口語混合體の散文詩
とも言ふべきものだ。想即ち内容は常に國家的
社會的時事的のもので材を全世界に廣く求めてゐ
る。

白帆に寄する詩

あゝ大波のうねくゝや

旭日を孕む金帆は

七月佐久の白百合の

雲吹く風に揺る如し。

聞け赤銅の裸男、
浪も鎮る火のことば、
見よ、巖角に手を舞はし、
おゝ長髪の人立てり

驚く勿れ、漁夫の子ら、
大き丸帆にわが怒、
小き片帆にわが愁、
載せて駛けれや、茫千里

いかに其船、釣糸に
鱈、積んでは百石よ。
高き、美しを剣に獲ん、
古今ぞ抜ける海賊ぞ。

陸あるきはみ氷島や
舳の前に崩れ伏し、
魔帆むく影に諸々の
船は逃るゝ鱒かな。

巖にたばしる熱血に、
波も躍りて今急に、
行方は知らじ、たゞ勝利、
いざや帆を張れ、わが胸のごと。
現住所 東京市牛込區納戸町三

故兒 玉果亭 コタマカテイ(畫)

南宗畫の名家、信州下高井郡澁村の人壯年郷里を
出で、相州小田原の大雄山最乗寺に行き、住職畔
上梅仙に就いて禪學を修め、果亭は梅仙の徒弟に
漢學を教授した。在院數年のち京都に赴き、梅
仙の紹介に因つて、南畫の大家田能村直入の門に
入つて學び、其の堂奥に入つた。成業の後歸郷し
て隱遁すること實に三十餘年、第二回博覽會の開
かれたとき、傑作を出し、銀牌を得世を驚かし、
信州澁の山中に果亭あることを知らしめた。然し
氏はもとより天性恬淡、聲利を遠ざけ、常に門を
閉ぢて居たが人の畫を乞ふ者があれば快く揮灑し

た。そして其の潤筆料は多く公共事業に寄附し
た。氏は山水花鳥に妙でありその畫に一種の禪味
があつて頗る氣韻の高いものであつた。果亭別に
果堂、迂果、果道人等の別號がある。大正元年十
月病に罹り、十二月小田原に靜養したが、大正二
年一月十四日年七十三で歿した。門下に小坂芝田
菊池契舟、町田曲江、齋木修亭等の名家を出し
た。

故胡 鐵梅 コテツバイ(畫)

我が國に歸化せる有名な清國の文人畫家であつて
名は璋、堯城子、又、杖期生とも號した。支那人
だけに書畫ともによくした。明治十一年來朝して
名古屋に住すること數年。後、一度歸國して再び
來り神戸に住み、同三十二年五十二歳で病歿し
た。畫は南北兩派を折半して面白いものがある。
遺墨甚だ多い。

小寺 菊子 コデラキタコ(小)

富山縣富山市旅籠町に生れ、同地高等小學校卒業
後十七歳で上京し、高等女學校に入つたが、中途
で退學して英語數學の塾に通ひ、また教員傳習所
に學んだ。二十一歳の時文學で身を立てようとし
て、少女小説より次第に創作生活に這入つた。少
女小説集數卷、長篇小説「父の罪」「頬紅」「紅あ
ざみ」「愛の朝」「祖母」短篇集「百日紅の蔭」「十
八の娘」等の外短篇數十の多きに達して居る。女
史はもと尾島氏の出であるが、畫家小寺健吉氏に
嫁してより今の姓となり。趣味また繪畫にまで展
開し、大正二三年の頃から洋畫を研究し、同じく
六年出品して「鹽原の秋」を一點二科會に入選の
榮を荷ひ、同七年主唱して女子洋畫團朱葉會を起
して其の會員となつた。
現住所 東京市外大久保百人町三二九

小寺 健吉 コデラケンキチ(畫)

明治二十年一月岐阜大垣町に生れ、東京美術學校
に入つて四十四年西洋畫家を卒業し、大野隆徳、

後藤末雄 ゴトウスエオ(小)

明治十九年十二月東京に生れ、東京帝國大學佛文科を卒業した。帝大在學中谷崎潤一郎氏等と「新思潮」を發行し小説を公にして夙に其名を知られた。好んで東京下町の華美な生活を寫し文章の纖麗を以つて一時文壇の注目を引いた事がある。短篇集「死繪」の外長篇「朝餐」その他の作がある。又翻譯にビエル・ロチの「郷愁」ロマン・ローラの「ジャン・クリストフ」フローベルの「感情教育」外に「近代佛蘭西文學」等の著がある。會て陸軍教官となつたことがある。久しく廢刊してゐた帝大派の文藝雜誌「帝國文學」は氏の力によつて復活した。現に慶應義塾大學教授をしてゐる。

現住所 東京市本郷區彌生町三、はノ三號。

後藤宙外 ゴトウチユウガイ(小)

慶應二年羽後國仙北郡拂田村に生れた。父は三郎

富田温一郎等と赤鸞會を組織した。文展へは第七回に「秋近く」第八回に「淺草の夏眞晝」第九回に「水のほとり」第十回に「水郷の初夏」第十一回に「瓦焼き」其後「夏の庭」を出して幾度も褒状を得た。夫人菊子は小説家で又洋畫を描く。

現住所 東京府下大久保百人町三二九

小寺融吉 コヂラユウキチ(劇)

明治二十八年十二月東京に生れ、東京開成中學校を経て、早稻田大學英文科を卒業して創作に従事し「近代舞踊史論」の著書及び戯曲「安壽姫と厨子王丸」「眞間の手兒奈」「お竹大日如來」(ページェント)舞踊劇「をしどり」の外評論「舞踊界の新機運」「通小町失敗の記」「新舞踊の建設のため」「我が舞踊史の第五第六期」舞臺監督についての一異論其の他多くの隨筆を新聞雜誌に出してゐる。

現住所 東京府下豊多摩郡中野町上ノ原七六〇

右工門といひ、氏は其の次男である。通稱は寅之助、宙外は其號である、幼より帝都に移り住んだが、家計困難のため中途にて退學し活版職工をしたこともある。其後郷里に歸り先輩に従つて政治上の運動等をなし、後に知己朋友の扶助を得て再び上京し早稻田專門學校即ち後の早稻田大學に入り政治科を修めた。しかし政治科よりも文學に興味をもつてゐる氏は遂に文學科に轉じた。卒業後は専ら著作に従事して小説界に名を著した。氏は前期の「早稲田文學」記者となり、間もなく「新聞月刊」の經營に携り、同誌廢刊の後、新小説の記者となつて四十四年に至つた。夙に心理小説を以て一家を成し、また田園小説を以て當時の文壇に異彩を放ち、早稲田派の前期の作家として頭角をあらはした。また文士の田園生活論を主張し、自ら率先して之を實行したこともある。明治四十年前後自然主義の勃興した頃、登張竹風、泉鏡花等と結んで文藝會を起し、非自然主義の旗幟をたて、「新小説」によつて大に奮闘したけれども

大勢一木をよく支ふる處では無く、遂に失意文壇から遠ざかつて秋田の一新聞記者となつた。其の著に「ありのすさび」「闇の顯」「思ひざめ」「文學綱要」「裾野」「月に立つ影」「五日市」「かけるふ集」「徳川太平志」「上代王朝志」「秋田戊辰勤王史」等がある。

氏は不遇にして其力量を十分認められないで田舎へ隠れてしまつたやうだが、氏は嘗て人文誌上に於て高山樗牛の「詩歌と人體美」及「詩歌の所縁と其對象」の二長論文に對して書いた詰問的論文などは實に堂々たるもので、第一流の批評家に一矢酬ゆる其の勇氣は花々しく立派なものであつた。氏はまた短歌をよくして誦すべきもの甚多い。

とり入れの稻積車ひく父の先綱に立つうなゐ子あはれ。

粟かれてそはの根あかき野の末にもすの一聲なく秋の暮。
賤が家の壁のやぶれをぬる土はむかし小町の骨

にやありけん。
實盛の白髪なりけめ枯尾花のわきの後のすさまじくして。

盆栽のちいさき槭もみちしてしくれのあとを見
するこのころ。

植置きし人を偲へはさなからに古き昔を語る松
風。

現住所 秋田縣仙北郡六郷町大町二八

木島 櫻谷

コノシマオウコク(畫)

名は文次郎。明治十年三月京都市に生れ、今尾景年の門に入つた。文展には第七回に日本畫部審査員となつたがその作品には第一回に「しぐれ」第二回に「勝乎負乎」第三回に「和樂」第四回に「かりくら」第五回に「若葉の山」第六回に「寒月」第七回に「驛路の春」第八回に「涼意」第九回に「うまや」第十回に「港頭の夕」第十一回に「孟宗藪」を出して幾度も二等三等の賞を受けた。大正十四年帝展大改革の際擧げられて審査員とな

つた。

現住所 京都市外衣笠村

小早川秋聲

コバヤカワシユウセイ(畫)

名は盈鷹、居を唯一堂と稱する。明治十九年秋攝州藩主九鬼邸内に生れ、幼より畫を好み中學校卒業後美術學校教授谷口香囀に就き有識古實を又専門家に就き、佛學美學其他斯道に關して研鑽すること多年、蘊蓄甚深く、東洋美術研究の爲二年有半は露領より兩滿洲、蒙古路南蜀三峽の天嶮を越え、長江沿岸の古跡を探つて歸朝した。其の後文展に「木靈した後」「幕切利那」「寂光の都」等を出品した。各展覽會より受賞數回、曾先帝及び今上陛下に拜謁を賜ること數回に及んだ。帝國繪畫協會、美術協會、選審美其他の會員で攝州須磨關守畔に住み、陸軍騎兵小尉で、俳句を能くする。現住所 兵庫縣須磨關守畔

故小林愛竹

コバヤシアイチク(篆刻)

會を開き其遺墨を展覽したといふことである。

故小林 永濯

コバヤシエイタク(畫)

名は醇、字は士清、通稱は義介、別に布山と號して會津藩士である。幼時より書を好み、十二歳の時星研堂について筆法を學び、後法帖を閱して自得するところがあつてこれより書風一變した。元治元年京都蛤門の戦に藩軍に屬して奮闘し、戊辰の役會津に籠城して平定の後猪苗代に銅せられた。窃かに脱獄したが捕へられて獄に投ぜられた。出獄の後四方を漫遊し、越後新潟に於て篆刻を試み、又竹木金石に彫刻して口を糊した。赤貧洗ふが如く時に糊するもの無きに至ることあつても口に酒を絶たぬ。蓋し藝術家は佛國のボードレールにしろ支那の李白にしろ皆さうした氣分なものと見える。かくのごとくにして苦心自得遂に精巧の域に達した。この後三年の間金澤に寓し、更に福井に成りトして篆刻及書を業としたが、この時は既に其技術大に認められて、遠近より來り囁するものが甚だ多かつた。明治三十年十月四日年六十四にて病死した。愛竹性酒を嗜好し、朴訥不羈塵外に超然たるものがあつた。歿後友人達追悼

名は徳宜、通稱は秀次郎、鮮齊と號し浮世繪の抄手であつた。江戸日本橋魚問屋に生れ、十三歳の時狩野永恵の門に入つて狩野派の繪畫を學び、數年の後井伊大老に召されたが、櫻田の變後諸所に放浪しつゝ研究を勉めた。其後日本橋通四丁目に在つて、明人の筆意を研究する外寫生に努め、新機軸を出して一家を成した。明治の初年伊太利公使マルチノーをして垂涎措く能はざらしめたと云ふ神奈川神風樓の襖繪「左甚五郎人形を刻む圖」は一時に彼の名を高くした。主として版畫に執筆し「小兒遊戲圖」「萬物雛形畫譜」五卷、「永濯畫譜」等の遺著何れも得易からぬ良書である。明治二十三年五月江東柳島の居に逝いた。年四十八。門下の逸足に富岡永洗等がある。永洗も亦斯道の妙手として聞えてゐる。

小林古徑

コバヤシコケイ(畫)

名は茂。明治十六年二月新潟市に生れ、三十二年上京して梶田半古の門に學び、四十二年、安田靱彦、今村紫紅等の紅兒會に加入した。文展へは第一回に「鬪草」第六回に「極樂の井」を出したが大正三年美術院の再興第一回に「異端」を出して同人に推され、第二回に「阿彌陀堂」第四回に「竹取物語繪卷」を出してその特色を發揮した。大正七年日本美術院評議員となつた。大英美術館で宋顧愷之の模寫をなして、大正十二年八月六日外遊より歸朝した。十二年大震災後大阪毎日新聞主催日本美術展覽會の審査員となつた。
現住所 東京府下大森根岸一四五〇

小林鐘吉

コバヤシシヨウキチ(畫)

號は四絃。明治十年三月東京市に生れ、舊東京專門學校英文科卒業後、白馬會研究所を経て東京美術學校西洋畫科選科に入り、三十六年卒業し、四

十五年、中澤弘光、三宅克己、山本森之助等と光風會を起した。文展へは第八回に「大漁」第十回に「海女のむれ」を出した外光風會等に多くの作品の出品がある。跡見女學校、及び青山女學院教師を勤めてゐる。
現住所 東京府下中野町上野原九六一

小林臍齋

コバヤシセイセイ(俳)

名は宗平、明治五年十月十四日下野國栃木町に生れ、少年より月並俳句を作つてゐたが、日本新聞掲載の正岡子規氏俳論を讀み、大に感ずるところがあつた。二十九年頃より「流水」「櫻州」等の號をもつて投句し、三十年「ホト、ギス」の發行されし時直ちに其の讀者となり、臍齋、流水、團栗等の號をもつて三十五年まで投句を續けた。子規居士の歿後は一時句作に遠ざかつたが、四十年中復活し、「中外商業新報」に團栗、流水、山法師、竹の舎、椽の里人等の號をもつて四十二年まで投句した。其後は青彩の號をも用ゐて句作を續

け、大正五年以後は「澁柿」に盛に投句するやうになつた。氏の句は「新俳句」「春夏秋冬」「明治俳句」「中外俳句抄」「新選俳句大觀」、「最近新二萬句」「大正一萬句」其他に掲載されてゐる。

鳩杖に小松結びし子の日かな

太箸を集めて焚きぬ竈の下

お子良子や曙映ゆる齋粥

現住所 栃木縣栃木町萬町

小林愛雄

イコバヤシチカオ(劇)

明治十四年十二月東京市本郷湯島に生れ、東京帝國大學文科大學に入り四十四年英文學科を卒業して、戯曲、歌劇、音樂に關する多くの著書を出した。詩集「管絃」譯詩集「近代詞華集」「英詩選集」及び「現代萬葉集」「支那印象記」「歌劇名曲集」「西洋演劇史」等を出した。曩に「帝國文學」の主筆であつて、女子音樂學校の教授をやり、東京帝國劇場の依頼により歌劇の翻譯に當り、始め

てオペラを我國に紹介した。大正八年工場音樂を創唱して鐘ヶ淵、程ヶ谷其他の工場に於ける工男女に合唱せしめた。現に常磐松女學校長、早稻田大學の講師を勤めてゐる。
現住所 東京市本郷區向岡彌生町三はノ七號

小林萬吾

コバヤシマンゴ(畫)

明治三年十月香川縣詫間村に生れ、原田直次郎、安藤仲太郎、黒田清輝に學び三十一年、東京美術學校西洋畫選科を卒業した。四十四年、文部省留學生として、佛、獨、伊の三國に遊び、大正三年歸朝した。文展へは第一回に「物思ひ」第二回に「蔭のひかり」「孤花」第三回に「渡舟」第八回に「冬のセーヌ」「フレンツェ市、ボンテ・アラ・グラツェ」第九回に「磯茶摘」第十回に「漁夫と其妻」第十一回に「赤布を纏へる女」を出し幾度も三等賞を得、舊白馬會々員で第三回内國勸業博覽會及び一第四、第五回にも出品して受賞した。大正六年光風會同人となり、東京美術學校助教授、東京

高等師範學校教授であり、最近に帝展審査員候補者の一人に擬せられた。
現住所 東京市赤坂區新坂町六五

故小林清親

コバヤシヨシチカ(畫)

弘花四年江戸に生れ、幼より繪を好んで椿岳、是真、南嶺、曉齋等に師事し、後諸國を放浪し、明治八年、三度東京に歸つて英國人ワーグマンに洋畫を學び、東京風景版畫を出し、十四年に至るまで其の數實に六十五種の多くを出し、又「武藏百景」「日本名勝圖會」等の大部なものも出した。併し最も名あるものは東京風景版畫で、廣重が風景と相對して彼は風俗の傑作を残し大正四年十一月年七十で病歿した。門下に井上安次がある。

小堀鞆音

コボリトモノ(畫)

號は弦廻舎。元治元年二月下野國安蘇郡旗川村に生れ、川崎千虎に就いて古土佐に學び、東京美術學校助教授となつたが、明治三十一年岡倉覺三と

共に辭し、日本美術院に入つてその幹部となり、四十年再び東京美術學校に奉職して教授となつた。文展では第一回以來日本畫部審査員となり、故實に通じ有職に明に、古土佐の筆意を會得せる點に於て現代第一を以つて推さる。文展の出品は第三回に「旅路」第四回に「雄圖」があり、門下に安田鞆彦、磯田長秋、尾竹竹坡、尾竹國觀、小山榮達、太田天洋等がある。現に帝國美術院會員である。

現住所 東京府下日暮里谷中本一〇二三

故小牧櫻泉

コマキオウセン(詩)

名は昌業、薩摩の人、幼より學を好み、鹽谷宕陰の門に學んで業大に進み、遂に漢文作家を以て第一流に推されるに至つた。永年聖上陛下に漢籍を御進講申上げ、貴族院議員宮内省御用係、宮中顧問官錦鷄間祇候等の重職に在り、文學博士の學位を得た。
重野安釋博士の歿後、推されて説文會の會長とな

り、「雅文會」の編輯に與り其の作詩文は「大正詩文」「斯文」其他に寄稿した。「大學講義序」「仙壽山房詩文別鈔序」「宕陰先生碑成告辭」「書

阪井虎山詩文稿後」

雨中拜延元陵

中原北望戰雲凝

風雨千年猶有恨

北山道中有感

京洛多年兵火銷

獨在山中存舊朔

調音相祠

祠門下馬夕陽移

忠愛之情感千古

如瞻手捧御衣時

明治四十三年十二月六日東京帝大名譽教授重野成齋博士の歿後その碑銘を書いたが其文章極めて齊整にして質實、心和氣平にして少しも莊矜の色無く、洵に碑板の典型であり、近代希觀の文字である。久米易堂博士、土屋鳳洲、鹽谷青山、西村碩園博士、中村櫻溪、館森袖海、瀧川君山の諸家口

を揃へて激賞してゐる。大正十一年十月二十五日薨去した。

小牧近江

コマキヤンコウ(著)

本名近江谷嗣、明治二十七年五月十一日秋田縣土崎港に生れ、曉星中學校を経て、巴里顯理四吉校巴里法科大學を卒業して著作に従事し「クロルテ」「ロマン・ロオランとアンリ・バルビュス」等の著がある。又思想問題社會問題のやかましい今日眞に理想的社會の建設を目的としてゐる「種蔴社」に入りその同人となつたが、震災の打撃を受けた「種蔴社」を「新潮」級の文藝雜誌にして發行する運動をした。大正十三年四月労働會議政府委員囑託として伊太利ゼノアに行き更に文學研究のため佛蘭西にも行く筈である。
最近住所 千葉大原町大社境

小松原健吉

コマツバラケンキチ(著)

氏は明治二十七年二月十二日東京に生れ、早稻田